宮城県文化財調査報告書63集

東北自動車道遺跡調査報告書

Ⅱ

昭和 55 年 3 月

宮城県教育委員会
日本道路公団

序　　文

人間が地上に生活している以上、土地とは切り離せない歴史があります。土を踏まえて家を建て、盛土をして道となし、土を掘って用排水溝とするなど限りない開拓の歴史をくり返してきました。こうして祖先の築き上げた文化財も物によっては酸化し、腐朽し、あるいは後継者が絶え消滅してしまったりします。

ところが埋蔵された文化財は比較的その痕跡をとどめ、数千年を経た今日、われわれ現代人に当時の歴史を呼びかけてくれるものが多い。従って現代文化を確立するために、文化財とのかかわりが生じた場合は、文化財を国民共有の財産として積極的にその事実を記録し、現時点で知り得た祖先の歴史を子孫へ伝達していくことが、現代人の責務でもあると考えます。本報告書は東北自動車道関係遺跡発掘調査報告の第2冊目として「原田・御所内・宮下・手取・西手取・佐野・藤屋敷・赤鬼上」の8遺跡を収録しております。

ここに本書を刊行するに当たり、関係方々の御協力に感謝するとともに、遺跡に対する御理解をいただき、さらに学術上にも大きく役立つことを切に願っている次第です。

昭 和 55年 3月

宮城県教育委員会

教 育 長　北 村　　潮

目　　次

序文

調査に至る経過 …… 1

（1）御所内遺跡 …… 3

（2）赤鬼上遺跡 …… 39

（3）宮下遺跡 …… 69

（4）藤屋敷遺跡 …… 119

（5）西手取遺跡 …… 253

（6）手取遺跡 …… 253

（7）原田遺跡 …… 409

（8）佐野遺跡 …… 425

例　言

1. 本書は東北自動車道関係遺跡発掘調査報告書第 2 分冊として、8 遺跡について作成したものである。
2. 遺跡の記載は南から順に行なった。
3. 調査の主体者は宮城県教育委員会、日本道路公団である。
4. 発掘調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係各市町教育委員会、各学校教職員学生補助員の方々と機関に協力をいただいた。
5. 調査および整理において、東北歴史資料館ならびに宮城県多賀城跡調査研究所からご指導ご助言を賜った。
6. 石器の材質同定は東北大学助教授　蟹沢聡史氏にお願いした。
7. 土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。
8. 地形図は建設省国土地理院発行の 1/25,000 地形図を使用して複製したものである。
   御所内・赤鬼上遺跡ー「大河原」　宮下遺跡ー「仙台西北部」
   藤屋敷・手取・西手取遺跡ー「荒谷・真坂」　原田遺跡ー「築館」　佐野遺跡ー「金成」
9. 整理、報告書の作成は文化財保護課調査係が行なった。各遺跡の整理、執筆分担は次のとおりである。
   御所内遺跡ー太田昭夫
   赤鬼上遺跡ー阿部博志　黒川利司
   宮下遺跡――佐々木安彦
   藤屋敷遺跡ー加藤道男　佐藤好一
   西手取遺跡ー早坂春一　阿部　恵
   手取遺跡――　〃　　〃
   原田遺跡――阿部博志
   佐野遺跡――平沢英二郎　手塚　均
10. 上記遺跡の出土遺物および実測図・写真等の諸記録は宮城県教育委員会で保管している。

調査に至る経過

東北自動車道にかかる宮城県内の埋蔵文化財の取扱いに関する覚え書きに基づいて、宮城県教育委員会がその調査にあたった。

昭和 42 年 5 月、白石市から蔵王町間を皮切りに、仙台市以南の自動車道予定路線の発表があり、路線敷の遺跡分布調査を国庫補助事業として実施し、23 遺跡を確認した。また、この年に東北縦貫自動車道遺跡緊急調査対策委員会を発足させ、対策を講ずることとなった。仙台市から岩手県境までの路線の発表は、昭和 44 年 6 月から昭和 45 年 11 月まで 4 回にわたって行われた。仙台市以北についても分布調査を実施した結果 28 遺跡を確認した。

発掘調査は、昭和 45 年 2 月から東北自動車道遺跡緊急調査対策委員を中心に、考古学研究の学生などの協力に依存する形で開始されたが、こうした手段では遺跡が処理できない状態におかれたので、昭和 45 年 4 月、県直営事業として発掘を実施することになった。昭和 49 年度に至り愛宕山遺跡（宮沢遺跡）の発掘調査中に、道路公団から同遺跡周辺丘陵の土取計画が協議され、昭和 50 年度に発掘調査を実施した結果、古代城柵官衙遺跡であることが判明し、文化庁、日本道路公団との協議によって、一部精査の上、路線敷は施工方法や設計変更等をし、土取部分は埋めもどし現地保存策をとった。また、宇南遺跡は昭和 52 年、航空写真の観察から館跡の可能性が指摘され、試掘の結果、遺跡として追加した。

昭和 45 年に始まった発掘調査は昭和 53 年御駒堂遺跡の調査をもって完了している。

遺物整理については、昭和 54 年度から昭和 58 年度まで 5 か年を計画している。整理にあたっては、記録保存の性格を十分に配慮し、可能な限り詳細なデーターを作成し、資料提示をするよう努めた。

なお、報告書刊行後は、遺物・写真・実測図等の資料は、東北歴史資料館へ移管し保存・活用をはかることにしている。

調査遺跡位置図

(1) 御所内遺跡

目　次

Ⅰ．　位置と環境 …… 7
　1．地理的環境 …… 7
　2．歴史的環境 …… 7
Ⅱ．　調査の方法と経過 …… 11
Ⅲ．　発見された遺構と遺物 …… 11
　1．基本層位 …… 11
　2．発見された遺構と遺物 …… 13
　3．A・Bトレンチと出土遺物 …… 22
　4．畑地部分の表土および出土地点不明の遺物 …… 24
Ⅳ．　遺構・遺物に関する考察と問題点 …… 26
　1．出土土器の分類と年代 …… 26
　2．住居跡の構造と年代 …… 28
Ⅴ．　ま と め …… 29

調　査　要　項

遺跡所在地：宮城県白石市福岡深谷字御所内

遺跡記号：ＧＳ（宮城県遺跡地名表登載番号：02320）

調査期間：昭和46年4月20日～5月22日

調査面積：約2,000㎡

発掘面積：約520㎡

調　査　員：文化財保護室　係　　長　志　間　泰　治
　　技術主査　氏　家　和　典
　　技　　師　藤　沼　邦　彦・白　鳥　良　一
　　嘱　　託　小井川　和　夫・丹　羽　　茂

調査補助員：七　戸　貞　子

挿 図 目 次

第1図　深谷地区における周辺の遺跡……8
第2図　周辺の地形・グリット位置図……12
第3図　遺構配置図……13
第4図　Bトレンチ西壁断面図……13
第5図　第1住居跡と出土遺物……15
第6図　第1住居跡・出土遺物(堆)……16
第7図　第2住居跡と出土遺物(床)……17
第8図　第2住居跡と出土遺物(床)……18
第9図　第2住居跡と出土遺物(堆)……20
第10図　第3住居跡と出土遺物……21
第11図　A・Bトレンチ出土遺物……23
第12図　畑地部分の表土および出土地点不明の遺跡25

写真図版目次

図版1　遺跡全景……33
図版2　竪穴住居跡……34
図版3　トレンチの状況……35
図版4　出土遺物……36
図版5　出土遺物……37

表 目 次

遺跡地名表……9
石器計測表……25
破片集計表……31

Ⅰ　位置と環境

１．地理的環境

御所内遺跡は、白石市福岡深谷字御所内に所在し、白石市役所から北方約3.5㎞の地点に位置する。

遺跡の所在する白石市は、宮城県の南端にあたり、東西約19㎞、南北約17㎞の区画を有している。

白石市周辺の地形を概観すると、西側には奥羽山地帯とそれに続く山麓帯がある。これらは県内の最高峰である蔵王連峰（標高約 2,000m）を中心になだらかな山麓斜面からなり、東方に延びている。東側には標高約 300mの角田丘陵性山地が南北に連なっている。これらに囲まれて盆地状の白石低地が南北に細長く拡がっている。この白石低地は、西側の山麓斜面を開拆し、低地へと北流する白石川によって大きく二分されている。南部一帯は、周辺の丘陵から低地への移行が比較的急で、白石川左岸に自然堤防と湿地状の低地が広く分布している。

それと比較して北部では、白石川や白石川支流の小河川によって形成された扇状地、河岸段丘の発達が見られ、低地へ移行する。

遺跡はこの白石低地の北部にあたり、深谷地区にある。深谷地区の地形を見ると、西北部は青麻山などから派生する山麓がなだらかに延びている。この山麓には、児捨川や大太郎川など、いくつかの白石川支流河川によって複合扇状地が形成されている。この扇状地は山麓から東端まで約１㎞、南端から北端までは約2.5㎞程の拡がりをもつ。この扇状地の東端部には、白石川によって河岸段丘が数段形成されている。遺跡は、この扇状地の扇端部に立地している。本遺跡の微地形を観察すると、白石川へ向いゆるやかに傾斜しており、南、北が沢で区画され、わずかに舌状をなしている。遺跡内の標高は約50mである。南、北側の水田との比高差は約１mである。遺跡の現状は畑地と水田である。

２．歴史的環境

白石市内には現在まで約300ヶ所の遺跡が確認されており(宮城県教委：1976)、県内では最も遺跡数の多いところとなっている。中でも本遺跡の所在する深谷地区は、市内では最も遺跡の密集する地区で、現在まで77ヶ所の遺跡が知られている。ここでは深谷地区を中心に取り上げ、本遺跡周辺の歴史的環境を概観してみたい。

遺跡の全体分布をみると、その多くは白石川支流河川流域沿いと、これらが形成した扇状地上に分布している。また西方の三住部落などの山麓一帯にも遺跡の分布がみられる（白石市：1976）。旧石器時代の遺跡は市内でも数少ないが深谷地区では、高野遺跡、間内山遺跡の二ヶ所

第１図　深谷地区における周辺の遺跡

第１図　深谷地区における周辺の遺跡

遺跡地名表

地図番号	遺跡名	時代	地図番号	遺跡名	時代
1	御所内遺跡	縄文（早・中・後）、奈良・平安	36	高野原遺跡	奈良・平安
2	白山堂 〃	縄文（早）、奈良・平安	37	四ツ森 〃	〃
3	沢 〃	〃	38	ありはが 〃	
4	引桜 〃	縄文（中・晩）	39	東沢 〃	奈良・平安
5	館田前 〃	奈良・平安	40	下皿久保 〃	縄文（中）
6	明神脇 〃	〃	41	だんご沢 〃	縄文（早）
7	家老内 〃	縄文（前・中）、奈良・平安	42	上皿久保 〃	縄文（早）、奈良・平安
8	大黒天 〃	奈良・平安	43	大塚 〃	縄文（後）
9	鳥内 〃	〃	44	保原平 〃	縄文（早・前）、弥生
10	辰山 〃	〃	45	諏訪館跡	中世
11	笊内 〃	〃	46	地蔵堂遺跡	縄文（中）
12	堰下 〃	縄文（中）、奈良・平安	47	青木 〃	縄文（後）、弥生、奈良・平安
13	別当内 〃	〃	48	下館 〃	縄文（後）、奈良・平安、中世
14	長峰 〃	奈良・平安	49	三本木 〃	縄文（早・前・後・晩）
15	五輪坂 〃	縄文（中）、奈良・平安	50	三本木前 〃	縄文（前・後）、奈良・平安
16	堀切 〃	縄文（後）	51	上高野 〃	縄文（早・前）、奈良・平安
17	大廻野 〃	縄文（中）、奈良・平安	52	道内原 〃	奈良・平安
18	長久保 〃	奈良・平安	53	高野 〃	旧石器、縄文（早・前・中・後）、奈良・平安
19	曲木坂下 〃	〃			
20	松田 〃	縄文（早）、弥生、古墳、奈良・平安	54	荒井 〃	縄文（前・中・後・晩）、弥生、奈良・平安
21	前原北 〃	縄文（中）	55	白畑 〃	縄文（早・前・後）、弥生、奈良・平安
22	下見前 〃	縄文（前）			
23	湿ノ口 〃	縄文（前・後）、奈良・平安	56	間内山 〃	旧石器、縄文（前・中・後）、弥生
24	六角 〃	奈良・平安	57	上屋敷 〃	縄文（後・晩）、奈良・平安
25	一本木 〃	縄文、奈良・平安	58	岩見柴 〃	縄文（中）
26	襄毛 〃		59	六本木原 〃	奈良・平安
27	北畑 〃	縄文	60	風巻 〃	縄文（前）
28	北沢 〃	奈良・平安	61	鳥越 〃	奈良・平安
29	台 〃	縄文（中）	62	上屋敷B 〃	縄文（前・後）
30	大久保 〃	縄文（後）、弥生	63	牛子坂 〃	縄文（後）
31	八森山 〃	縄文	64	手洗沢B 〃	縄文
32	北原 〃	〃	65	六本木原B 〃	奈良・平安
33	手洗沢 〃	奈良・平安	66	中屋敷 〃	〃
34	砂畑 〃	弥生、奈良・平安	67	白山堂B 〃	縄文
35	赤沼 〃	縄文	68	上屋敷C 〃	縄文（早）

が知られている。両遺跡は標高150～200mで白石川支流河川の扇状地の上、及びその周辺の丘陵斜面に立地している。このことから一万年以上前からこの深谷周辺に人々が住みつき、生活を営んでいたことがうかがわれる（白石市：1976）。

縄文時代は生産の基盤が狩猟・漁労・採集にあったと考えられている。この時代の遺跡は、深谷地区では52ヶ所発見されている。その多くは白石川支流河川の形成した扇状地上、標高50～100mに分布している。本遺跡の北東約300mにある松田遺跡からは早期の竪穴住居跡が発見されている（宮城県教委：1972）。また、本遺跡の西500mにある荒井遺跡（佐藤・片倉・1958）、南西約3㎞にある蔵王地区の菅生田遺跡（宮城県教委：1972）からは中期の竪穴住局跡が発見されている。これらから、この深谷周辺が縄文時代の人々の生活にとって適した条件を有していたことがうかがわれる。

弥生時代は、旧石器時代以来の採集経済を脱却して、稲作農耕の開始された時代と考えられている。この時代の遺跡は深谷地区では8ヶ所発見されている。そのほとんどは白石川支流河川の扇状地上に分布している。本遺跡の南約 500mにある青木遺跡からは中期の埋葬遺構が発見されている（伊藤：1960）。また、荒井遺跡からは石包丁が発見されており、稲作の行なわれたことを裏づけている。

稲作農耕の開始は、生産力の増大とともに社会のしくみを変え、共同体の中に階級社会を成立させる基盤をつくったと考えられている。このような過程で支配者層が出現し、その権力の象徴としての古墳が築造されるようになる。深谷地区では古墳は発見されていない。周辺では白石川をはさんで南約4㎞のところに鷹巣古墳群（白石市教委：1972）がある。古墳時代の遺跡は、深谷地区で松田遺跡の1ヶ所のみで、この時代に遺跡の急激な減少がみられる。

奈良・平安時代になると、この地域も律令制度に基づいた政治体制の支配下に組み込まれるようになったことが、続日本紀の刈田郡建置の記載などからうかがわれる。この頃多賀城が陸奥の国府として設置されたが、この時代の遺跡は深谷地区では61ヶ所発見されている。そのほとんどは白石川支流河川の流域と、これらが形成した扇状地上に分布している。集落跡としては、青木遺跡、北約1.5㎞にある明神脇遺跡、北約1.8㎞にある家老内遺跡などがあり、それぞれ竪穴住居跡が発見されている（宮城県教委：1972）。中でも青木遺跡からは21軒もの住居跡が発見されている。製鉄遺跡としては高野遺跡、荒井遺跡、本遺跡の西南約 500mにある道内原遺跡などが知られており、これまでの調査によって各種の製鉄炉が発見されている（白石市：1976）。寺院跡と考えられているものに、本遺跡の西約1.7㎞に八宮地区の堂田遺跡がある（白石市教委：1971）。

中世の遺跡としては、本遺跡の北約1.3㎞にある諏訪館などが知られている。深谷地区では、一般の人々の実態を示すようなものはほとんど明らかにされていないが、周辺では本遺跡の北

約３㎞の蔵王町持長地遺跡から中世の建物跡が発見されている（白鳥：1971）。

このように深谷地区及びその周辺には、旧石器時代以来、中世まで連綿と人々が生活してきた痕跡が遺跡として数多く残っている。御所内遺跡は平安時代の集落跡であり、本遺跡をこのような歴史の流れに位置づけることができる。

Ⅱ　調査の方法と経過

東北自動車道の路線敷にかかる部分は遺跡の東端部にあたる。その面積は約2,000㎡である。東側は宅地により破壊され、北は杉林のため調査が不可能であったので、調査は南側の水田部分を含めた約1,040㎡を対象とした。まず畑地部分は路線敷の中心線を基準とし、それに直交する線を設け 3mグリッドを設定した。グリッドには中心線はアラビア数字、直交する線はアルファベットで表わすグリッド名を付した。水田部分は、遺跡の南側部分にあたるため、旧地形を把握する意図をもって、2×10mのトレンチを設定し、南側からA、Bトレンチとした。調査面積はこれらを合わせると約520㎡になる。

調査は４月 20 日から開始された。畑地部分は地表下 20～30 ㎝で地山上面に達し、その面から竪穴住居跡３軒が検出された。その実測図作成のため、路線敷の中心抗 163.80 ㎞の地点を原点とし、その西側をW、北側をN、南側をＳとして遣り方を設定した。水田部分は湧水が激しく調査は困難をきわめた。Ａトレンチでは、表土下 1mほどのところに大きな河原石が多数発見されたので、以下の掘り下げを断念し、Ｂトレンチにおいて層位の観察を行った。

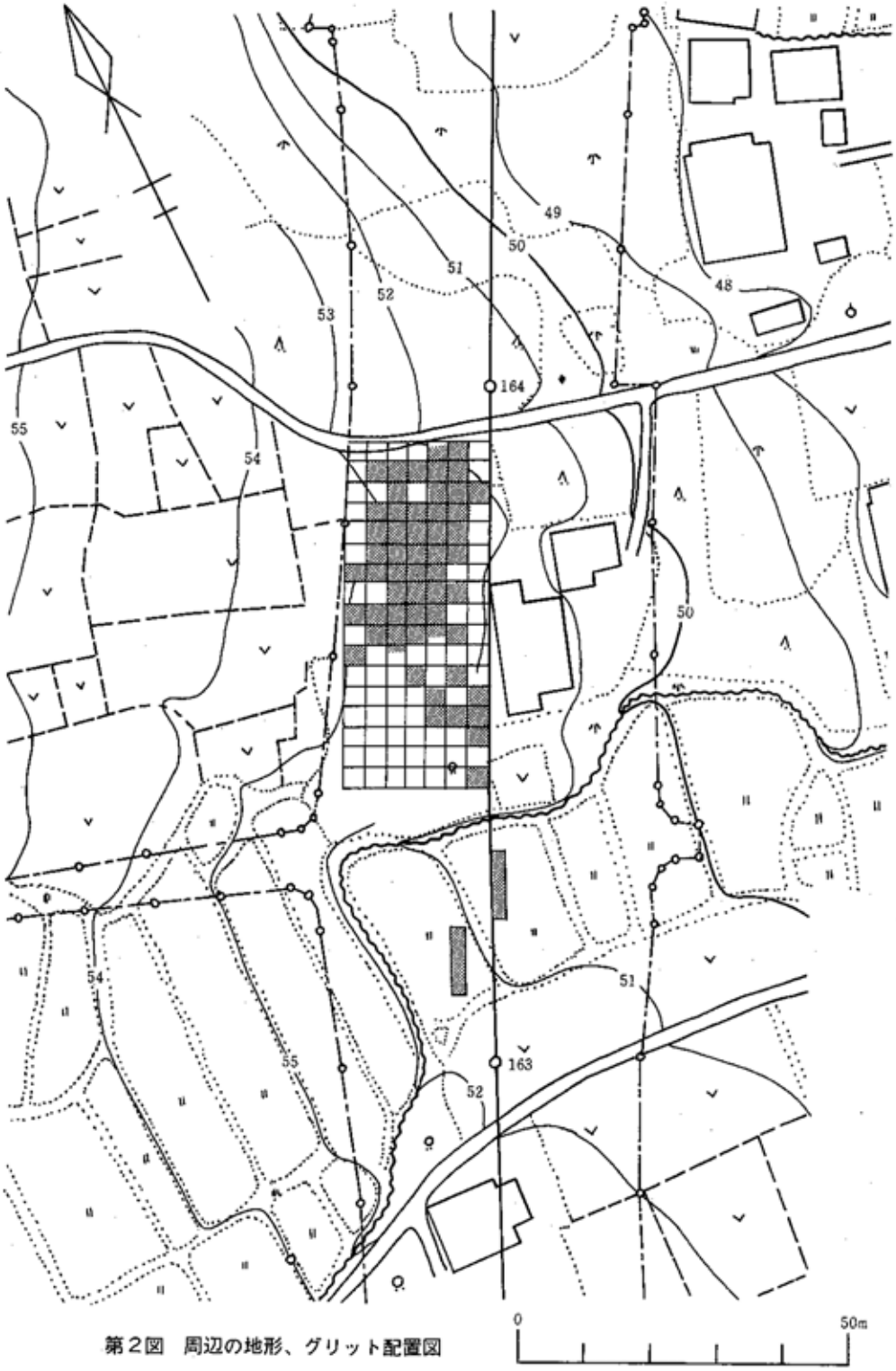
調査のすべてを完了したのは、５月 22 日である。調査結果を一般に公開するため、７月 17 日に説明会を開催した。

Ⅲ　発見された遺構と遺物

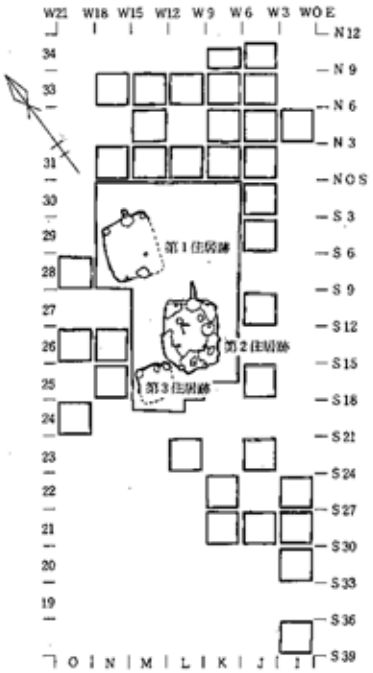
１．基本層位

〔畑地部分〕地山のローム上面まで１層みとめられた。現耕作土である。暗褐色を呈する。層の厚さは 20～30 ㎝である。

〔水田部分〕Ｂトレンチで観察した層位である。10 層みとめられた。第１層から第３層までは再堆積層である。磨滅の著しい土器片がわずかに出土している。第４層は粘土質の黒色土である。層の厚さは 30～50 ㎝である。この層の下面からは、土師器、須恵器が多く出土し、遺物包含層が形成されていた。第５層以下は無遺物層である。なお第４層以下は、粘土と砂の互層が続き、かつては浅い谷間であったことが推定される。



第２図　周辺の地形、グリット配置図



第３図　遺構配置図（畑地部分）

２．発見された遺構と遺物

発見された遺構には竪穴住居跡３軒がある。これらはすべて畑地部分の地山上面で確認された。いずれも削平が著しく、また斜面につくられていたため、輪郭を明確にし得ないものもある。

第１住居跡

〔重複〕みとめられない。

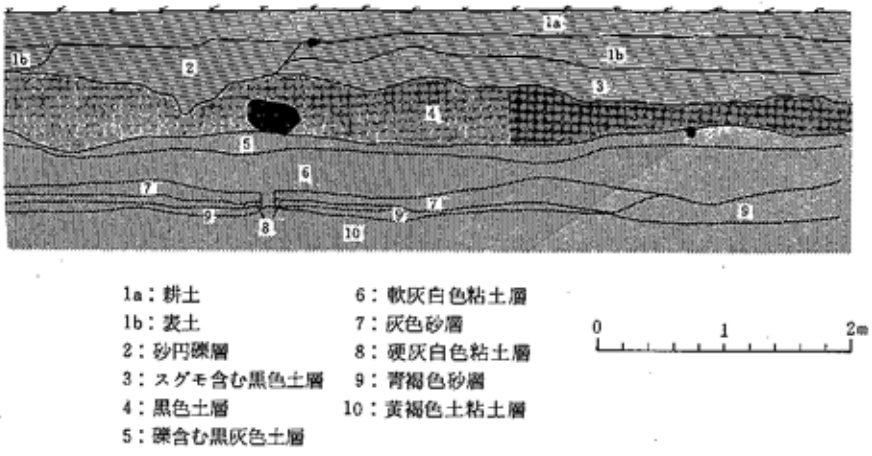
〔平面形・規模〕平面形はややゆがんだ隅丸方形を示すと思われ、規模は長軸約 4.4m、短軸約 3.7mである。

〔堆積土〕１層のみみとめられた。ロームまじりのかたい黄褐色土である。

〔壁〕地山を壁としている。東辺と南辺半分は削平されている。残存壁高は西側で約 10 ㎝である。

〔床〕地山を床としている。東側と南側は一部削平されている。床面はほぼ平坦で、非常にかたい。

〔柱穴〕ピットは、北西隅、北東隅、南辺付近などから６個検出された。これらのうちピット 1、ピット２は対応する位置にあり、柱穴と考えられる。その他のピットは、配置に規則性が



第４図　Ｂトレンチ西壁断面図

みられず柱穴がどうか不明である。

P.No.	P1	P2	P3	P4	P5	P6
床面からの深さ（cm）	20	34	24	22	27	20

〔周溝〕みとめられない。

〔カマド・炉跡〕カマドは北辺のほぼ中央部においてみとめられたが、削平のためほとんど原形をとどめていない。焼土を除くと、床面から約10㎝ほど掘りくぼめられた燃焼部がある。側壁はすでに失われていた。付近には浮いた状態で焼けた河原石が残っていた。また燃焼部の西側には抜き取り穴と思われるピットがあり、これらから石組のカマドであった可能性がある。燃焼部からゆるやかに立ち上がり煙道部に続く。煙道部は長さが約70㎝、幅が約40㎝残っており、途中に3㎝程の段がみられる。床面のほぼ中央部に径20㎝前後の焼面が認められたが炉跡の可能性がある。

〔出土遺物〕本住居跡に伴うと考えられる遺物には床面出土の土師器、須恵器がある。堆積土出土遺物には、縄文の施された土器、土師器、須恵器、赤焼土器がある。図示の不可能な遺物については、破片集計表に示した。

〔床面出土遺物〕

土師器

坏（第5図1～3）いずれも製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。器形は内弯ぎみに外傾するもの(1)と、直線的に外傾するもの(2)がある。底部の残存する1, 3は体部下端から底部全面に回転ヘラケズリの再調整が加えられている。また、2の体部下端にも回転ヘラケズリの再調整が施されている。

甕（第5図4、5）4は、体部から内弯ぎみに立ち上がり、頸部で屈曲し、口縁部が外傾するもので、体部と頸部の境にかすかに段がみとめられる。5は、体部から直線的に立ち上がるものと思われ、頸部で屈曲し、口縁部が外傾するものである。ともに器面調整は、口縁部内外は横ナデ、体部内外は刷毛目が施されている。なお、他に図示できなかつたが、底部外面に木葉痕のみとめられる甕の破片がある。

須恵器

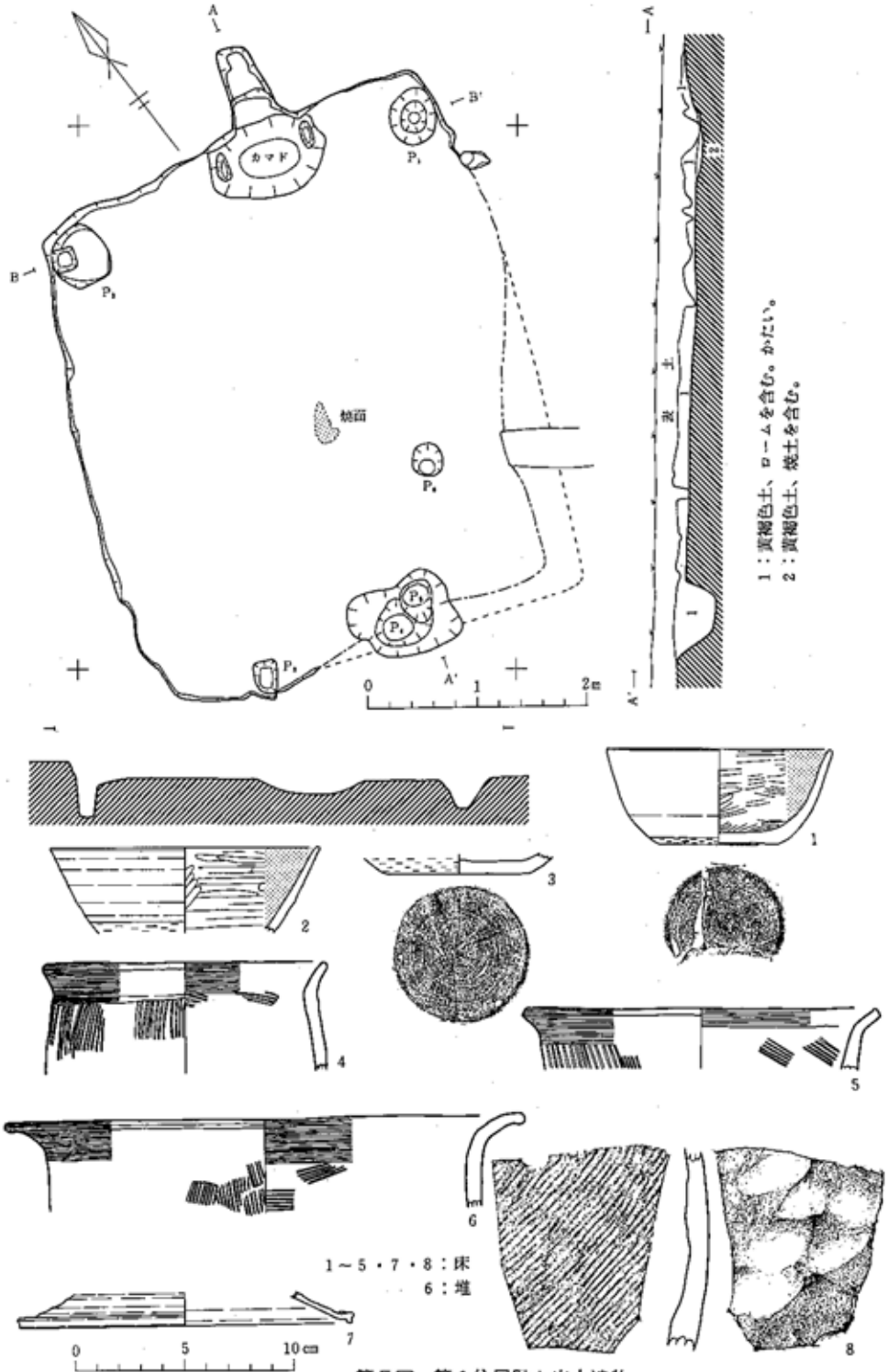
甕（第5図8）体部の破片である。外面には平行タタキ目、内面にはオサエとみられる痕跡がある。

蓋（第5図7）比較的器壁の薄いものである。口縁部がわずかに外方に折り曲げられている。

〔堆積土出土遺物〕

縄文の施された土器（第6図）外面にＲＬの単節縄文が施されている。

土師器



第５図　第１住居跡と出土遺物

甕（第 5 図 6）大形のものである。体部から直線的に立ち上がるものと思われ、頚部で屈曲し、口縁部が外反するものである。口唇部が若干突き出している。口縁部内外は横ナデ、体部内外は刷毛目が施されている。

第６図　第１住居跡
出土遺物（堆）

第２住居跡

〔重複〕みとめられない。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形で、規模は長軸約 5.5m、短軸約 4.5mである。

〔堆積土〕3 層みとめられたが 1 層に包括される。焼土を多く含んだ暗褐色土である。部分的に赤褐色土のところもある。

〔壁〕地山を壁としている。残存壁高は、比較的保存の良い西辺で約 20 ㎝、北・東辺で約 10 ㎝である。南辺は木根によると思われる攪乱のため多少の乱れがある。

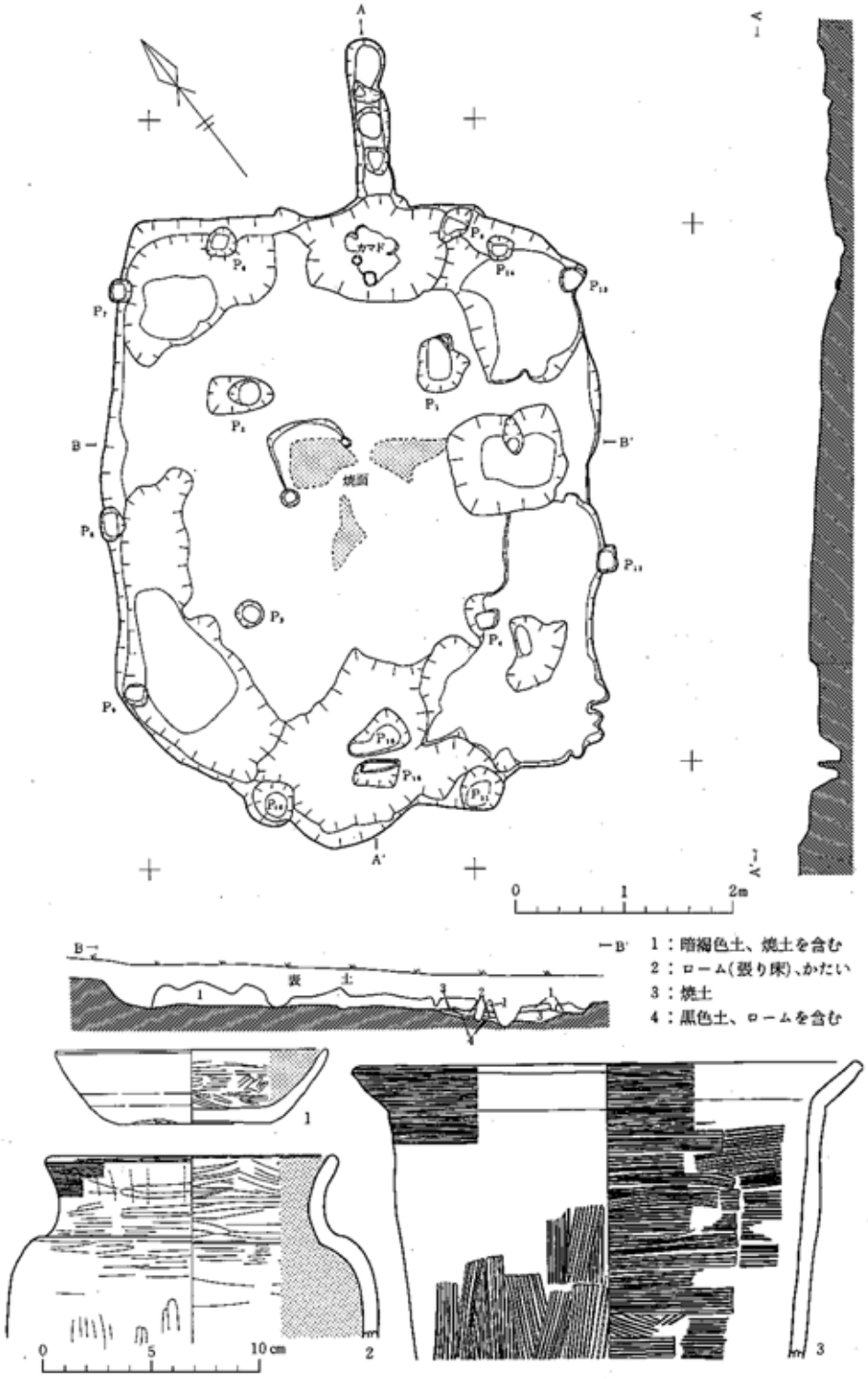
〔床〕地山を床としている。床面はほぼ平坦で中央部では非常にかたくしまっている。周縁部は木根によりかなり広い範囲で攪乱をうけている。

〔柱穴〕ピットは床面中央に 4 個、壁沿いに 10 個、南壁内側に 2 個検出された。床面中央の 4 個は径 20 ㎝前後、深さが 20～40 ㎝ほどのものでほぼ対角線上に位置している。ただし、ピット 4 については攪乱部分にあたり、なお検討を要する。壁沿いの 10 個は、上記のピットに比してやや浅く、なかには壁に対して斜めに掘りこまれているものもある。これらのピットもほぼ対応する位置にあるが、攪乱をうけた東壁南側には検出されていない。以上の 14 個のピットが柱穴と考えられる。南壁内側の 2 個についての性格は不明である。

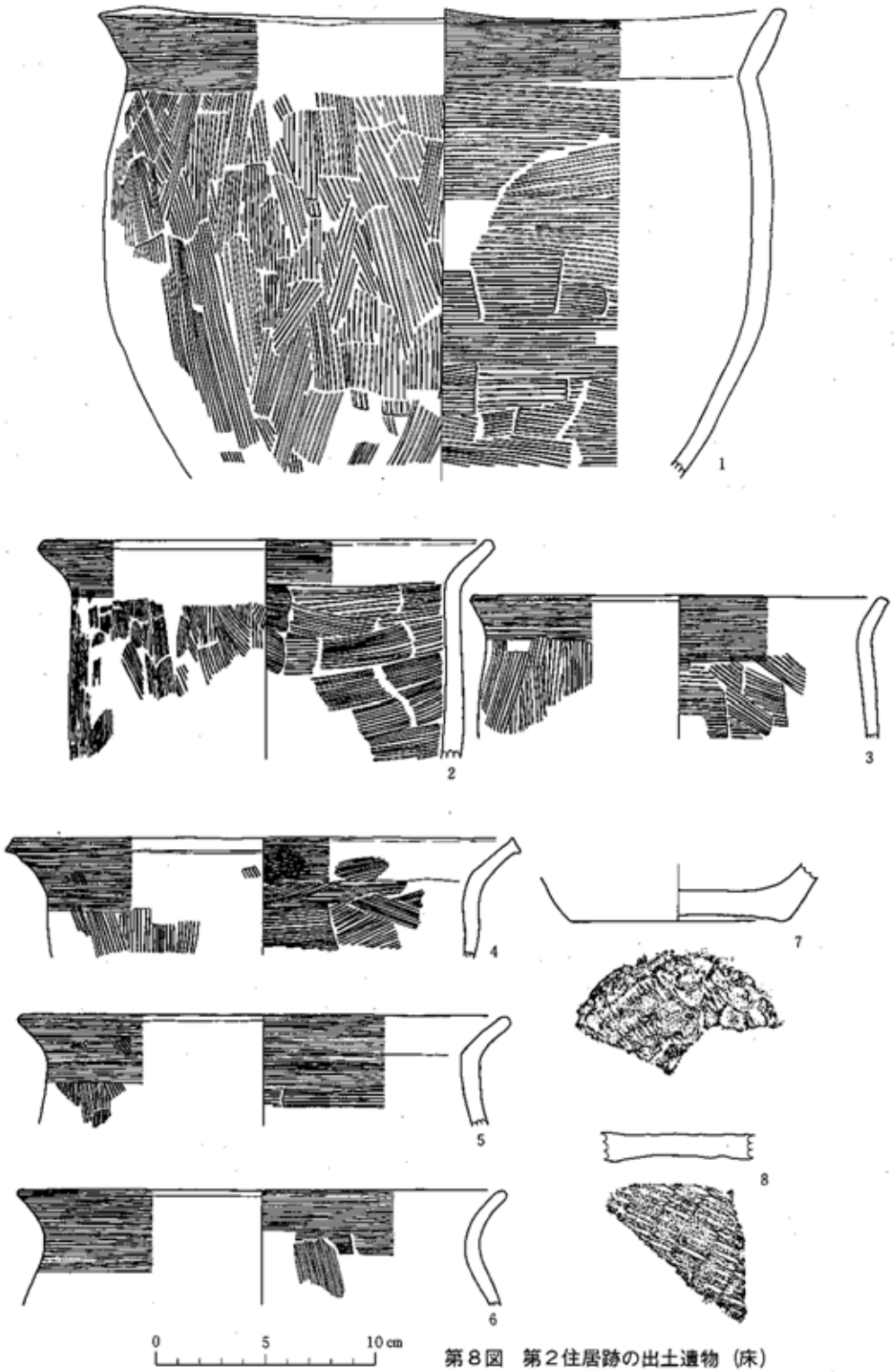
P.No.	P_1	P_2	P_3	P_4	P_5	P_6	P_7	P_8	P_9	P_{10}	P_{11}	P_{12}	P_{13}	P_{14}	P_{15}	P_{16}
床面からの深さ（cm）	23	40	13	17	17	18	13	14	13	28	34	15	16	21	34	39

〔周溝〕みとめられない。

〔カマド・炉跡〕カマドは北辺中央部（北カマド）と東辺中央部（東カマド）の 2 ヶ所に検出された。北カマドは床面から 7～8 ㎝ほど掘りくぼめられた燃焼部底面に焼けた川原石、およびその抜き取り穴と思われるくぼみがみられることから、石組のカマドであったと考えられる。燃焼部からゆるやかな傾斜で煙道部へと続く。煙道部は長さ約 1.4m、幅約 30 ㎝残っている。底面は部分的に攪乱をうけているが、ゆるやかな傾斜をもっている。東カマドでは長軸約 100 ㎝、短軸約 90 ㎝、深さ 17.8 ㎝ほどのくぼみが検出された。その中には多量のかたくしまった焼土の堆積がみられることから燃焼部と推定される。また、浮いた状態ではあるが焼石があり、北カマドと同様の石組のカマドであった可能性がある。両カマドの前後関係については、東カマドのくぼみの一部に住居跡の床面と連なるかたいロームが張ったような状態で検出されてい



第７図　第２住居跡と出土遺物（床）



第８図　第２住居跡の出土遺物（床）

ることなどから、東カマドが北カマドより古いと考えられる。しかしこの張り床状ロームは焼土全面を覆ってはおらず、なお検討を要する。床面のほぼ中央から焼面が数ヶ所みとめられた。また、付近に石の抜き取り穴とも考えられるくぼみが2個あり、炉跡の可能性がある。

〔出土遺物〕本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面出土の土師器がある。堆積土出土遺物には、縄文の施された土器、剥片、土師器、須恵器がある。図示の不可能な遺物については、破片集計表に示した。

〔床面出土遺物〕

土師器

坏（第7図1）製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。器形は体部から直線的に外傾する。底面全体に回転ヘラケズリの再調整が加えられているため底部切り離しは不明である。体部下端にもヘラケズリの再調整がみられるが、手持ちによるものか回転ヘラケズリによるものかは不明である。

甕（第7図2，3，第8図1～8）すべて製作の際ロクロは使用していない。器形には体部から丸味をもって立ち上がり、口縁部で外反するもの（第7図2）と体部から内弯ぎみか直線的に立ち上がり頚部で屈曲し、口縁部で外傾するもの（第7図3，第8図1～6）がある。前者は、外面は口縁部が横ナデ、口縁部から体部にかけてはヘラミガキの調整が加えられている。内面はヘラミガキが加えられ、黒色処理が施されている。後者は、口縁部内外は横ナデ、体部の外面は刷毛目で、内面は刷毛目とヘラナデのもの（第8図6）とがある。第8図1は体部から内弯ぎみに立ち上がり、頚部で屈曲し、口縁部で外傾するものである。口縁部内外は横ナデ、体部内外は刷毛目の調整が加えられている。体部内面に接合痕がみとめられる。第8図2～4は体部から直線的に立ち上がり、頚部で屈曲し、口縁部で外傾するものである。第8図4は口唇部が外方に突き出ている。口縁部内外は横ナデ、体部内外は刷毛目の調整が加えられている。なお底部には、外面に蓆状圧痕のみとめられるもの（第8図7，8）と図示できなかったが木葉痕のみとめられるものがある。

〔堆積土出土遺物〕

縄文の施された土器（第9図1～5）1は外面にＬＲ単節縄文が施されている。2は外面にＬＲ＋Ｒの付加縄文とＲの結節縄文が施されている。3は外面に付加縄文が施されているが、原体は不明である。4と5は外面にＲの撚糸文が施されている。

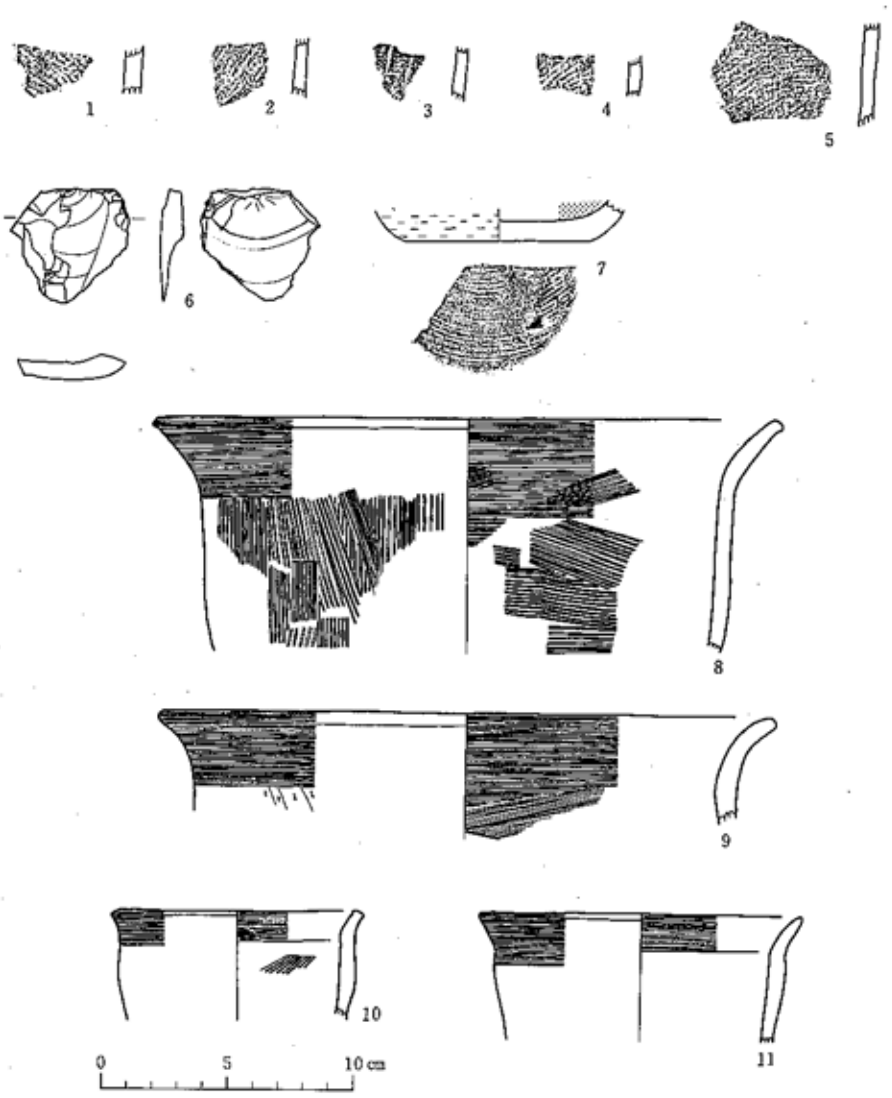
剥片（第9図6）打面は自然面打面である。末端は羽毛状末端である。縁辺の一部にみられるこまかな剥離は調整痕か使用痕か不明である。

土師器

坏（第9図7）底部から体部下端にかけての破片である。底部切り離しは回転糸切手法であ

る。体部下端は回転ヘラケズリによる再調整が加えられている。内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。

壺（第 9 図 8～11）いずれも体部から直線的に立ち上がり、頸部で屈曲し口縁部で外傾するものである。大形のもの（8, 9）と小形のもの（10, 11）がある。前者は口縁部内外は横ナデ、8 は体部内外とも刷毛目、9 は体部外面はヘラケズリ、内面はナデと刷毛目の調整が加えられている。後者は口縁部内外は横ナデ、体部外面は摩滅のため不明である。10 の体部内面には刷毛目がみとめられる。



第９図　第２住居跡の出土遺物（堆）

第３住居跡

〔重複〕みとめられない。

〔平面形・規模〕木根による攪乱が著しく、ほとんど輪郭は確認できなかった。残存する壁から、平面形は方形に近く、規模は一辺約2.5mほどと推定される。

〔堆積土〕１層のみみとめられた。木炭、焼土を含む黒褐色土である。

〔壁〕北辺と西辺の一部が2～5㎝の高さで残存している以外は攪乱により失われていた。地山を壁としている。

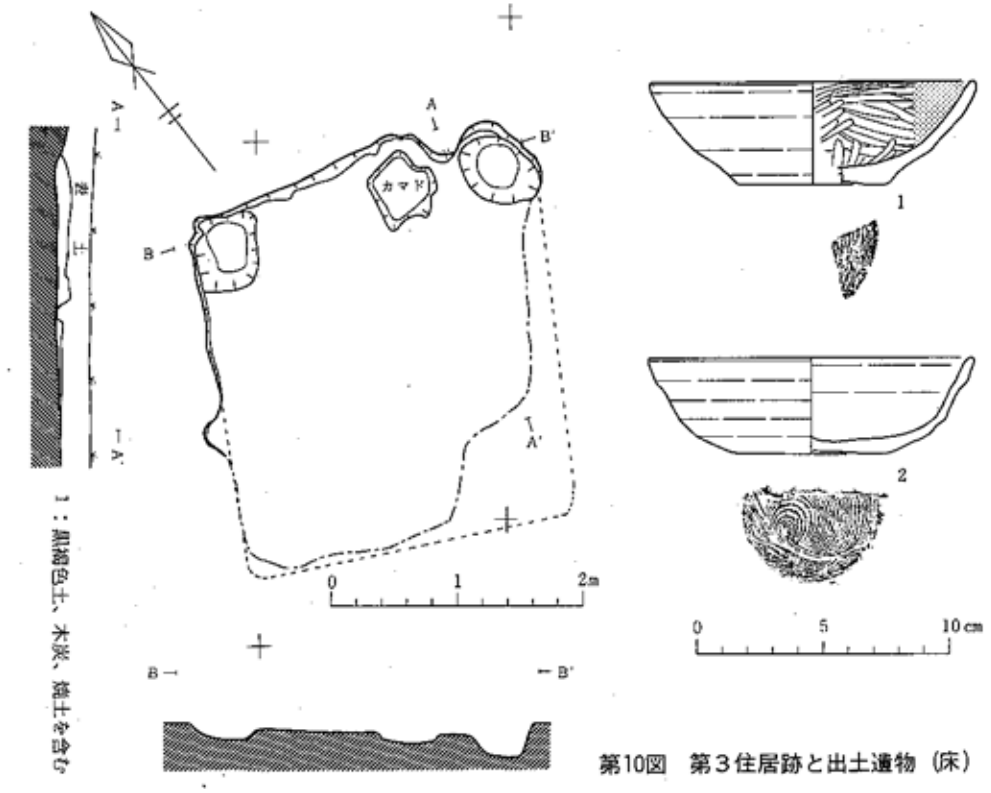
〔床〕地山を床としている。東側と南側においてはだいぶ削平をうけている。残存する床面は非常にかたくしまっている。

〔柱穴〕現存する床面上において柱穴と考えられるピットはみとめられなかった。

〔周溝〕みとめられない。

〔カマド〕北辺中央部の壁ぎわに深さ８㎝、径50㎝ほどの浅いくぼみがあり厚さ５㎝ほどの焼土の堆積がみられた。この部分が燃焼部と考えられる。煙道部は検出されなかった。

〔貯蔵穴状ピット〕北西隅と北東隅にみとめられた。北西隅のピットは平面形がほぼ長方形で、長軸が約60㎝、短軸が約50㎝、深さが約８㎝である。北東隅のピットは平面形がほぼ円形で径



第10図　第３住居跡と出土遺物（床）

は約 50 ㎝である。ともに出土遺物はない。

〔出土遺物〕本住居跡に伴うと考えられる遺物には、床面出土の土師器、赤焼土器がある。堆積土出土の遺物はない。図示の不可能な遺物については、破片集計表に示した。

〔床面出土遺物〕

土師器

坏（第 10 図 1）製作に際しロクロを使用したもので、内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。器形は体部から内弯ぎみに立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切手法で、再調整はみとめられない。

なお、図示できなかったが製作に際しロクロを使用しない甕の破片が数点出土している。

赤焼土器（第 10 図 2）製作に際しロクロを使用している。器形は体部から内弯ぎみに立ち上がり、口縁部で外傾する。底部は回転糸切手法による切り離しで再調整はない。色調は外面はにぶい橙色、内面は浅黄橙である。図示できなかったが、他にこれと同じ特徴をもつ破片が 2 点出土している。

３．A，Bトレンチと出土遺物

〔Aトレンチ〕表土下 1mほどのところに大きな川原石が多数発見されたが第Ⅱ章で述べたように湧水のためその後の調査はできなかった。出土遺物には、縄文土器、土師器、須恵器がある。図示の不可能な遺物については、破片集計表に示した。

縄文土器（第 11 図 1）深鉢の口縁部と思われる。口唇部には小突起がありその中はくぼんでいる。また、その前位にもくぼみがみられる。その左右には沈線が施文されている。口縁部外面には数本の沈線とＬＲの単節縄文がみとめられる。

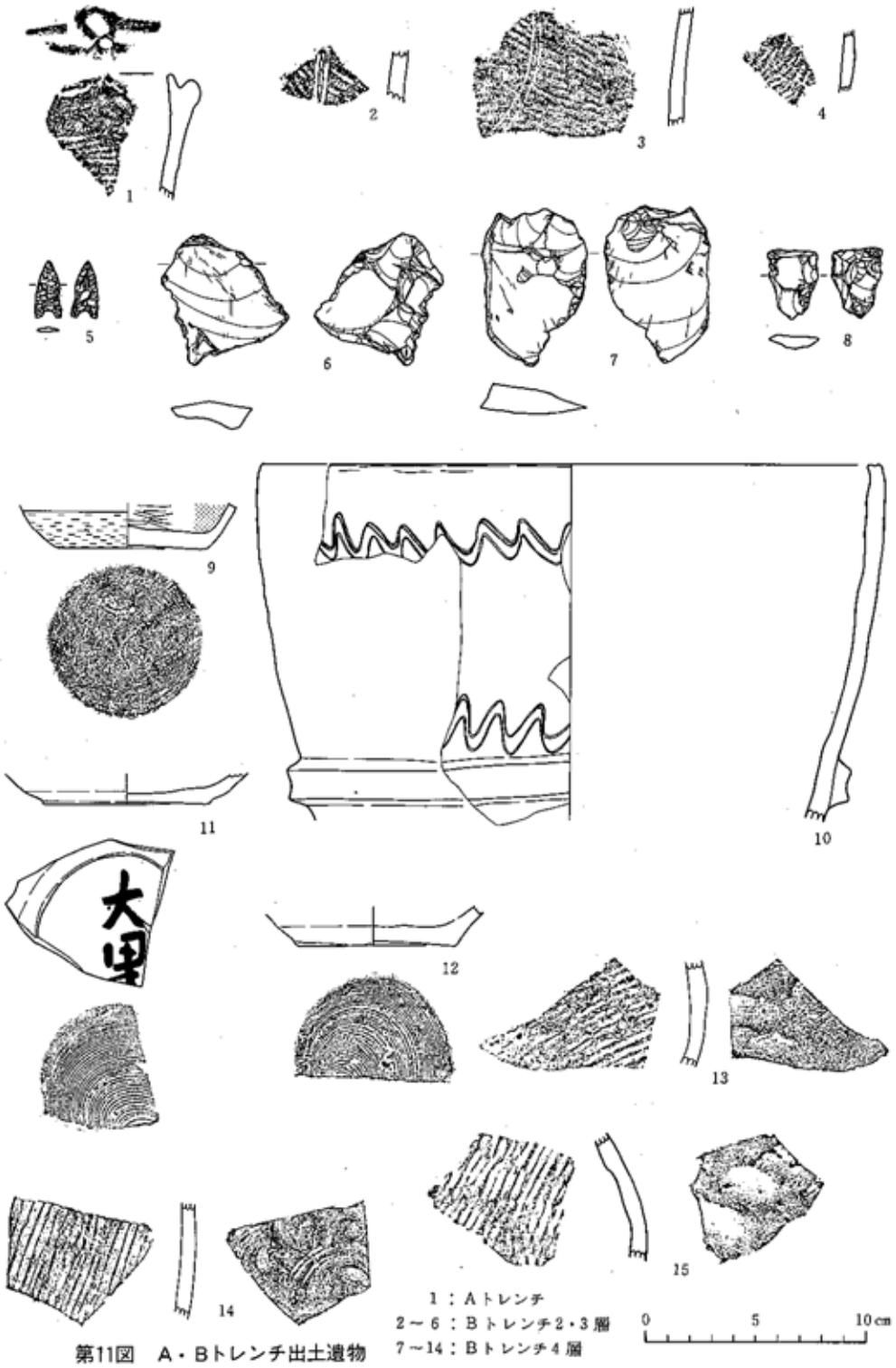
土師器：図示できるものはないが坏、甕が出土している。坏は外面はロクロ調整、内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。底部外面に回転ヘラケズリの再調整のみとめられるものもある。

須恵器：図示できるものはないが、坏、甕、壺が出土している。坏には底部が切り離しが回転糸切手法によるもので再調整のみられないものがある。

〔Bトレンチ〕層位については基本層位の中で述べた。第 1～3 層は再堆積層で、第 4 層下面が遺物包含層である。出土遺物には縄文土器、石器、土師器、須恵器、赤焼土器がある。図示の不可能な遺物については、破片集計表に示した。

第 1～3 層出土遺物

縄文土器（第 11 図 2～4）いずれも深鉢の体部と思われる。2 と 3 にはＬＲの縦位の単節縄文と 2 本の沈線が平行に施されている。4 にはＬＲの縦位の単節縄文が施されている。



1：Aトレンチ
2～6：Bトレンチ2・3層
7～14：Bトレンチ4層

0　5　10cm

第11図　A・Bトレンチ出土遺物

石器（第 11 図 5，6）石鏃と剥片石器がそれぞれ 1 点出土している。石鏃は凹基のものである。全縁辺に調整剥離が施されている。剥辺石器は両縁辺にこまい調整剥離が加えられている。

土師器：図示できるものはないが、坏、甕が出土している。坏に底部が回転糸切手法によって切り離され、再調整のみとめられないものがある。

須恵器：図示できるものはないが、坏と壺が出土している。

第 4 層出土遺物（下面の遺物包含層を含む）

石器（第 11 図 7，8）縦長の剥片石器が 2 点出土している。7 は一側辺にかるい調整剥離が加えられている。一部に自然面が残る。8 は周縁に調整剥離を加えるものである。

土師器

坏（第 11 図 9）製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。底部の切り離しは不明である。体部下端から底部全面にかけて回転ヘラケズリの再調整が加えられている。

甕（第 11 図 10）体部からやや内弯ぎみに外傾する器形を示す。体部には粘土帯によってタガが横方向に張り付けられている。これは同一個体と思われる破片から、少なくとも外面全体に 2 本はあったと推定される。残存する器面全体には横方向のナデがみられるが、ロクロによるものか不明である。体部内面にはその後、縦方向のナデが加えられている。口縁部と体部のタガの上位には 2 本の平行沈線が波状に描かれている。色調は内外ともにぶい褐色である。

須恵器

坏（第 11 図 11，12）ともに製作に際しロクロを使用したもので、底部は回転糸切技法によって切り離されている。再調整は加えられていない。11 には底部外面に「大里」とみられる墨書がある。

甕（第 11 図 13～15）ともに体部の破片で外面には平行タタキ目がみとめられる。内面はオサエの痕跡のみとめられるもの（13，15）、同心円文のみとめられるもの(14)がある。

壷：図示できなかったが、内外ともロクロ調整の体部の破片が出土している。

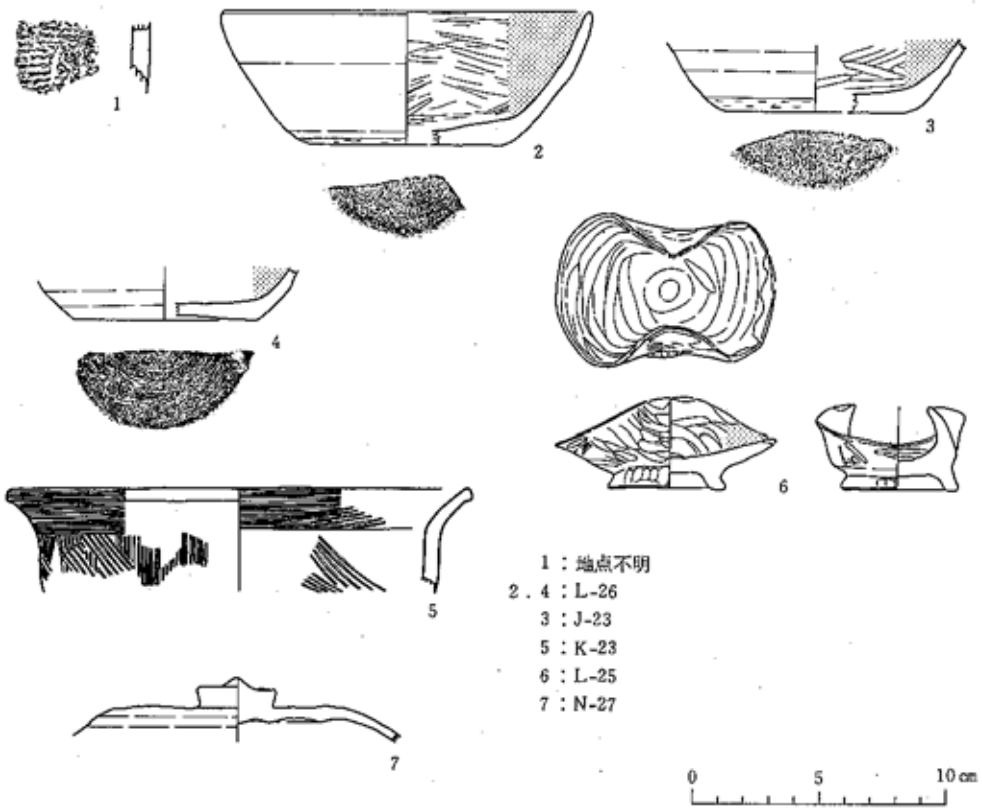
４．畑地部分の表土および出土地点不明の遺物

出土遺物には縄文の施された土器、土師器、須恵器、赤焼土器がある。図示の不可能な遺物については、破片集計表に示した。

縄文の施された土器（第 12 図 1）体部の破片と思われ、外面にＲの撚糸文が施されている。

土師器

坏（第 12 図 2～4）いずれも製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキが加えられ黒色処理が施されている。2 は体部から内弯ぎみに立ち上がる器形を示す。2 と 3 は体部下端と底



第12図　畑地部分の表土および出土地点不明の遺物

石器計測表

	器種	グリット・トレンチ・層位	長さ・幅(mm)	重量(g)	石質	備考	図版
1	剝片	第2住堆積土	45・46	16.6	細粒石英安山岩質凝灰岩	完形	第9図6
2	石鏃	Bトレンチ、2，3層	26・12	0.6	〃	〃	第11図5
3	剝片石器	〃	60・51	37.0	〃	〃	〃 6
4	〃	Bトレンチ、4層	70・48	37.6	〃	〃	〃
5	〃	〃	32・23	4.6	〃	〃	〃 8

部全面に、4は底部全面に回転ヘラケズリの再調整が加えられている。2の底面中央には、回転糸切痕がみとめられる。

甕（第12図5）製作に際しロクロは使用していない。器形は頸部で屈曲し、口縁部で外傾するものである。口縁部内外は横ナデ、体部内外には刷毛目の調整が加えられている。

耳皿（第12図6）製作に際しロクロを使用し、内面全体と外面の大部分にヘラミガキが加えられている。内面には黒色処理が施されているが一部を除きほとんどとんでいる。高台部の内面にはロクロによるナデが残っている。外面の色調は橙色で黒褐色の部分もある。

須恵器

蓋（第 12 図 7）比較的低平な器形で、天井部からなだらかに口縁部に至っている。つまみは宝珠形のもので中央部が周縁部よりいくぶん高い。

Ⅳ　遺構・遺物に関する考察と問題点

１．出土土器の分類と年代

出土土器には縄文土器、土師器、須恵器、赤焼土器などがある。ここでは図示できた土器を対象とする。

〔**縄文土器**〕縄文土器と明らかに言えるものはＡトレンチとＢトレンチから合わせて 4 点出土している。Ａトレンチ出土の土器は口唇部に小突起、くぼみ、沈線、口縁部にはＬＲの縄文と沈線の施されるものである。これと同特徴をもつものは、蔵王町二屋敷遺跡（林・藤沼他：1971）、南方町青島貝塚（加藤・後藤他：1975）などから出土しており、縄文時代後期初頭に位置づけられている。Ｂトレンチ出土の土器はＬＲの縄文と沈線が施されるものである。これと同特徴をもつものは、南方町長者原貝塚（阿部、遊佐：1978）、青島貝塚（加藤・後藤他：1975）などから出土しており、縄文時代中期中葉の大木 8ｂ式に位置づけられている。

なお、「縄文の施された土器」としたものは、所属年代、時期とも不明である。

〔土師器〕土師器には、坏、甕、甑、耳皿などがある。ここでは坏と甕のみを分類の対象とする。

坏：すべて製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキが加えられ。黒色処理が施されている。これらは底部切り離し技法により 2 類に分類できる。

A類：底部の切り離しが回転糸切技法によるものである。さらに再調整の加えられているもの（1 類）と加えられていないもの（2 類）に分かれる。1 類はいずれも回転ヘラケズリの再調整で、それが体部下端と底部全面に加えられるもの（第 12 図 2）と体部下端のみに加えられるもの（第 9 図 7）がある。2 類には第 10 図 1 がある。

Ｂ類：底部に再調整が加えられているため切り離し技法の不明なものである。再調整はいずれも回転ヘラケズリによる（ただし、第 7 図 1 の体部下端は手持ちによるものか回転によるものか不明）もので、それが体部下端と底部に加えられるもの（第 5 図 1, 3、第 7 図 1、第 11 図 9、第 12 図 3）と底部全面のみに加えられるもの（第 12 図 4）がある。

Ａ類は底部の切り離しが回転糸切技法によることに特徴をもつ。また、Ｂ類は底部切り離し

は不明だが、その後、体部下端や底部全面に再調整を加えることに大きな特徴をもつ。これらは本土器群においては共伴関係はみとめられなかった。しかし両類とも製作にロクロを使用している点では共通しており、これらは大きく土師器編年上表杉ノ入式（氏家：1957）に含められる。現在、基本的に底部切り離し技法においては、回転糸切によらないものから回転糸切によるものへ、また、再調整においては、加えられるものから加えられないものへ移行すると考えられている（桑原：1969）。これらから本土器群は表杉ノ入式と一括されながらも、A1 類、B類がA2 類より古い可能性がある。

現在、表杉ノ入式の年代は 9～10 世紀と考えられているが、ここでは大まかに平安時代に属するものと理解しておきたい。

甕：おおよその器形のわかるものを対象とする。すべて製作に際しロクロを使用していない。器形により 3 類に分類できる。

A類：体部から内弯ぎみに立ち上がり、頚部で屈曲し口縁部で外反するもので、第 7 図 2 がある。あるいは壺に含められるものかもしれない。器面全体にヘラミガキが加えられ、内面には黒色処理が施されている。

B類:体部から内弯ぎみに立ち上がり、頚部で屈曲し口縁部で外傾するもので第 8 図 1 がある。口縁部内外は横ナデ、体部内外は刷毛目の調整が加えられている。

C類：体部から直線的に立ち上がり、頚部で屈曲し口縁部で外傾するもので、さらに大形のものと小形のものに分かれる。前者は口径が 20 ㎝前後のものが多く、それには第 7 図 3、第 8 図 2～4 などがある。いずれも口縁部内外は横ナデ、体部内外は刷毛目の調整が加えられている。後者は口径が 10～15 ㎝のもので、それには第 8 図 4、第 9 図 10、11 などがある。それらの多くは口縁部内外は横ナデ、体部内外は刷毛目の調整が加えられている。

第 2 住居跡において、これらの各類が共伴していることからこれらはすべて同一時期のものと考えられる。また、第 1 住居跡においてはC類と坏のB類が、第 2 住居跡においては各類と坏のA1 類、B類がそれぞれ共伴している。これらの坏は前述したように平安時代に属すると考えられた。したがって、甕の各類も平安時代に属するものと考えられる。

〔須恵器〕須恵器には、坏、甕、壺がある。ここでは坏のみを対象とする。

坏：第 11 図 11 と 12 の 2 点のみである。ともに底部の切り離しは回転糸切技法によるもので再調整はない。

これらと同特徴をもつ坏は糠塚遺跡（小井川、手塚：1978）などで、奈良時代、平安時代の土師器と共伴している。しかし、今回の出土遺物には奈良時代の遺物がみられないので、これ

らは平安時代に属するものと考えられる。

〔赤焼土器〕 第10図2の1点のみである。これらは第3住居跡において土師器の坏A2類と共伴している。このA2 類は前述したように平安時代に属すると考えられた。したがってこれも平安時代に属するものと考えられる。

〔墨書土器について〕 須恵器の　の底部外面に「大里」と読みとれる墨書土器が出土している。「大里」と墨書された土器は、青木遺跡からも出土している。これは土師器坏の体部外面に記されている。これらの墨書がどのような意味をもつものなのかは、今後の検討課題である。

２．住居跡の構造と年代

本遺跡から発見された住居跡は3軒と少なく、また、削平が著しく全体の構造の明らかなものはない。そのためここではこれらの住居跡の特徴を概括的に述べるだけにとどめたい。

各住居跡の出土土器の組み合わせは、第1住居跡は土師器坏B類、甕C2類、須恵器蓋、第2住居跡は土師器坏B類、甕A、B、C類、第3住居跡は土師器坏A2類、赤焼土器がある。これらは、土器の検討から平安時代に属するものと考えられた。したがって各住居跡も平安時代のものと考えられる。しかし、前述したように土師器坏において、A1類B類がA2類より古いと考えられた。したがって、土師器坏B類の出土した第1、第2住居跡が第3住居跡よりも時期が古いと考えられる。

平面形はどの住居跡も方形を基調としている。ほぼ全体の輪郭のわかる第1住居跡は長方形であった。周溝はどの住居跡にもみとめられなかった。柱穴が明確にしえたのは、第2住居跡のみで、主柱穴とみられるものが床面中央に4個、壁柱穴とみられるものが壁沿いに10個みとめられた。カマドは、第3住居跡を除き、石組のカマドの可能性が考えられた。石組のカマドは、本遺跡周辺では類例が多く、蔵王町二屋敷遺跡（林・藤沼他：1971）、東山遺跡（白鳥：1971）、村田町北沢遺跡（斉藤・真山：1978）などにみられる。カマドの方向は北向きが多くみられた。第1住居跡と第2住居跡の床面のほぼ中央からは焼面がみとめられたが、これらは炉跡と考えられる。

これらの住居跡は、他の遺跡から発見されている平安時代の住居跡と基本的にはほぼ同特徴をもっている。それでも、これらの住居跡が大まかに平安時代とされながらも、第1、第2住居跡と第3住居跡の間に時期差がみとめられ、前者が古いと考えられたこと、第2住居跡のみではあるが主柱穴、壁柱穴の配置がみとめられたことなどは、本住居跡群の特徴といえる。本遺跡付近では青木遺跡、明神脇遺跡、家老内遺跡などでこの時代の住居跡が発見されており、

本住居跡群がこれらと何らかの有機的関係をもっていたと推定される。

Ⅴ　ま　と　め

1．御所内遺跡は、白石川支流河川によって形成された扇状地の扇端部に立地する。
2．今回の調査によって発見された遺構には、竪穴住居跡 3 軒がある。それらは、すべて平安時代のものである。また、北側の水田からは遺物包含層が発見された。
3．出土遺物には、土師器、須恵器、赤焼土器があるがこれらは平安時代のものである。他に縄文土器、石器も出土しており、同時期の遺構の存在も予想される。
4．住居跡の分布や地形から見て、今回の調査区以外、特に西側にも住居跡群の存在が予想される。立地、距離的には南の青木遺跡、北の松田遺跡とともに、大きな遺跡群の一部と考えられる。

引用・参考文献

宮城県教育委員会（1975）：「宮城県地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集
白石市（1976）：「考古資料編」『白石市史』別巻
宮城県教育委員会（1972）：「菅生田遺跡」「青木脇、青木後遺跡」「松田遺跡」「明神脇遺跡」「家老内遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第25集
伊藤玄三（1960）：「宮城県青木の弥生式遺跡と出土土器」『東北考古学』1
白石市教育委員会（1972）：「鷹巣古墳群発掘調査概報」『白石市文化財報告書』第12号
白鳥良一（1971）：「持長地遺跡」「東山遺跡」『宮城県文化財調査報告書－東北自動車道関係遺跡調査概報（刈田郡蔵王町地区）』第24集　宮城県教育委員会

佐藤庄吉
片倉信光　（1958）：「白石荒井縄文住居遺跡」『仙台郷土研究』第18巻4号

白石市教育委員会（1971）：「堂田遺跡」『白石市文化財報告書』第9号

林　謙作
藤沼邦彦他　（1971）：「二屋敷遺跡」『宮城県文化財調査報告書－東北自動車道関係遺跡調査概報（刈田郡蔵王町地区）』第24集　宮城県教育委員会

加藤　孝
後藤勝彦　他（1975）：「登米郡南方町青島貝塚発掘調査報告」『南方町史』資料編　南方町

阿部　恵
遊佐五郎　（1978）：「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第1集　南方町教育委員会

氏家和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会
桑原滋郎（1969）：「ロクロ土師器坏について」『歴史』第39輯　東北史学会

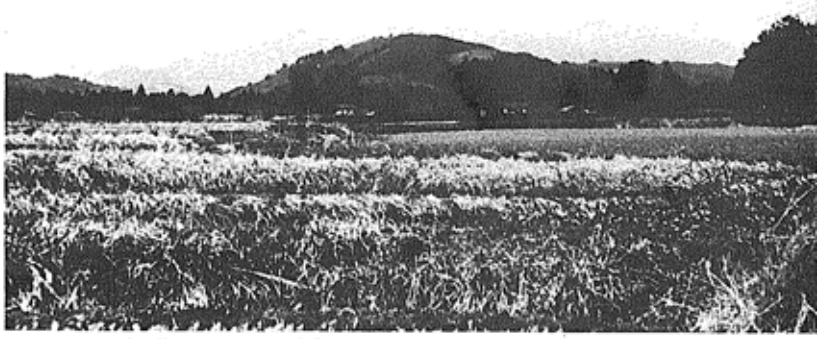
小井川和夫
手塚　均　（1978）：「宮城県文化財調査略報－糠塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第53集　宮城県教育委員会

斉藤吉弘
真山　悟　（1978）：「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第56集　宮城県教育委員会

種別	器形	部位	器面調整 外面－内面	1号住居跡 床	1号住居跡 堆積土	2号住居跡 床	2号住居跡 北カマド内	2号住居跡 東カマド内	2号住居跡 堆積土 1層	2号住居跡 堆積土 2層	2号住居跡 堆積土 2・3層	2号住居跡 堆積土 3層	2号住居跡 堆積土 不明	3号住居跡 床	表土 J－23	表土 J－27	表土 K－25	表土 K－26	表土 L－25	表土 L－26	表土 L－27	表土 M－25	表土 M－28	表土 M－29	表土 N－26	表土 O－24	Aトレンチ 1～3層	Aトレンチ 4層	Bトレンチ 2・3層	Bトレンチ 4層	遺構 境点不明	計
土師器	坏	口縁部	ミガキ(黒色)－ミガキ(黒色)		1																										1
			ロクロ－ミガキ(黒色)			1			2				7						4				1				2	1	7	1	26
		体部	ロクロ－ミガキ(黒色)	3				1		1			4	1		1			1										21		33
			－不明	1										1																	2
			刷毛目－刷毛目													3															3
		底部	不明－ミガキ(黒色)		2																							3			5
			－不明	2																											2
			回転ヘラケズリ－ミガキ(黒色)			1																				1			6		8
			回転糸切り－ミガキ黒色			2															1							1	1		5
			－不明	1																											1
			不明－ミガキ黒色					1					2													1						4
			－不明																							1					1
	甕	口縁部	横ナデ－横ナデ	11	2	4	1	1	2		1		15	1	3		1	5		2	1	1					1		3	5	4	64
			－刷毛目										1																		1
			ロクロ－ロクロ																										1		1
		体部	刷毛目－刷毛目	18	15	23	7	3	10	5	6	5	85	1	1		2	4	1	4	3	3			1			1	1	6	3	207
			－ヘラナデ	2	1	1						1	12				2											2	5		26
			－ナデ			3																					1		1		5
			－不明														1				1										2
			ヘラケズリ－刷毛目	9	2		1						11		1	3				4								2			33
			－ヘラナデ		1	6	1						20	1	1	3	4	1		3		1			2			6	5	4	59
			－ナデ	2			3																								5
			－不明																				1								1
			ケズリ－刷毛目						1	1																					3
			－ナデ						1			1																			1
			－不明							1	3																				3
			軽いケズリ－刷毛目							1																			2		3
			－ヘラナデ			3			2				20		6	1		2			2								9		45
			－ナデ			4			3																		1				8
			－不明																		1										2
			ミガキ－ミガキ				1																								1
			ヘラミガキ－ミガキ(黒色)									1	1																			1
			－刷毛目										1																			1
			ロクロ－ロクロ										1		2			1			2	1				1						8
			－刷毛目																										2			2
			－ヘラナデ										1						1													2
			不明－刷毛目			9	1											1		3												15
			－ヘラナデ								1	1																				1
			－ミガキ(黒色)																		1											1
			－不明	7	4	2				1			40	1			2	4		1		2				1	7	19	36	7	134
		底部	木葉痕－ヘラナデ	2		1												1											1		5
			－不明										1															1				2
			ヘラケズリ－不明										2			1															3
			席状圧痕－刷毛目						1																							1
			－不明										2																			2
			不明－ヘラナデ			2																					1					2
			－不明												2																	2
	台坏	底部	ロクロ－ミガキ(黒色)															1														1
須恵器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ		1				1				2				1															5
		体部	ロクロ－ロクロ										1															1				2
		底部	回転糸切り－ロクロ										1																1	1	1		4
	甕	体部	平行ニ不明		1																											1
		底部	ナデ－ナデ																								1					1
	壺	口縁部	ロクロ－ロクロ																							1						1
		体部	ロクロ－ロクロ																								1		7	2		10
瓦質土器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ		1									1																		2
		体部	ロクロ－ロクロ		1																1											2
		底部	回転糸切り－ロクロ											1																1		2
計				58	32	62	15	6	22	10	11	9	230	8	17	11	13	20	1	23	11	9	1	1	3	1	8	13	48	112	19	774

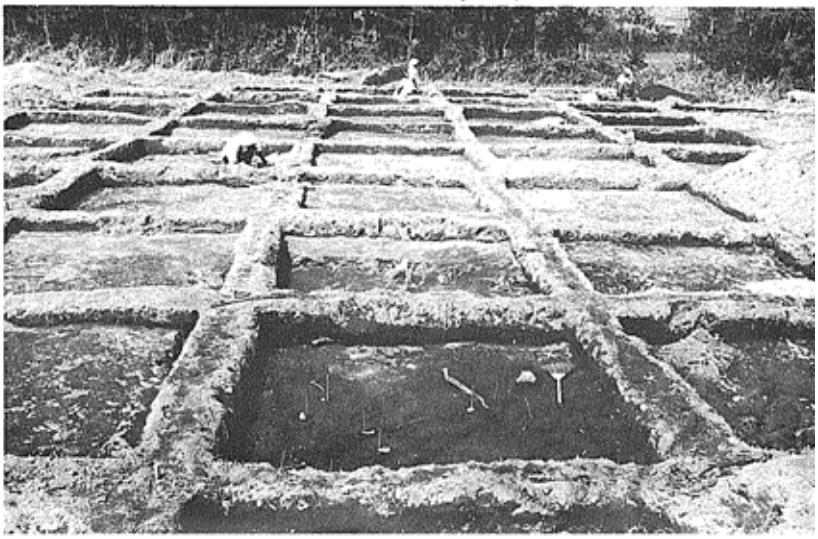
写　真　図　版

1：遺跡遠景（東より）

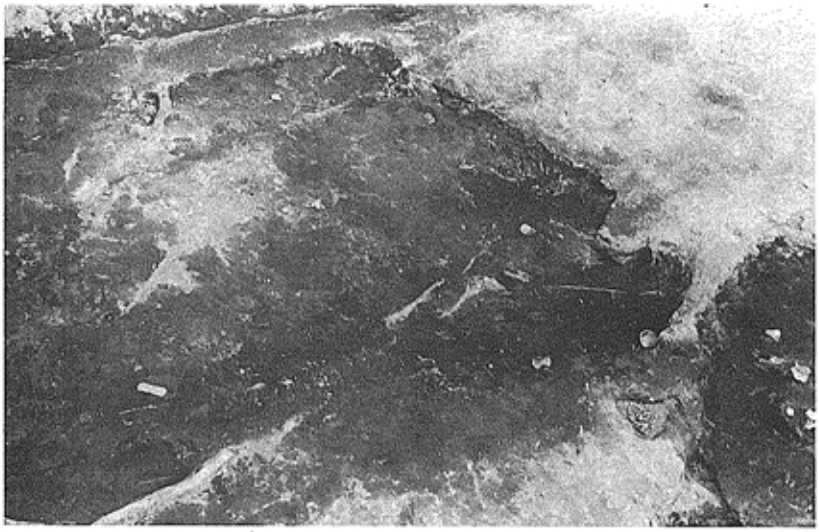


2：遺跡近景（西より）

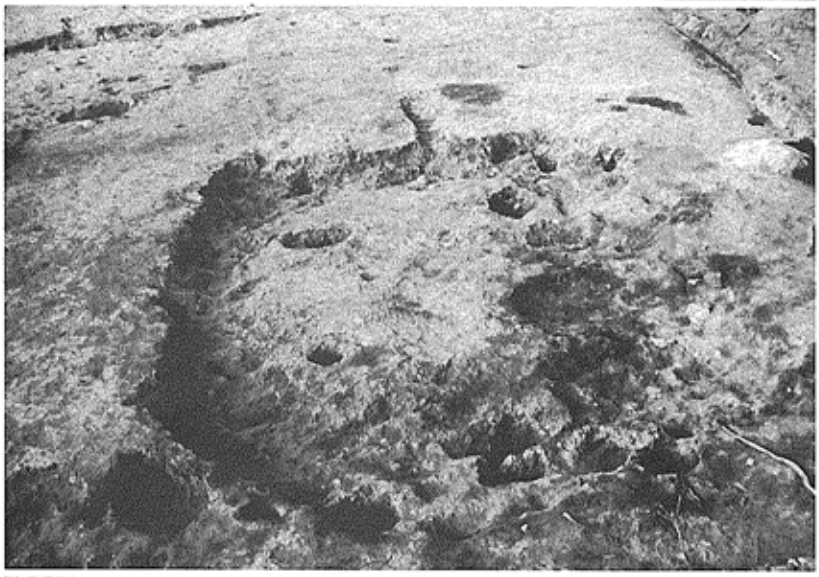
3：遺跡近景（南より）



図版１　遺跡全景



1：第1住居跡

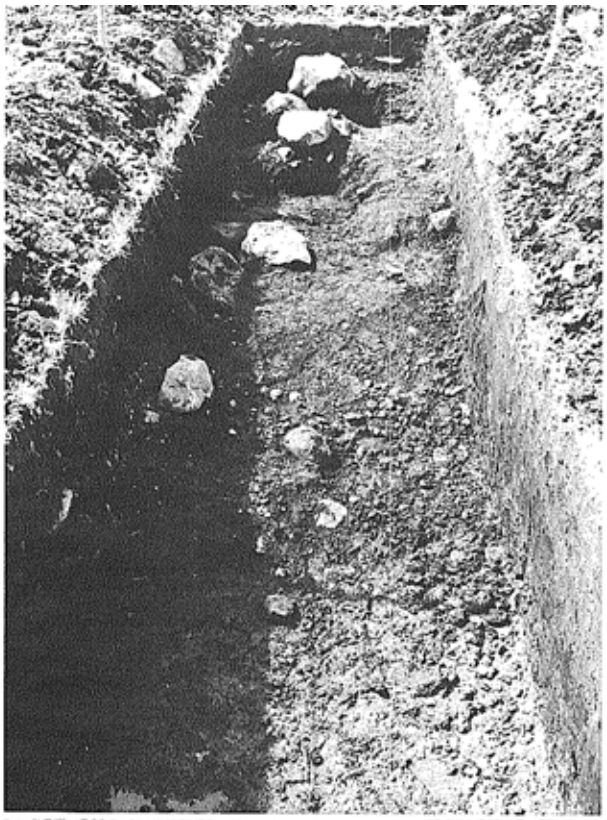


2：第2住居跡

3：第1・2住居跡

図版2　竪穴住居跡

1：Aトレンチ



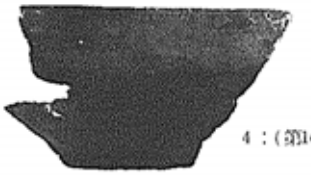
2：Bトレンチ

図版３　トレンチの状況

1：（第5図1）

2：（第5図2）

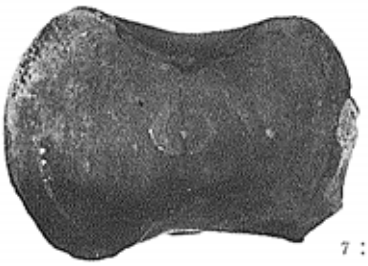
3：（第7図1）



4：（第10図1）

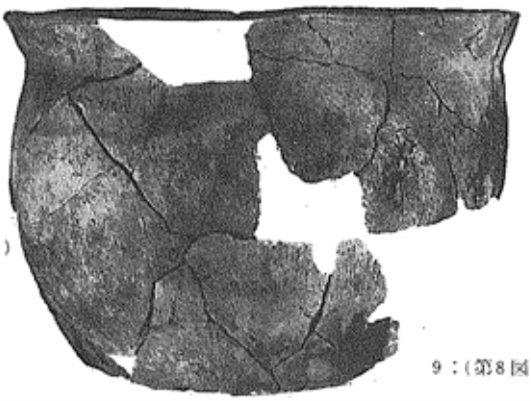
5：（第10図2）

6：（第12図2）

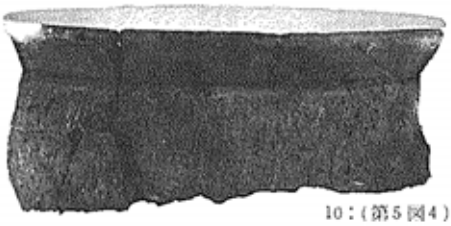


7：（第12図6）

8：（第7図2）



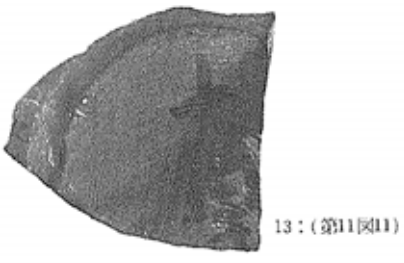
9：（第8図1）



10：（第5図4）

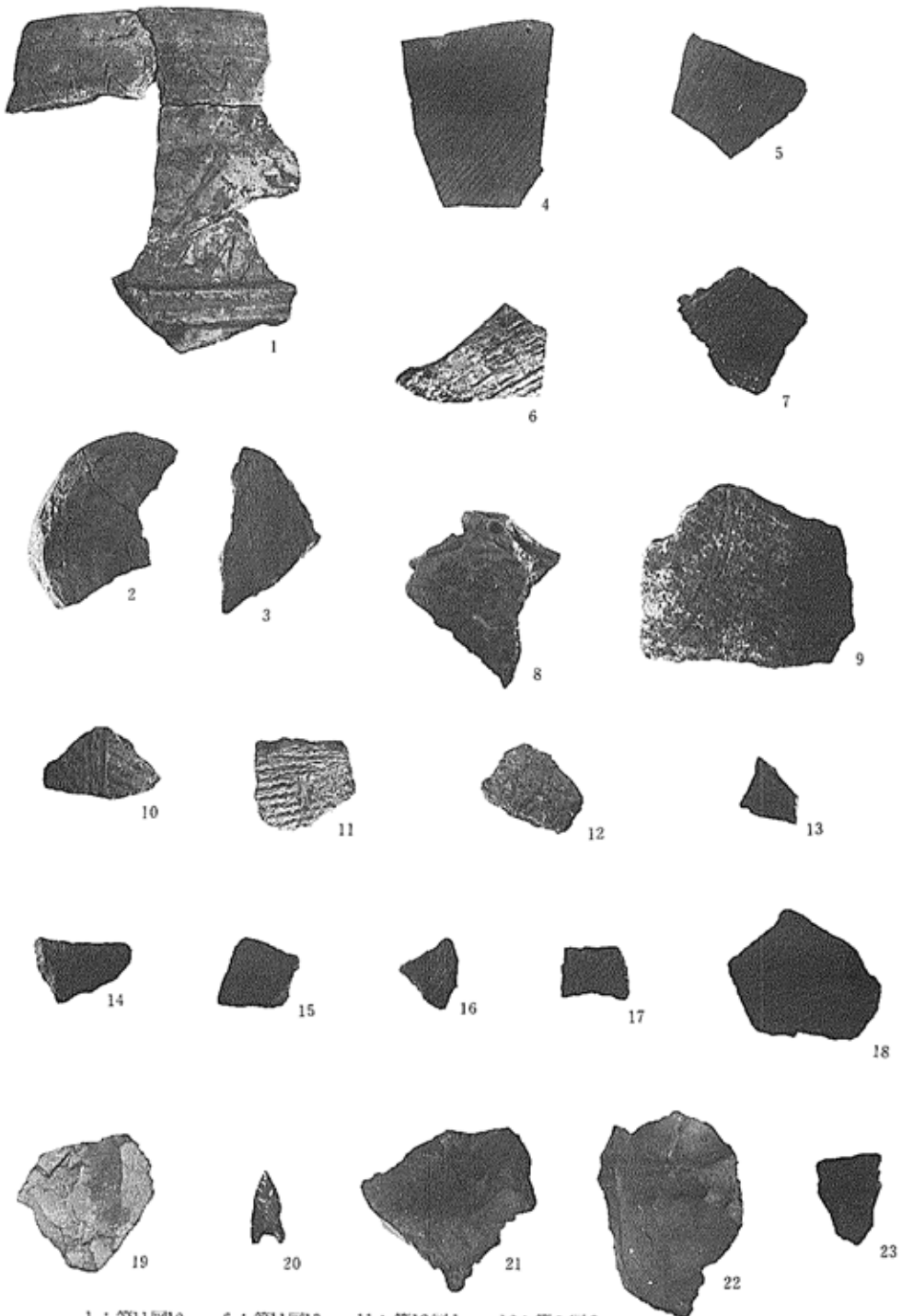
11：（第7図3）

12：（第12図7）



13：（第11図11）

図版4　出　土　遺　物



1：第11図10　6：第11図13　11：第12図1　16：第9図3
2：第8図7　7：第11図15　12：第11図4　17：第9図4　21：第11図6
3：第8図8　8：第11図1　13：第6図　18：第9図5　22：第11図7
4：第5図8　9：第11図3　14：第9図1　19：第9図6　23：第11図8
5：第11図14　10：第11図2　15：第9図2　20：第11図5

図版5　出　土　遺　物

(2) 赤鬼上遺跡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 43
　1．遺跡の位置 …… 43
　2．周辺の遺跡 …… 43
Ⅱ　調査の方法および経過 …… 45
Ⅲ　調査の成果 …… 47
　1．基本層序 …… 47
　2．発見された遺構と遺物 …… 48
(1)竪穴住居跡 …… 48
(2)表土および堆積土出土遺物 …… 52
Ⅳ　考　　察 …… 58
　1．層序について …… 58
　2．出土遺物について …… 58
　3．竪穴住居跡の年代 …… 60
Ⅴ　ま　と　め …… 60

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県刈田郡蔵王町平沢字赤鬼上
遺 跡 記 号：ＡＫ（宮城県遺跡地名表登載番号：05042）
調 査 期 間：昭和 45 年 12 月 2 日～12 月 22 日
調 査 面 積：約 2178 ㎡
発 掘 面 積：約 621 ㎡
調　査　員：社会教育課　技術主査　志間泰治
　　技師　藤沼邦彦
　　嘱託　白鳥良一
調査参加者：西脇俊郎、岩渕康治（東北大学文学部考古学研究室）
　　高橋守克、佐藤好一、土岐山武（宮城教育大学考古学研究会）
　　（職名は当時）

挿 図 目 次

第1図　赤鬼上遺跡と周辺の遺跡……44
第2図　赤鬼上遺跡グリッド配置図……46
第3図　H-22区(東壁)・Ⅰ-21区(西壁)断面図……47
第4図　J-20区(北壁)・K-21区(南壁)断面図……47
第5図　竪穴住居跡……48
第6図　竪穴住居跡出土遺物(1)……50
第7図　竪穴住居跡出土遺物(2)……51
第8図　表土および堆積土出土遺物(1)……52
第9図　表土および堆積土出土遺物(2)……53
第10図　表土および堆積土出土遺物(3)……54
第11図　表土および堆積土出土遺物(4)……55
第12図　表土および堆積土出土遺物(5)……56

写 真 図 版 目 次

図版1　遺跡全景と竪穴住居跡……65
図版2　カマドと石器……66
図版3　弥生土器……67
図版4　土師器・須恵器……68

表 目 次

第1表　破片集計表（弥生土器）……55
第2表　破片集計表……63・64

Ⅰ　遺跡の位置と周辺の遺跡

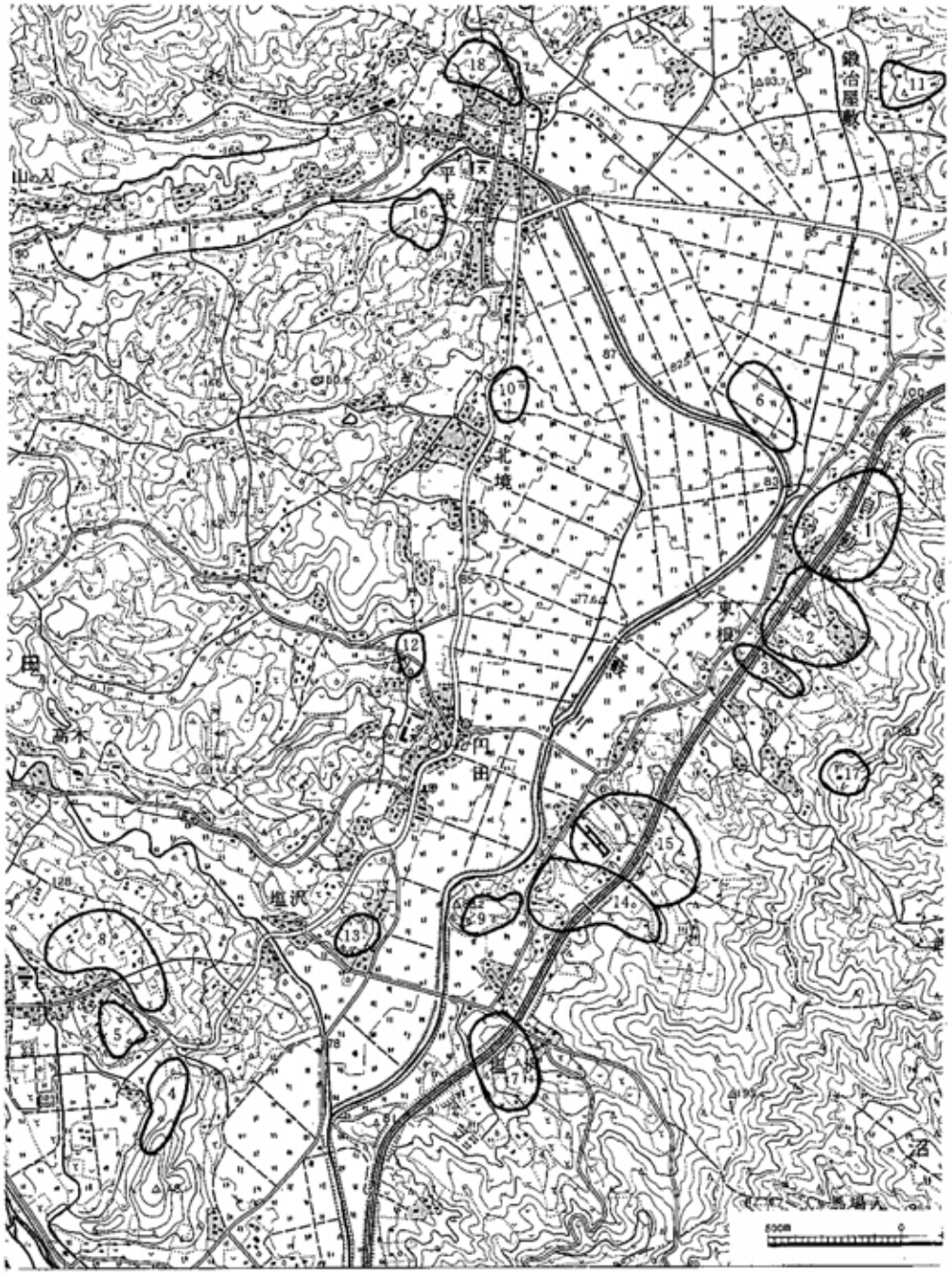
１．遺跡の位置

赤鬼上遺跡は宮城県刈田郡蔵王町平沢字赤鬼上に所在している。蔵王町役場のある円田地区から直線距離で北東に約２㎞の地点である。

本遺跡の所在する蔵王町の地形をみると、奥羽山地から東に張り出した高館丘陵と白石川の支流である松川および薮川によって開析された白石低地とから構成されており、特に薮川を中心とする白石低地の北東部は円田盆地と呼称されている。遺跡は円田盆地の東縁を形成している高館丘陵先端部の舌状台地上に位置している。この舌状台地の南側緩斜面の畑に弥生土器や土師器の散布がみとめられ、遺跡の西側にひろがる円田盆地水田面との比高は約15mである。

２．周辺の遺跡

蔵王町には現在141ヶ所の遺跡が確認されている（県教委：1976）。旧石器時代の遺物としては鉄砲町から彫刻刀型石器が発見されており、また二屋敷遺跡と持長地遺跡からナイフ形石器とチョッパーが出土している（県教委：1971）。今後の研究によって旧石器時代文化層の発見が期待される。縄文時代になると遺跡数は急激に増加する。時期毎に代表的な遺跡を列挙するならば、明神裏遺跡（早期）、長峰遺跡（前期）、西裏遺跡、高木遺跡（ともに中期）、二屋敷遺跡（中、後期）、鍛冶沢遺跡、山田沢遺跡、下別当遺跡（ともに後、晩期）などである。概して薮川流域よりも松川流域に集中している傾向がみられる。ところが、弥生時代になると逆に薮川流域に遺跡が多くなる。しかも、弥生時代のほとんどの遺跡が円田式土器を出土している。おもな遺跡には下永野遺跡、上野遺跡、天王遺跡、都遺跡、それに円田式土器の標準遺跡である西裏遺跡などがある。古墳時代になっても遺跡分布の傾向は変わらず薮川流域に集中している。円筒埴輪をめぐらし蔵王町最大の古墳である宋膳堂古墳をはじめ大山遺跡、大橋遺跡、伊原沢下遺跡、塩沢北遺跡などの集落遺跡がある。奈良、平安時代の遺跡としては二屋敷遺跡、下原田遺跡、東山遺跡、諏訪館前遺跡などがある。中世から近世にかけての遺跡としては城館跡がある。赤鬼上遺跡に近い城館では高野氏の平沢館が有名である。当時の集落については持長地遺跡で掘立柱建物群が確認されているものの、いまだに不明な点が多い。中世、近世においては、宮城県南地方から山形県への横断路として笹谷街道（蔵王町宮～川崎～笹谷峠～山形）が唯一の道路であったことを考えれば、今後当時の集落遺跡が発見される可能性がある。



1：赤鬼上遺跡（弥生・平安）　2：大幌遺跡（弥生・古墳前）　3：屋木戸内遺跡（弥生・古墳）
4：下永野遺跡（弥生）　5：天王遺跡（弥生・奈良・平安）　6：都遺跡（縄文～奈良・平安）
7：大山遺跡（縄文後・弥生・古墳）　8：上野遺跡（縄文中・弥生・奈良・平安）　9：古遺跡（古墳・奈良・平安）
10：堂の入遺跡（弥生）　11：鍛冶屋敷遺跡（縄文中～晩・奈良・平安）　12：清水遺跡（弥生・奈良・平安）
13：宋願堂古墳（古墳）　14：塩沢北遺跡（古墳中後）　15：伊原沢下遺跡（古墳）
16：諏訪館前遺跡（弥生・奈良・平安）　17：愛宕山遺跡（弥生）　18：平沢館跡（中世）

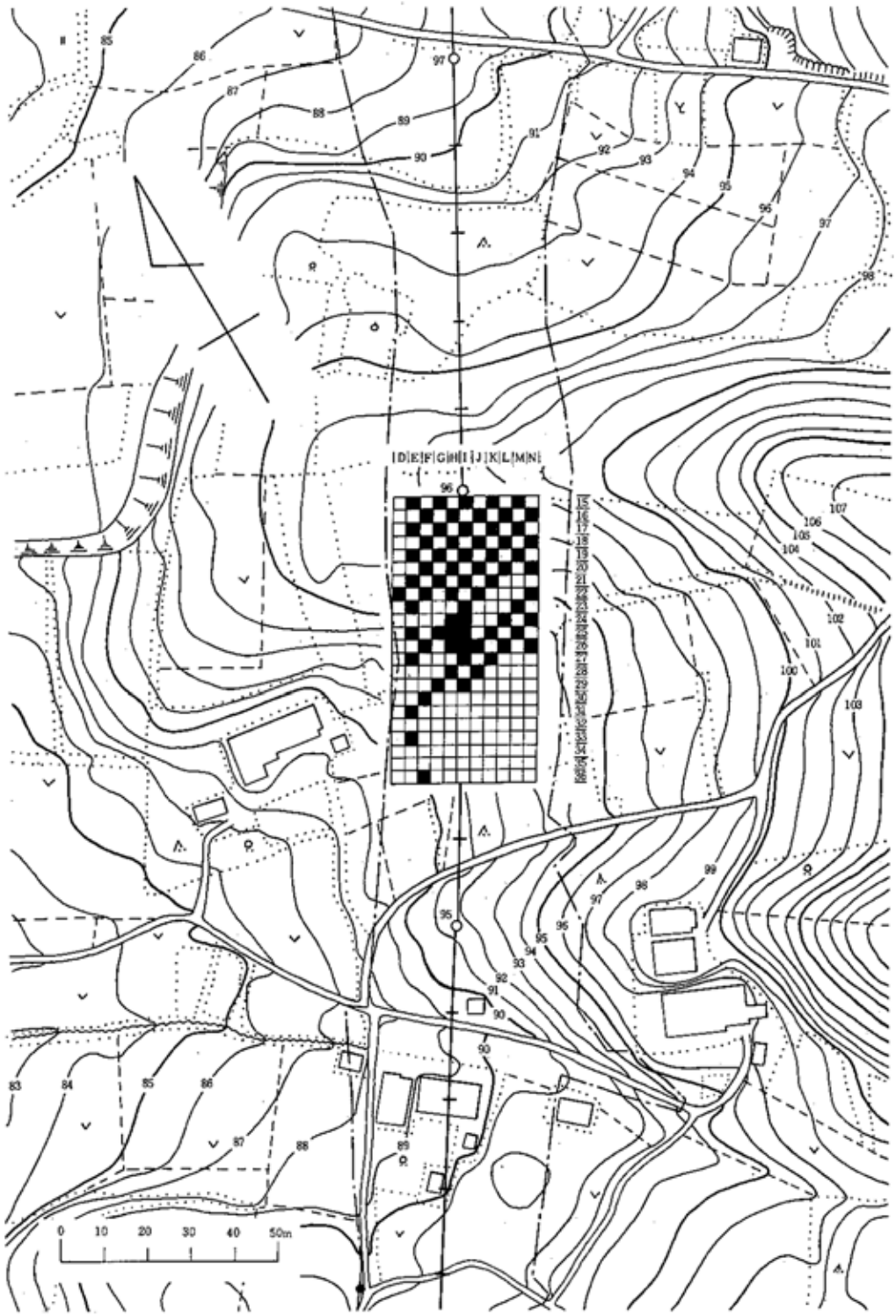
第１図　赤鬼上遺跡と周辺の遺跡

Ⅱ　調査の方法および経過

12 月 2 日から発掘調査を開始した。道路敷中心杭ＳＴA95＋60・ＳＴA95＋80 を基準にして 33m・南北 66mの範囲に 3m単位の方眼を組み、さらに、どのような遺構等が分布しているのかを検討するために微地形を考慮しながらグリッド設定を行なった。

まず、12 月 4 日から発掘区の南側台地裾部の埋没谷付近から粗掘りを開始し、北側台地上部へと順次市松状に発掘区を拡大しながら掘り進めていった。その結果、埋没谷付近では 3 枚の層が確認され、表土から 2 層にかけて弥生土器、土師器、須恵器などの破片が少量出土したが良好な遺物包含層などの遺構は発見されなかった。しかし台地中腹Ｇ‐25 区において東西に走る黒褐色土層を確認したため、さらに、付近の区を拡張して遺構の検出に努めた結果、石組みの煙道部と燃焼部をもつ竪穴住居跡 1 軒を確認した。住居跡が検出された区域より北側の台地上部は畑地に開墾された際に大規模な土砂の移動がなされたらしく薄い表土下すぐ地山となっており、遺構等は検出されなかったが弥生土器、土師器等の遺物が少量出土した。

12 月 7 日から粗掘りと併行して住居跡の精査を行ない、精査終了後、平板測量を行なった。最終的な発掘面積は 69 区 621 ㎡・12 月 22 日で今回の調査は終了した。



第２図　赤鬼上遺跡グリッド配置図

Ⅲ　調査の成果

１．基本層序

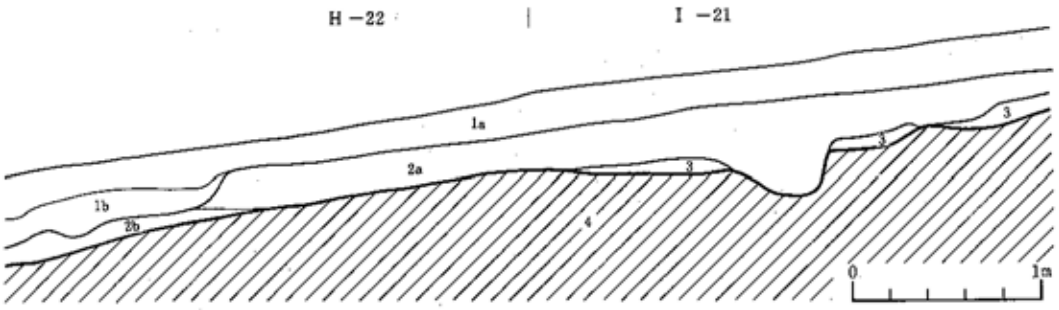
場所によって部分的な違いはあるものの、遺跡の基本的な層序は次のとおりである。

第１層　表土層である。層の厚さは20～30㎝で攪乱が著しい。

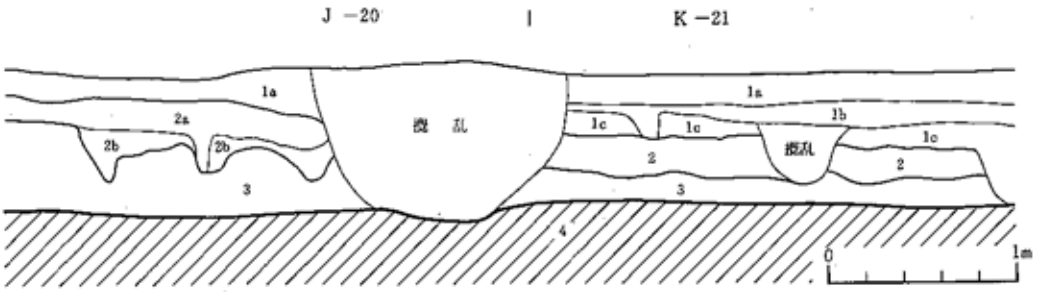
第２層　黒色シルト層である。発掘区の東側から南側にかけて堆積しており、層の厚さは約20㎝である。第２層の下面は凹凸が著しい。第２層は地山の混入度合から第２ａ層と第２ｂ層に細分される。第２ａ層は若干の地山粒を混入する程度であるが、第２ｂ層は地山粒の混入度合が大きい。

第３層　褐色シルト層で、第４層への漸移層である。第３層と第２層と同じような分布範囲である。層の厚さは約20㎝である。遺物は含まない。

第４層　黄褐色シルト層で地山である。



第３図　H-22区(東壁)・I-21区(西壁)断面図



1a 1b 1c	表土（耕作土）
2a	黒色シルト、地山粒を少量含む
2b	黒色シルト、地山粒を多量含む
3	褐色シルト（漸移層）
4	黄褐色シルト（地山）

第４図　J-20区(北壁)・K-21区(南壁)断面図

２．発見された遺構と遺物

今回の調査で発見された遺構は竪穴住居跡１軒である。

（1）竪穴住居跡（第５図）

確認面：地山面で確認した。

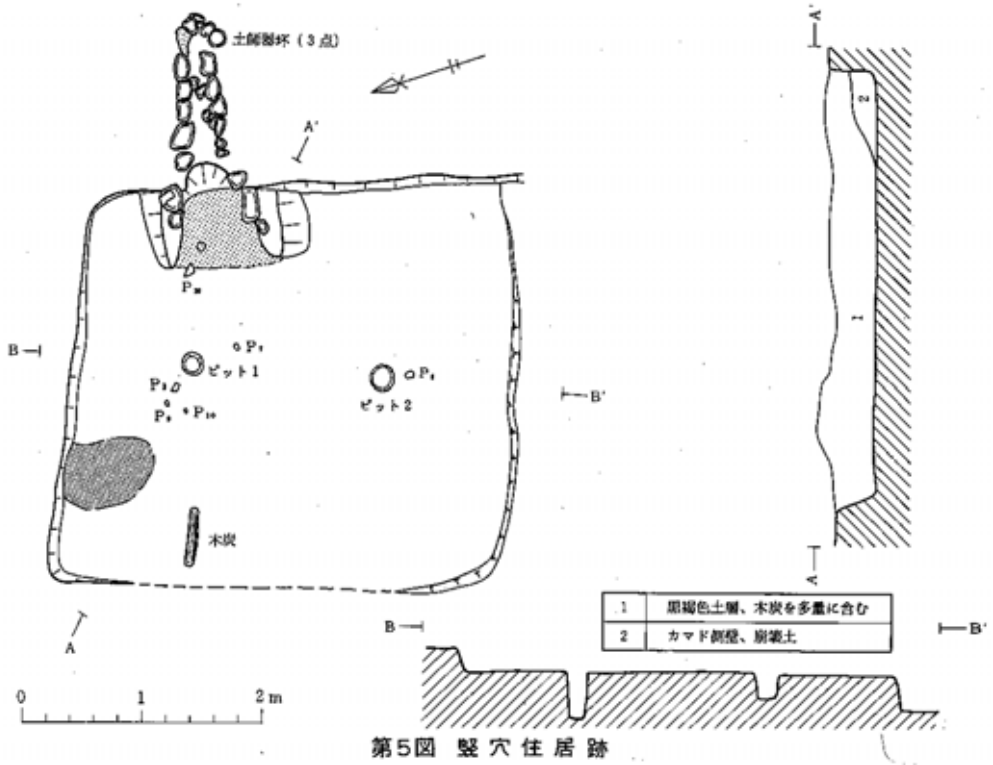
平面形・規模：南側と西側が破壊されており、東辺の一部と北辺が残っている。残存している部分から考えて平面形は方形であると思われる。規模は北辺で約 3.2m、東辺の残存長は約 3.5mである。

堆積土：堆積土は１層確認された。黒褐色土層で木炭を多量に混入している。

床：地山を床としており、非常にかたくしまっている。あまり凹凸がなく平坦であるが、全体的に北から南へわずかに傾斜している。北壁西寄りに 75×60 ㎝の範囲で焼土が認められる。また、西壁の近くから 50×10 ㎝の棒状の木炭が発見されている。

壁：地山を壁としている。壁は床面から急激に立ち上がっており、壁高は北壁で約 20 ㎝である。

柱穴：床面の南北中軸線上にピットが２個検出されたが、柱痕跡が認められず柱穴かどうか不明である。



第5図　竪穴住居跡

カマド：東壁の北寄りにとりつけられている。カマドの主軸はN-75°-Wである。燃焼部の規模は幅80㎝、奥行70㎝である。燃焼部は右側に3個、左側に2個の河原石を立てて側壁とし、河原石の外側を粘土でかためている。燃焼部底面には焼土が約5㎝の厚さでかたく堆積している。燃焼部奥壁は東壁より外側に約20㎝奥まっており、ゆるやかに立ち上がって煙道に接続する。煙道部には左側に6個、先端部に5個、右側に9個の河原石が並んでいる。河原石の大きさは約10～20㎝である。煙道の長さは約1.2m、底面幅は約20㎝である。煙道の先端南側から完形の土師器坏3点が重なった状態で発見されている。この土師器坏は確認面が低く煙道の河原石に接して出土していることから、本住居に伴うものと思われる。

出土遺物：床面・煙道脇・堆積土から土師器、須恵器、弥生土器、石器が出土している。

土師器：床面・煙道脇・堆積土から坏の破片35点、甕の破片36点出土した。そのうち図示できるものは煙道脇から重なった状態で出土した坏3点、床面出土の坏・甕各1点である。

坏:第6図2～5の器形はほぼ同様で底部から口縁部にかけてやや丸味をもって立ちあがる。5はわずかに口縁部が外反する。いずれも製作にロクロを使用しており、底部の切り離し技法は再調整が加えられているため不明なもの（2・3）、再調整が施されているが一部回転糸切り痕の残るもの（4・5）がある。

調整として、2～5は外面体部下半から底部全面に手持ちヘラケズリが施されている。口縁部・体部は横・斜位方向、底部は放射状にヘラミガキ、黒色処理されている。2は放射状にヘラミガキした後でさらにその周囲を横方向にヘラミガキされている。

2は体部外面に倒立した二字からなる墨書が見られ、上の字は「本」と読みとれるがもう一字は欠損しているため判読できない。3は体部外面中央部に籾痕がみられる。

甕：第6図1は製作にロクロを使用しないもので、体部中央がわずかに膨み口縁部へゆるやかに外反しながら移行し、短い口縁部がつく。

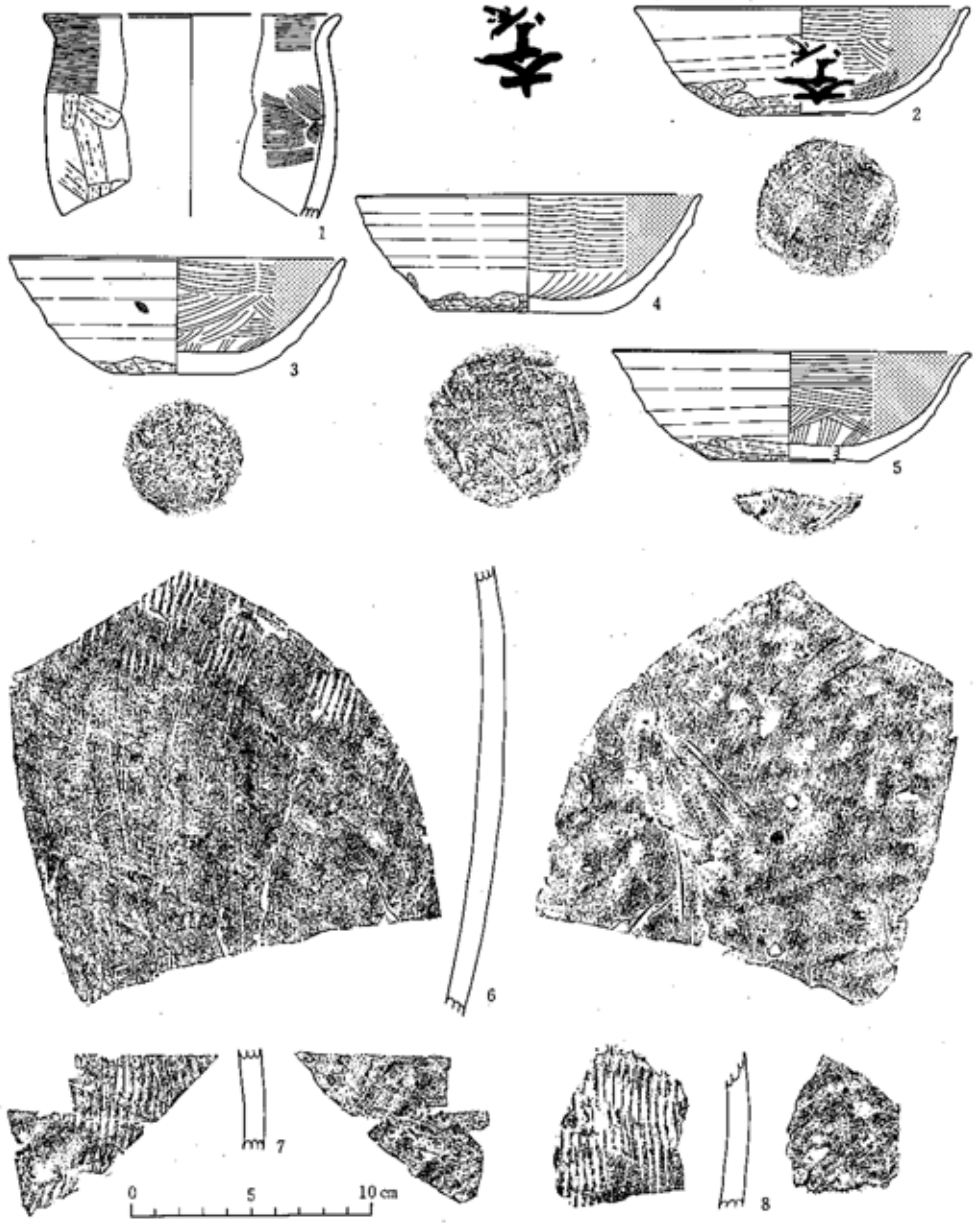
調整として、外面の口縁部から体部上半にかけて横ナデ、それ以下はヘラケズリされている。内面は口縁部が横ナデ、体部にナデが施されている。

須恵器：床面・堆積土から甕の破片5点出土している。そのうち、図示できるものは床面1点・堆積土2点である。

甕：第6図6～8は体部外面に平行タタキ目、内面にナデが観察される。6は平行タタキ目の後にヘラケズリが施されている。

弥生土器：床面および堆積土から24点出土している。小破片が多いために器形のわかるものは少ない。表面が磨滅していたり剥落しているものを除き、比較的文様の明瞭なものを拓影で示した。

第7図1は鉢の口縁部破片である。極めて幅のせまい横位沈線が3条めぐり、その下にやや



土器観察表　　（ ）内の数字は現存部分の推定計測値

図版	登録番号	出土区名・層位	種別	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	調整 体部 内面	調整 体部 外面	調整 底部 内面	調整 底部 外面	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考
1	AK-HK-1	1住・床面 P1	土師器(甕)	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	ヘラケズリ			(12.4)			
2	AK-HT-1	1住・煙道脇	土師器(坏)	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	14.0	5.7	4.6	器壁土器
3	AK-HT-2	1住・煙道脇	土師器(坏)	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	ヘラケズリ	14.0	5.0	4.9	転 倒
4	AK-HT-3	1住・煙道脇	土師器(坏)	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	回転糸切痕 ヘラケズリ	14.4	7.0	4.9 5.1	
5	AK-HT-4	1住・床面 P1	土師器(坏)	ヘラミガキ	ロクロ痕	ヘラミガキ	ヘラケズリ	ヘラミガキ	回転糸切痕 ヘラケズリ	(15.0)	(5.7)	(4.6)	
6	AK-SK-1	1住・床面 P4	須恵器(甕)			ナデ	平行タタキ目 ヘラケズリ						
7	AK-SK-2	1住・堆積土	須恵器(甕)			ナデ	平行タタキ目						
8	AK-SK-3	1住・堆積土	須恵器(甕)			ナデ	平行タタキ目						

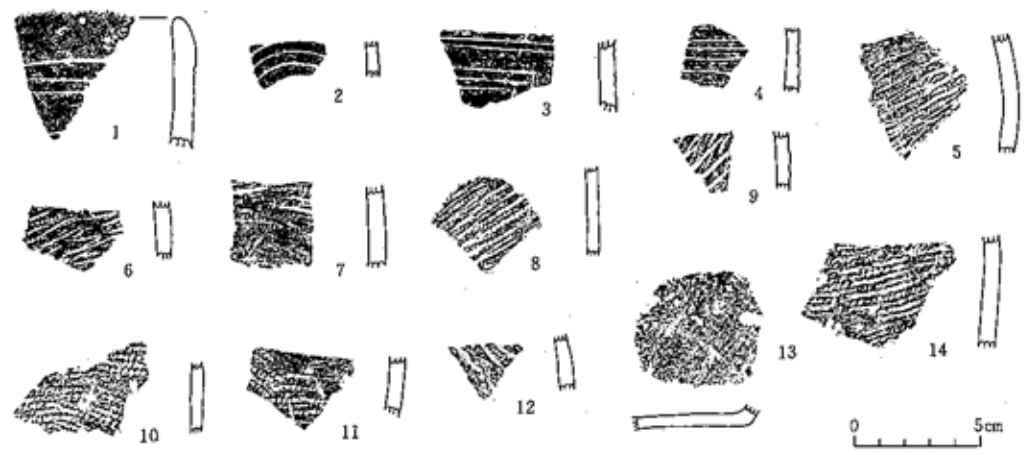
第６図　竪穴住居跡出土遺物(1)

間隔をおいてもう１条沈線がえがかれている。

第７図2～4は先端の鋭い施文具による沈線がえがかれており、沈線の幅はきわめてせまい。2は3条の弧状沈線が等間隔にえがかれている。3は3条単位の横位沈線が上下にえがかれており、さらに3条単位の縦位沈線と組み合わさっている。また、沈線間に朱塗りの痕跡がみとめられる。4は不等間隔に5条の横位沈線がめぐっている。

第７図5～12・14は体部破片であるが、7は底部に近い体部下半である。8・11・14はＬＲ縄文が、5～7・9はＬＲ＋Ｒの附加縄文が、12はＲの撚糸文が施文されている。

第７図13は底部破片である。外面に非常に目の細かい布目痕がみとめられる。



弥生土器口縁部観察表

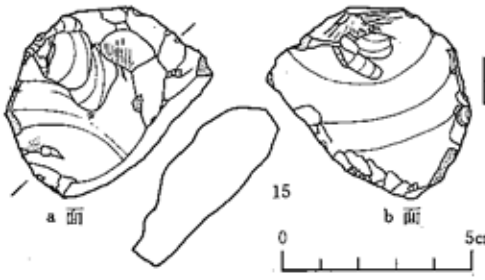
図版	登録番号	地区	口縁部形態	地文調整 口唇部	口縁部 内面	口縁部 外面	体部 内面	体部 外面	文様表現技法	分類
1	AK-Y-8	1住・床面	直立	ナデ	ミガキ	ミガキ			沈線（横位）	ＩＡ

弥生土器体部観察表

図版	登録番号	出土地区	層位	地文調整 内面	地文調整 外面	文様表現技法	分類
2	AK-Y-2	1住	床面	ホウキ状工具ナデ	ホウキ状工具ナデ	沈線（弧状）	ＩＡ
3	AK-Y-9	1住	堆積土	ミガキ	ミガキ	沈線（横位・縦位）朱塗り	ＩＡ
4	AK-Y-14	1住	堆積土	ミガキ	ミガキ	沈線（横位）	ＩＡ
5	AK-Y-4	1住	堆積土	ミガキ	附加縄文（ＬＲ＋Ｒ）		Ⅲ
6	AK-Y-5	1住	堆積土	ハケメ後ナデ	附加縄文（ＬＲ＋Ｒ）		Ⅲ
7	AK-Y-1	1住	堆積土	ナデ	附加縄文（ＬＲ＋Ｒ）		Ⅲ
8	AK-Y-12	1住	堆積土	ハケメ後ナデ	縄文（ＬＲ）		Ⅱ
9	AK-Y-6	1住	堆積土	ミガキ	附加縄文（ＬＲ＋Ｒ）		Ⅲ
10	AK-Y-13	1住	堆積土	ミガキ	縄文（ＬＲ）		Ⅱ
11	AK-Y-3	1住	堆積土	ナデ	縄文（ＬＲ）		Ⅱ
12	AK-Y-11	1住	堆積土	ハケメ後ナデ	撚糸文（Ｒ）		Ⅳ
14	AK-Y-7	1住	堆積土	ミガキ	縄文（ＬＲ）		Ⅱ

弥生土器底部観察表

図版	登録番号	地区	底部地文調整 内面	底部地文調整 外面	体部地文調整 内面	体部地文調整 外面
13	AK-Y-10	1住 堆積土	ホウキ状工具ナデ	布目痕		



石器計測表 （ ）の数値は不完全なもの

図版	登録番号	出土地区・層位	器種	最大長×最大幅×最大厚(cm)	重量g	石材
15	AK-S-1	1住堆積土	剥片	(4.94) × (5.05) × (1.86)	(44.6)	頁岩

第７図　竪穴住居跡出土遺物(2)

石器：堆積土から剥片が１点出土している。

第７図 15 は剥片で側縁に自然面を残し、右下半は欠損している。平坦打面であり、バルブを残している。

(2) 表土および堆積土出土遺物

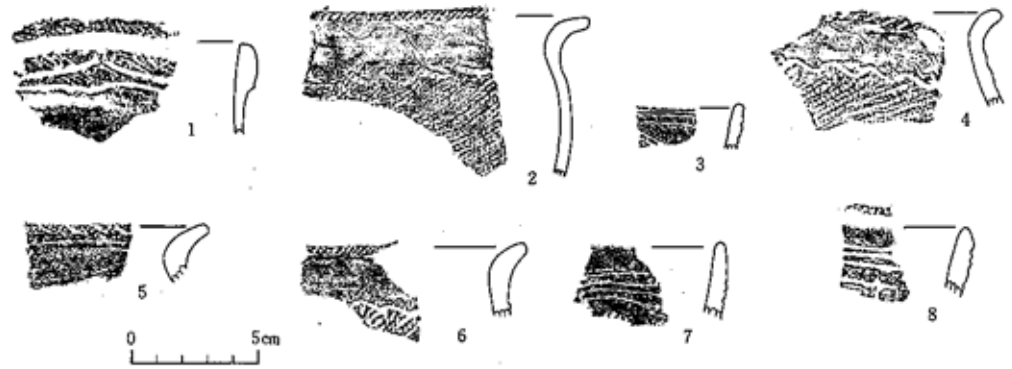
路線敷中軸線の東側から南側にかけて少量出土している。層位的には第１層、第２層から弥生土器、石器、土師器、須恵器などが混在して発見されている。

弥生土器：第１層、第２層から 80 点出土している。器形のわかる破片が少ないので、文様表現を中心に説明を加える。

第８図３・７は口縁部破片であり、先端の鋭利な施文具による幅のせまい（約１㎜）沈線がえがかれている。３は横位沈線が口縁部に３条めぐりその下に２条の斜位沈線がえがかれている。７は横位沈線が１条めぐりその下に３条の不整弧状沈線がえがかれている。３・７ともに朱塗りの痕跡がみとめられる。

第８図８は口縁部に３条の横位沈線をめぐらせ、その下に縦位沈線をえがいている。３・７とは違って沈線の幅はひろく（約２㎜）しかも深い。口唇部にはＬＲ縄文を回転させている。

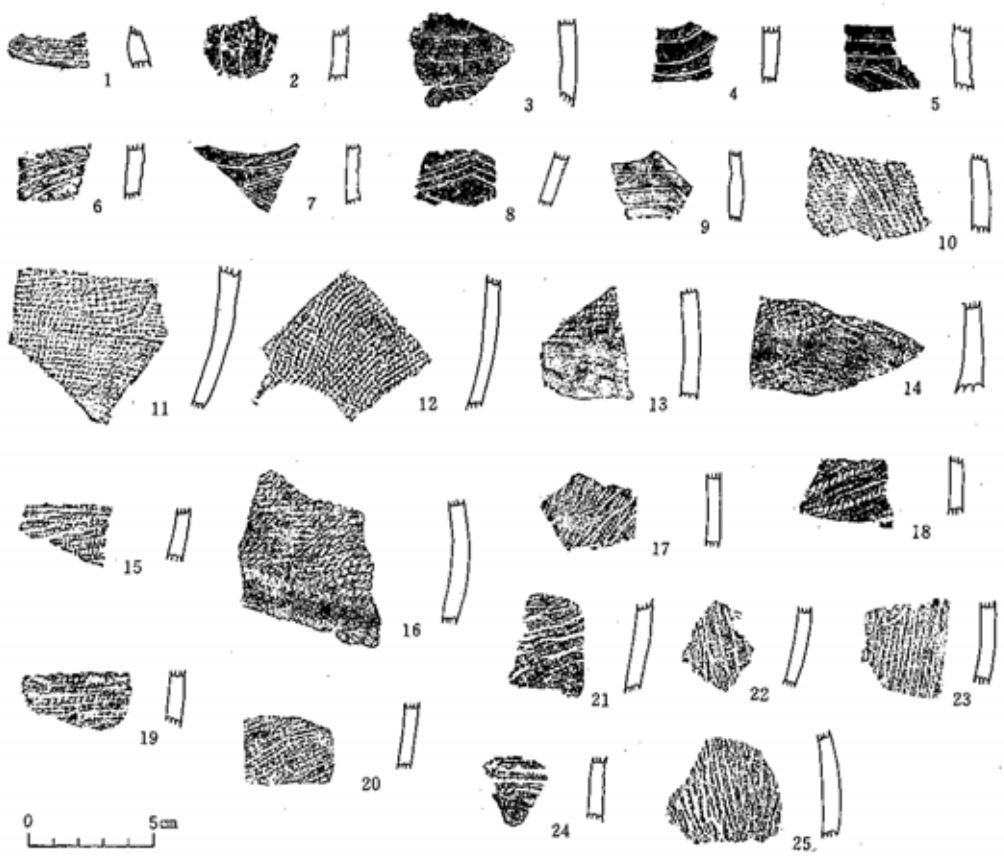
第９図1～9は体部破片であり、先端の鋭い施文具による幅のせまい沈線がえがかれている。1～4は弧状沈線がえがかれている。5・6は横位沈線と弧状沈線が、7は横位沈線と斜位沈線がそれぞれ組み合わさってえがかれている。8・9は斜位沈線である。いずれも数条の沈線



弥 生 土 器 口 縁 部 観 察 表

図版	登録番号	出土地区 層位	口縁部形態	施文調整 口唇部	施文調整 口縁部 内面	施文調整 口縁部 外面	施文調整 体部 内面	施文調整 体部 外面	文様表現技法	分類
1	AK-Y-32	N18	直立	縄文(RL)	ナデ	縄文(RL)	ナデ	ナデ	磨消縄文(連弧文)	V
2	AK-Y-23	L20	外反	縄文(LR)	ナデ	横ナデ	ミガキ	縄文(LR)	綾絡文(R)	II
3	AK-Y-40	N16	直立	ナデ	ミガキ	ナデ			沈線(横位、斜位)朱塗	IA
4	AK-Y-22	F26 1,2層	外反	縄文(LL)	不明	ナデ	ミガキ	縄文(LR)	綾絡文(R)	II
5	AK-Y-17	表採	外反	附加縄文(LR+R)	ナデ	横ナデ				III?
6	AK-Y-30	M19	外反	縄文(LR)	ミガキ	横ナデ	ミガキ	縄文(LR)	綾絡文(R)	II
7	AK-Y-50	F26 1,2層	直立	ミガキ	ミガキ	ナデ?			沈線(横位、弧状)朱塗	IA
8	AK-Y-51	H28 1層	直立	縄文(LR)	ミガキ	ナデ			沈線(横位、縦位)	IB

第８図　表土および堆積土出土遺物(1)



弥生土器体部観察表

図版	登録番号	出土地区	層位	地文調整 内面	地文調整 外面	文様表現技法	分類
1	AK-Y-49	E25	1.2 層	ミガキ	ミガキ	沈線（弧状）	IA
2	AK-Y-48	K25	2 層	不明	ミガキ	沈線（弧状）	IA
3	AK-Y-46	I 24	1.2 層	ミガキ	ミガキ	沈線（弧状）	IA
4	AK-Y-15	表採		ミガキ	ミガキ	沈線（弧状）	IA
5	AK-Y-36	N16		不明	ミガキ	沈線（横位・弧状）	IA
6	AK-Y-41	I 27	2 層	ミガキ	ミガキ	沈線（横位・弧状）	IA
7	AK-Y-45	N22	2 層	不明	ミガキ	沈線（横位・斜位）	IA
8	AK-Y-31	N18		不明	ミガキ	沈線（斜位）	IA
9	AK-Y-34	M17		不明	ナデ	沈線（斜位）	IA
10	AK-Y-42	I 27	2 層	ミガキ	縄文（LR）		II
11	AK-Y-43	I 27	2 層	ミガキ	縄文（LR）		II
12	AK-Y-44	N22	2 層	ミガキ	縄文（LR）		II
13	AK-Y-18	L20		ミガキ	縄文（LR）		II
14	AK-Y-24	K19		ミガキ	縄文（LR）		II
15	AK-Y-27	M19		ミガキ	縄文（LR）		II
16	AK-Y-28	M19		不明	縄文（LR）		II
17	AK-Y-20	L20		ミガキ	附加縄文（LR＋R）		III
18	AK-Y-16	表採		ミガキ	附加縄文（LR＋R）		III
19	AK-Y-37	N16		不明	附加縄文（LR＋R）		III
20	AK-Y-21	L20		ミガキ	附加縄文（LR＋R）		III
21	AK-Y-29	M19		ミガキ	附加縄文（LR＋R）		III
22	AK-Y-19	L20		ナデ	撚糸（R）		IV
23	AK-Y-33	M17		ナデ	撚糸（R）		IV
24	AK-Y-38	N16		ナデ	撚糸（R）		IV
25	AK-Y-47	L24	2 層	ミガキ	撚糸（R）		IV

第９図　表土および堆積土出土遺物(2)

を１単位として施文されている。また、1～8 は沈線の間がよく磨かれている。

第 8 図 1 は壺の口縁部であり、直立する。器厚は口縁部が肥厚し頸部は薄い。口唇部は平坦に作り出されており、ＲＬ縄文が施文されている。口縁部はＲＬ縄文を回転させたのちに上向き下向きの連弧文をえがき、その区画内の縄文を軽く磨消している。頸部は無文帯である。

第 8 図 2・4・6 は甕の口縁部破片である。いずれも平縁で口縁部は外反し、頸部で直立気味にくびれ体部上半に膨らみをもつ。また、3 点とも口唇部にＬＲ縄文を回転させ、頸部は横ナデによる無文帯で、体部に綾絡文（Ｒ）と縄文（ＬＲ）を回転させている。

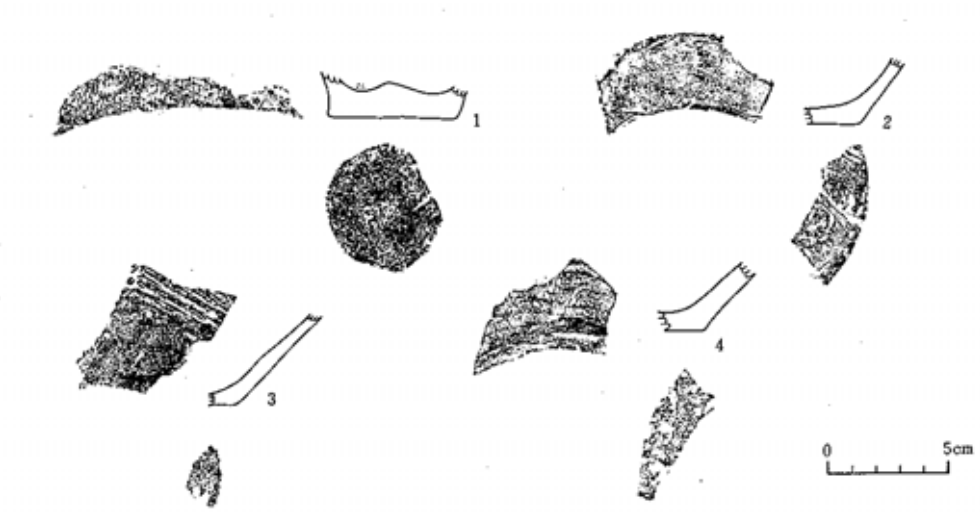
第 8 図 5 は頸部までの口縁部破片であるが器形は 2 と同じである。口唇部にはＬＲ＋Ｒの附加縄文を回転させている。

第9図10～16は縄文を地文とする体部破片である。13と14はミガキの施された部分があり、底部に近い体部下半である。縄文はすべてＬＲ縄文である。

第 9 図 17～21 は附加縄文を地文とする体部破片である。すべてＬＲ＋Ｒの附加縄文である。

第 9 図 22～25 は撚糸文を地文とする体部破片である。すべてＲの撚糸文を回転させている。

第 10 図 1～4 は底部破片である。底部外面は 1 が無文であるが、2～4 には布目痕がみとめられる。体部下半の地文としては、1 はＲＬ縄文を、2・3 はＲの撚糸文をそれぞれ回転させている。



弥生土器底部観察表

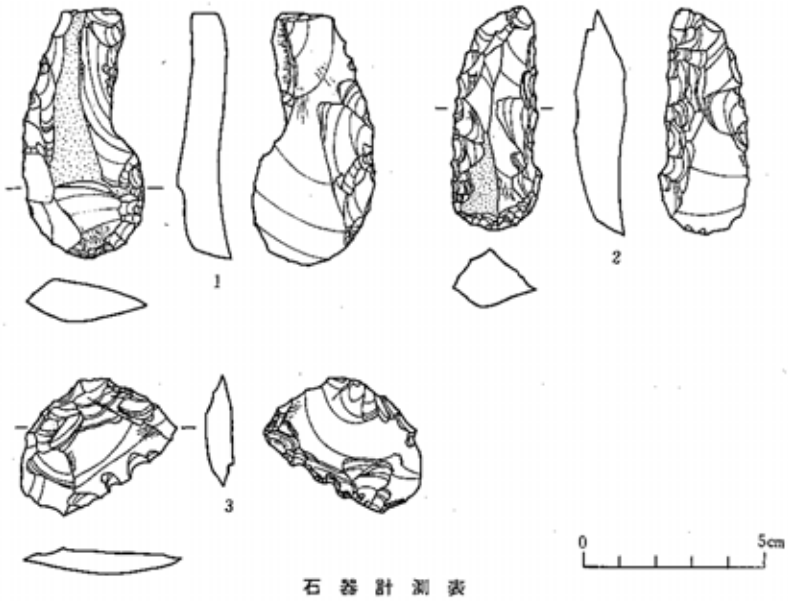
図版	登録番号	出土地区　層位	底部地文調整		体部地文調整	
			内面	外面	内面	外面
1	AK-Y-26	K 19	ナデ	ミガキ	ナデ	縄文（RL）
2	AK-Y-35	M17	ミガキ	布目痕	ミガキ	撚糸（R）
3	AK-Y-39	N16	不明	布目痕	ナデ	撚糸（R）
4	AK-Y-25	K 19	ミガキ	布目痕	ミガキ	ミガキ

第10図　表土および堆積土出土遺物(3)

石器：3点出土しており、すべてスクレイパーである。

第11図1・2は形態面や調整技法において多くの共通点がみとめられる。第一にぶ厚い剥片を利用したエンドスクレイパーであること。第二に剥片の端部に10条程度の樋状剥離を加えて刃部を形成していること。第三に表面に自然面を残していること。第四にバルブを除去していることなどである。なお、2 には両側縁から刃部にかけて使用によると思われる磨滅がみとめられる。

第11図3は不定形の剥片の主要剥離面にあらい二次加工を加えたスクレイパーである。バルブはそのまま残っている。ただし、使用痕が刃部には明瞭でなく、表面の左下方にみとめられる。



石器計測表

図版	登録番号	出土地区・層位	器種	最大長×最大幅×最大厚(cm)	重量(g)	石材
1	AK-S-2	J-28-2	スクレイパー	6.97×3.28×1.22	27.8	黒曜石
2	AK-S-3	X	スクレイパー	6.27×2.46×1.63	25.1	〃
3	AK-S-4	I-24-1～2	スクレイパー	4.00×4.54×0.77	10.4	〃

第11図　表土および堆積土出土遺物(4)

第1表　破片集計表（弥生土器）

（拓影したものを除く）

部位	外面	内面	1住	E21 2層	E27 1～2層	E31 2層	F26 1～2層	F30 2層	H28 1層	I24 1～2層	I27 2層	J26 2層	J28 2層	K25 2層	L20	L24 1層	L24 2層	M17	M19	表採	合計
体部	横位沈線	ナデ																		1	1
	LR	ナデ	2			1															3
	LR	ミガキ		1			1			1			1							1	5
	LR	不明	1		1					1						1			1		5
	RL	ナデ	1												1						2
	RL	ミガキ																		1	1
	RL	不明												1	1						2
	縄文(不明)	ミガキ							1	1											2
	縄文(不明)	不明	2		2	2													1		7
	LR＋R	ナデ										1									1
	LR＋R	ミガキ	1				1	1			1				2			1	2	1	10
	LR＋R	不明	2			1			1						1		1			1	7
	RL＋L	不明						1											1		2
	撚糸 R	ミガキ	1																	1	2
	撚糸 R	不明								1				1							2
	撚糸 L	不明												1							1
合計			10	1	3	4	2	2	2	4	1	1	1	3	5	1	1	1	5	6	53

土師器：坏（79 点）・甕（83 点）・高坏（1 点）の破片が出土したが図示できるものは高台付坏 1 点である。

高台付坏：第 12 図 2 は短い高台部が外方向にわずかに開き、端部は平坦である。坏部は底部から口縁部にかけて丸味をもって立ちあがり、口縁部はわずかに外反する。坏底部の切り離しは不明である。

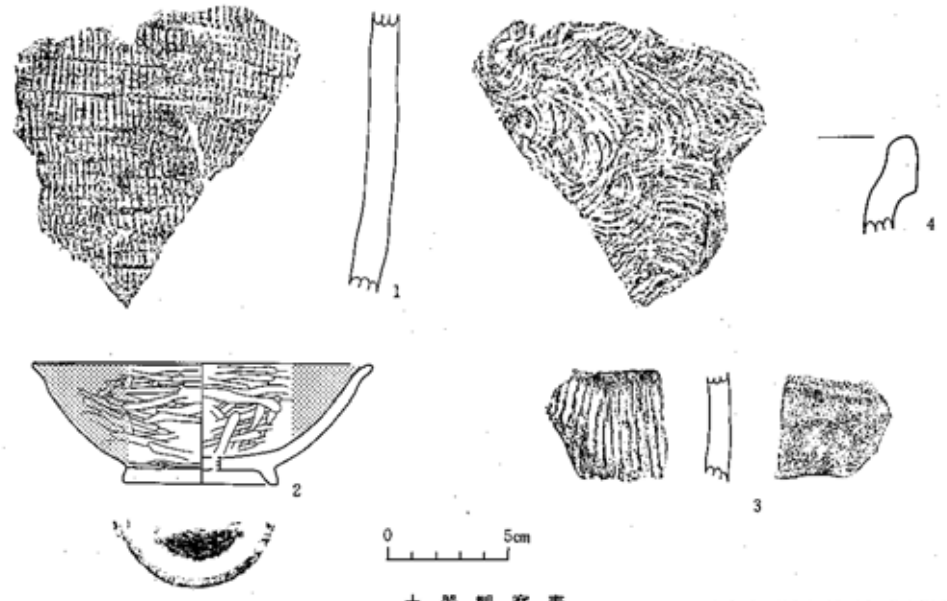
調整として、坏部内外面にヘラミガキ・黒色処理されている。高台部は内外面ともナデが認められる。高台端に籾痕が認められる。

坏：破片を観察すると口縁部・体部は外面にロクロ、内面にヘラミガキ・黒色処理されているものがほとんどである。底部は外面に回転糸切り痕・手持ちヘラケズリされているものが大部分である。

甕：体部破片から推定して長胴形を呈するものが多いようである。口縁部の調整は内外面積ナデ・ロクロ、体部は内外面ロクロ、外面ヘラケズリ、内面ナデのものが比較的多いようである。

高坏：脚部の破片で、外面ヘラケズリ、内面ナデが認められる。

なお、これらは小破片で詳細は不明な点が多い。



土 器 観 察 表

（ ）内の数字は現存部分の推定計測値

図版	登録番号	出土区名・層位	種別	調整 口縁部 内面	調整 口縁部 外面	調整 体部 内面	調整 体部 外面	調整 底部 内面	調整 底部 外面	口径 cm	底径 cm	器高 cm	備考
1	AK-SK-4	F-26-1～2	須恵器（甕）	ヘラミガキ 黒	ヘラミガキ 黒	青海波文 ヘラミガキ 黒	格子状タタキ目 ヘラミガキ 黒	ヘラミガキ 黒	ナデ	(14.3)	(6.5)	(5.0)	接続
2	AK-HT-5	K-25-1～	土師器(高台付坏)			ナデ	早打タタキ目						
3	AK-SK-5	J-28-2～	須恵器（甕）										

第12図　表土および堆積土出土遺物(5)

須恵器：いずれも小破片で器形を推定できる資料は少ないが甕体部（3 点）・壺頸部（1 点）の破片が出土している。

甕：第 12 図 1・3 は体部破片である。1 は外面に格子状タタキ目、内面に青海波文、3 は外面に平行タタキ目、内面にナデが施されている。

壺：図示できなかったが長頸壺の頸部破片と思われる。内外面ロクロ調整されている。

赤焼土器：坏の口縁部（1 点）・体部（3 点）の破片が出土した。いずれも内外面がロクロ調整されている。

中世陶器：甕の口縁部破片が 1 点出土している。第 12 図 4 は口縁部は下に折れずに直立し、口縁端部がまるくおさまる。口縁外面には幅の広い口縁帯を形成し、内面には幅広の浅い沈線がめぐり、受口状口縁になる。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施されている。口縁部形態の特徴から鎌倉後半に包含される。

Ⅳ 考　　察

１．層序について

前述したように、第１層・第２層から弥生土器、石器、土師器、須恵器が混在して出土している。しかも、第１層・第２層とも凹凸がはげしい。このようなことから、攪乱されていると考えられる。

２．出土遺物について

今回の調査で、本遺跡から出土した遺物は弥生土器、石器、土師器、須恵器、赤焼土器がある。

(1) 弥生土器

赤鬼上遺跡出土の弥生土器が層位的・器形的に分類することが困難であることは前述のとおりである。そこで、文様を中心に分類したところ次のような結果になった。

Ⅰ：沈線による文様をもつもの

A．沈線の幅のせまいもの（第７図1～4，第８図3・7，第９図1～9）

B．沈線の幅の太いもの（第８図8）

Ⅱ：縄文を地文とするもの（第７図8・10・11・14，第８図2・4・6，第９図10～16）

Ⅲ：附加縄文を地文とするもの（第７図5～7・9，第８図5，第９図17～21）

Ⅳ：撚糸文を地文とするもの（第７図12，第９図22～25）

Ⅴ：磨消縄文による文様をもつもの（第８図1）

このような特徴の土器群は層位的に共伴関係にあるとはいえないものの、文様的には強いまとまりがあり、とくにＩＡはすべて同一時期のものと考えられるほどの特徴である。したがって、これらは限定された時期のものと考えられる。

このような土器群を現在までの研究成果に対比してみる。ＩＡ・Ⅱ類が村田町北沢遺跡で出土している。(斉藤・真山：1978)。ＩＡ・Ⅱ・Ⅳ類が蔵王町欠遺跡で（白鳥：1971）、ＩＡ・Ⅱ・Ⅲ類が蔵王町大山遺跡で（藤沼：1971）（註）・ＩＡ・Ⅱ類が蔵王町大橋遺跡で（藤沼：1971）それぞれ共伴して出土している。そして、これらの土器は編年的にすべて「円田式」に位置づけられている。このことから、本遺跡出土のＩＡ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ類の土器は円田式土器であると考えられる。ＩＢ類は他に類例がみられないが、沈線により施文されていることから、ここでは一応円田式の中に含めておくことにする。今後の類例の増加をまちたい。

Ⅴ類は口縁部形態やＲＬ縄文の使用、さらに磨消縄文による連弧文などから一迫町上ノ原Ａ

遺跡出土の土器（一迫町教委：1978）や、蔵王町大橋遺跡出土の土器（藤沼：1971）に類似している。これらの土器は「天王山式」とされていることから、本遺跡のⅤ類も天王山式土器であろうと思われる。

（註）「原体についてはもう少し実験と観察が必要である」と述べて一応撚糸文に分類しているが、拓影から判断すると附加縄文である。

(2) 石器

今回出土した石器は剥片１点、スクレイパー3 点である。これらの石器は層位的に共伴土器を確認できないのでその時期については不明である。ただし、断定はできないが、出土土器の種類および出土量からみて円田式期の可能性があると思われる。

(3) 土師器

坏・高台付坏・甕・高坏の器種がある。

坏は４点とも製作にロクロを使用し、底部から口縁部にかけて丸味をもって立ちあがる。器面調整はいずれも外面体部下半から底部全面に手持ちヘラケズリされている。これらのうち、2 点は底部の一部に回転糸切り痕が残されている。

高台付坏は製作にロクロを使用し、短い高台部が外方向にわずかに開き、坏部は底部から口縁部にかけて丸味をもって立ちあがる。器面調整は、坏部内外面ともヘラミガキ、黒色処理、高台部にナデが施されている。

甕はロクロ非使用で、器高より口径が大きいものと推定され、最大径が口縁部にある。器形は口縁部が短く外反し、体部中央がわずかにふくらむ。

器面調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

高坏は脚部の破片で外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。

以上のような土師器が出土したが、坏、甕は竪穴住居跡の床面煙道脇から検出されており、共伴関係にある。

(4) 須恵器

甕、壺の器種がある。

甕はいずれも体部破片である。

器面調整は外面に平行タタキ目、ヘラケズリ、格子状タタキ目、内面に青海波文、ナデが施されている。そのうち、外面に平行タタキ目、ヘラケズリ、内面にナデが観察されるもの１点が竪穴住居跡出土の土師器と共伴している。

壺は図化できなかったが頚部の破片で、内外面ともロクロ調整されている。

(5) 赤焼土器

図化できなかったが、坏の口縁・体部破片で内外面ともロクロ調整されている。

(6) 土師器・須恵器・赤焼土器の年代

以上のように出土土器についての概略を述べてきたが、次に、これらの出土土器について、その年代的位置づけを検討してみたい。

上記のように、竪穴住居跡の煙道脇、床面から出土した坏は製作技法上の特徴から表杉ノ入式（氏家：1957）と考えられる。さらに、器面調整等の特徴は西野田遺跡（丹羽・柳田・阿部恵：1974）の坏第1ａ類・東山遺跡（藤沼・高野・白鳥：1971）の坏1－4類・北沢遺跡（斉藤：真山：1978）のＢ－Ⅱ類、宇南遺跡（斉藤：1979）のＣⅢｃ類などに類例がみられる。

また、それに共伴関係のある床面出土の土師器、須恵器甕も同時期のものと考えられる。

高台付坏は手取遺跡（本書所収）の第2群土器に類例がみられ、表杉ノ入式とされている。

赤焼土器は糠塚遺跡（小井川・手塚：1978）では坏ＣⅠ類と共伴し、表杉ノ入式とされていることからもほぼ同時期のものと考えられる。

以上のように出土土器について編年的位置づけを述べてきたが、これらの年代は9世紀～10世紀（宮城県多賀城跡調査研究所：1978）とされていることからおおまかに平安時代として理解しておきたい。

３．竪穴住居跡の年代

前項で述べたように煙道脇・床面出土の土師器坏から編年上表杉ノ入式（平安時代）に属するものとして理解しておきたい。

Ⅴ　ま と め

今回の調査をまとめると次のようになる。

1. 赤鬼上遺跡は高館丘陵先端部の舌状台地緩斜面に位置する。
2. 弥生時代円田式・天王山式の遺物が出土している。
3. 平安時代の住居跡1軒とこの時期の土師器、須恵器が発見された。
4. 中世陶器が1点発見されている。
5. 遺跡の範囲は、遺物の分布範囲から考えて、路線敷外にものびる可能性がある。

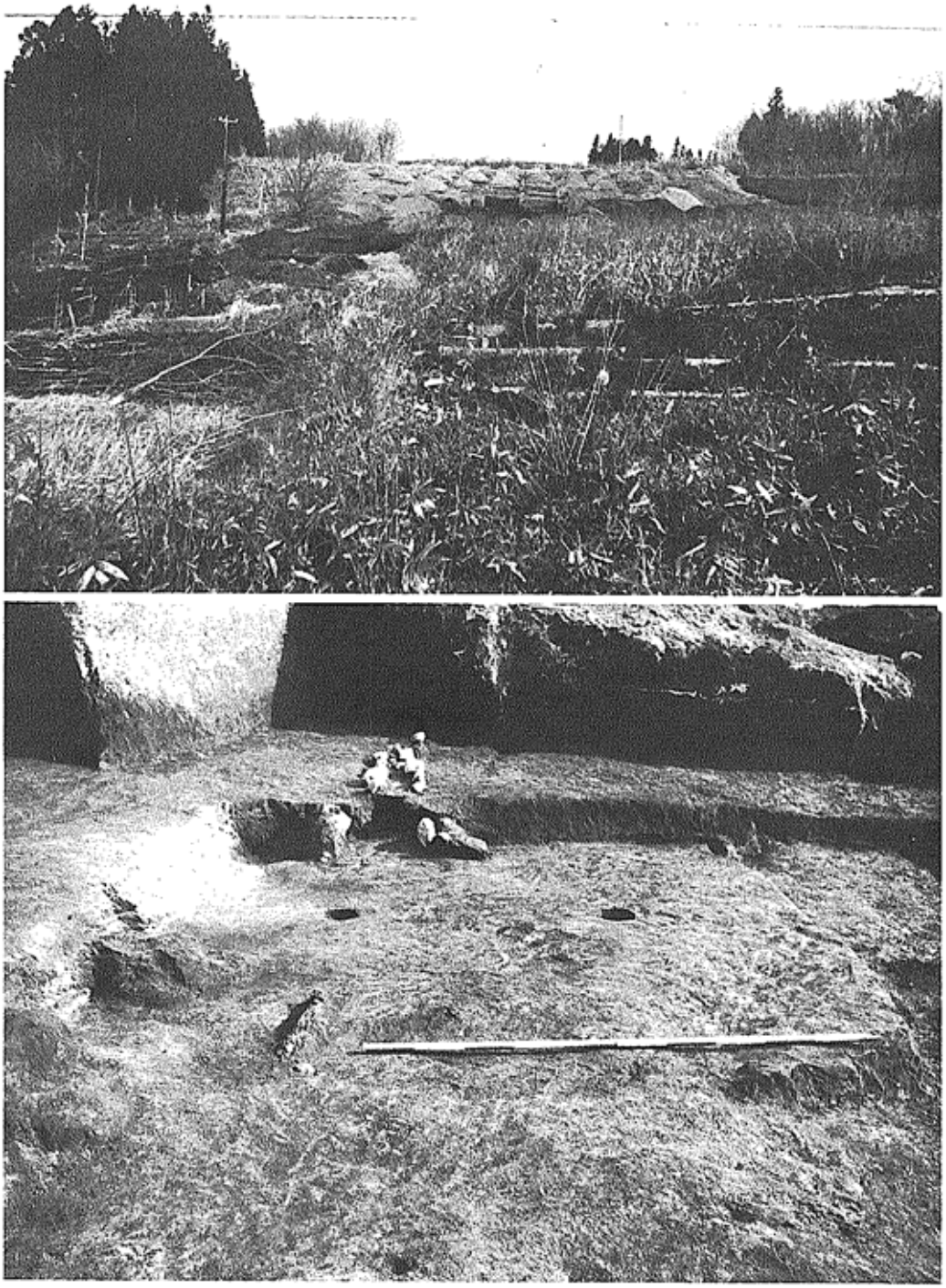
引用・参考文献　（五十音順）

一迫町教育委員会　1978　『上ノ原A遺跡』　宮城県一迫町文化財調査報告書第3集
氏家和典　1957　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会
片倉信光・中橋彰吾・後藤勝彦　1976　『白石市史』別巻　白石市
経済企画庁総合開発局　1972　『土地分類図（宮城県）』
小井川和夫・手塚　均　1978　「糠塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第53集　宮城県教育委員会
斎藤吉弘　1979　「宇南遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第59集　宮城県教育委員会
斎藤吉弘・真山　悟　1978　「北沢遺跡発掘調査概報」『宮城県文化財調査報告書』第56集　宮城県教育委員会
白鳥良一　1971　「欠遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会
白鳥良一　1971　「赤鬼上遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会
藤沼邦彦　1971　「大山遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会
藤沼邦彦　1971　「大橋遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会
藤沼邦彦　1971　「宮城県出土の中世陶器について」研究紀要第3巻
藤沼邦彦・白鳥良一・高野芳宏　1971　「東山道跡」『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会
宮城県教育委員会　1971　『宮城県文化財調査報告書』第24集　宮城県教育委員会
〃　1976　「宮城県遺跡地名表」『宮城県文化財調査報告書』第46集　宮城県教育委員会
〃　1976　「宮城県遺跡地図」『宮城県文化財調査報告書』第47集　宮城県教育委員会
宮城県多賀城跡調査研究所　1978　「伊治城跡」Ⅰ　『多賀城跡関連遺跡発掘調査報告書』第3冊

第2表　破　片　集　計　表　(図示したものを除く)

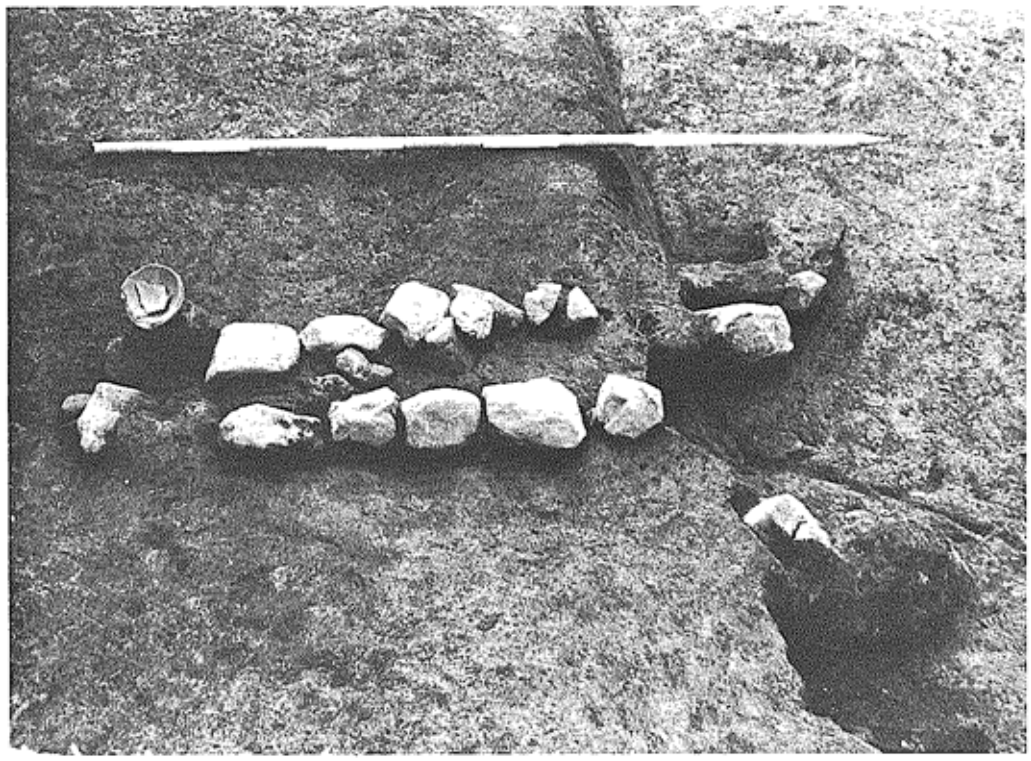
種別	器形	部位	外面－内面	1住覆土	1住床面	小計	E25 1-2層	E27 1-2層	E31	E31 2層	E33 2層	F26 1-2層	F30 2層	G29 2層	H24 2層	H28 1層	I24 1-2層	I27 2層	I29 2層	J26 2層	J28 2層	K25 2層	K27 2層	L24 2層	L26 2層	M25 2層	K-19	L-21	M-15	M-15	N-19	N-18	小計	表採	総計
土師器	坏	口縁部	ロクロ－ミガキ(黒)	9	5	14				4								3		2	1	2	2	2									16	5	35
			横ナデ－ミガキ															1															1		1
			ミガキ－ミガキ																				1	1									2		2
			ミガキ(黒)－ミガキ(黒)																															1	1
			不明－ミガキ																			1											1		1
			小計	9	5	14				4								4		2	1	3	3	3									20	6	40
		体部	ロクロ－ミガキ(黒)	9	2	11			1		1					2		2	1	4	1	4	2					2					20	3	34
			ケズリ－ミガキ(黒)	4		4				1								2		1	1	1											6		10
			ミガキ－ミガキ				1																										1		1
			ミガキ－ミガキ(黒)																																
			小計	13	2	15	1		1	1	1					2		4	1	5	2	5	2					2					27	3	45
		底部	糸切－ミガキ(黒)										1			1				2													4		4
			糸切・手持ケズリ－ミガキ(黒)						1																1								2		2
			手持ケズリ－ミガキ(黒)							1	1									2					1								5	1	7
			手持ケズリ－不明	1		1																													1
			不明－ミガキ(黒)	1		1																													1
			小計	2		2			1	1	1		1			1				4					2								11	1	15
			計	24	7	31	1		2	6	2		1			6		8	1	11	3	8	5	3	3			2					62	11	105
	甕	口縁部	ロクロ－ロクロ	1		1																												1	2
			横ナデ－横ナデ		1	1						1								1			1										3		4
			横ナデ-横ナデ・ヘラナデ																															1	1
			小計	1	1	2						1								1			1										3	2	7
		体部	ロクロ－ロクロ	12		12		2					1							2			5						1				11	3	26
			ロクロ－刷毛目							1										1													2		2
			ケズリ－ロクロ	9		9							1							2		5			2	1						1	12		21
			ケズリ－ナデ	1		1				1												1	7			1			1	1			12	1	14
			ケズリ－ミガキ								1																						1		1
			ケズリ－ミガキ(黒)								1																						1		1
			ケズリ・ミガキ－不明											1													1						1		2
			ケズリ－不明	2		2				1																					1		2	1	5
			ナデ－ナデ	1		1																													1
			ミガキ－ミガキ	1		1	1																1				1						2		4
			ミガキ－不明	1		1				1								1															2		3
			タタキ－ナデ	1							1																						1		1
			タタキ－不明	1		1																													1
			刷毛目－ナデ																															2	2
			刷毛目－刷毛目						1									1															2		2
			不明－ロクロ											1																			1		1
			不明－ナデ	1		1																													1
			不明－不明	3		3		3		3	2						1				2	6	1		1								19	2	24
			小計	32		32	1	5	1	7	5		2	2			1	2		5	2	12	14		3	2	2	1	1	1	1	1	71	9	112
		底部	ケズリ－ミガキ																						1								1		1
			不明－ナデ																															1	1
			不明－不明					1														1											2	1	3
			小計					1														1			1								3	2	5
			計	33		34	1	6	1	7	5	1	2	2			1	2		6	2	13	15		4	2	2	1	1	1	1	1	77	13	124
	高坏	脚部	ケズリ－ナデ												1																		1		1
			小計												1																		1		1
			計												1																		1		1
合計				57	8	65	2	6	3	13	7	1	3	2	1	6	1	10	1	17	5	21	20	3	7	2	2	3	1	1	1	140	140	24	230
須恵器	甕	体部	平行タタキ・ケズリ－ロクロ	1		1																													1
			ロクロ－ロクロ	1		1																													1
			ケズリ－ロクロ																								1						1		1
			平行タタキ－ロクロ							1							2				1												4	1	5
			小計	2		2				1							2				1						1						5	1	8
			計	2		2				1							2				1						1						5	1	8
	壺	胴部	ロクロ－ロクロ																											1			1		1
			小計																											1			1		1
			計																											1			1		1
合計				2		2				1							2				1						1			1			6	1	9
赤焼土器	坏	口縁部	ロクロ－ロクロ																						1								1		1
		体部	ロクロ－ロクロ													3																	3	1	4
			計													3									1								4	1	5
総計				59	8	67	2	6	3	14	7		3	2	1	6	3	10	1	17	6	21	20	3	7	2	3	3	1	2	1	1	146	25	239

写　真　図　版

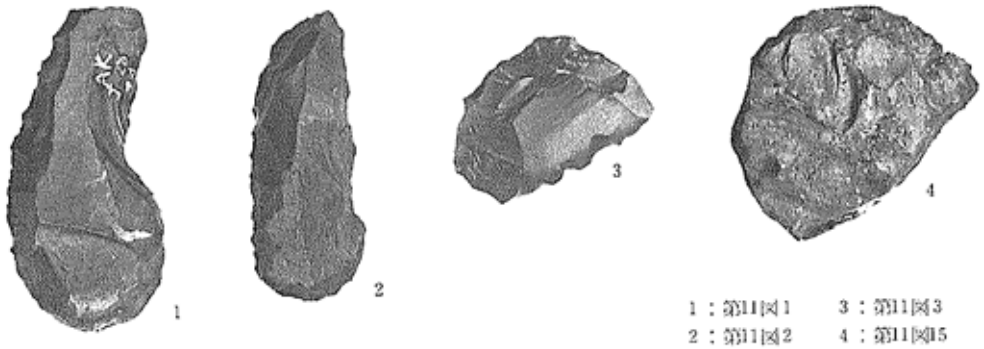


図版1　赤鬼上遺跡

上　遺跡全景
下　竪穴住居跡（西から）

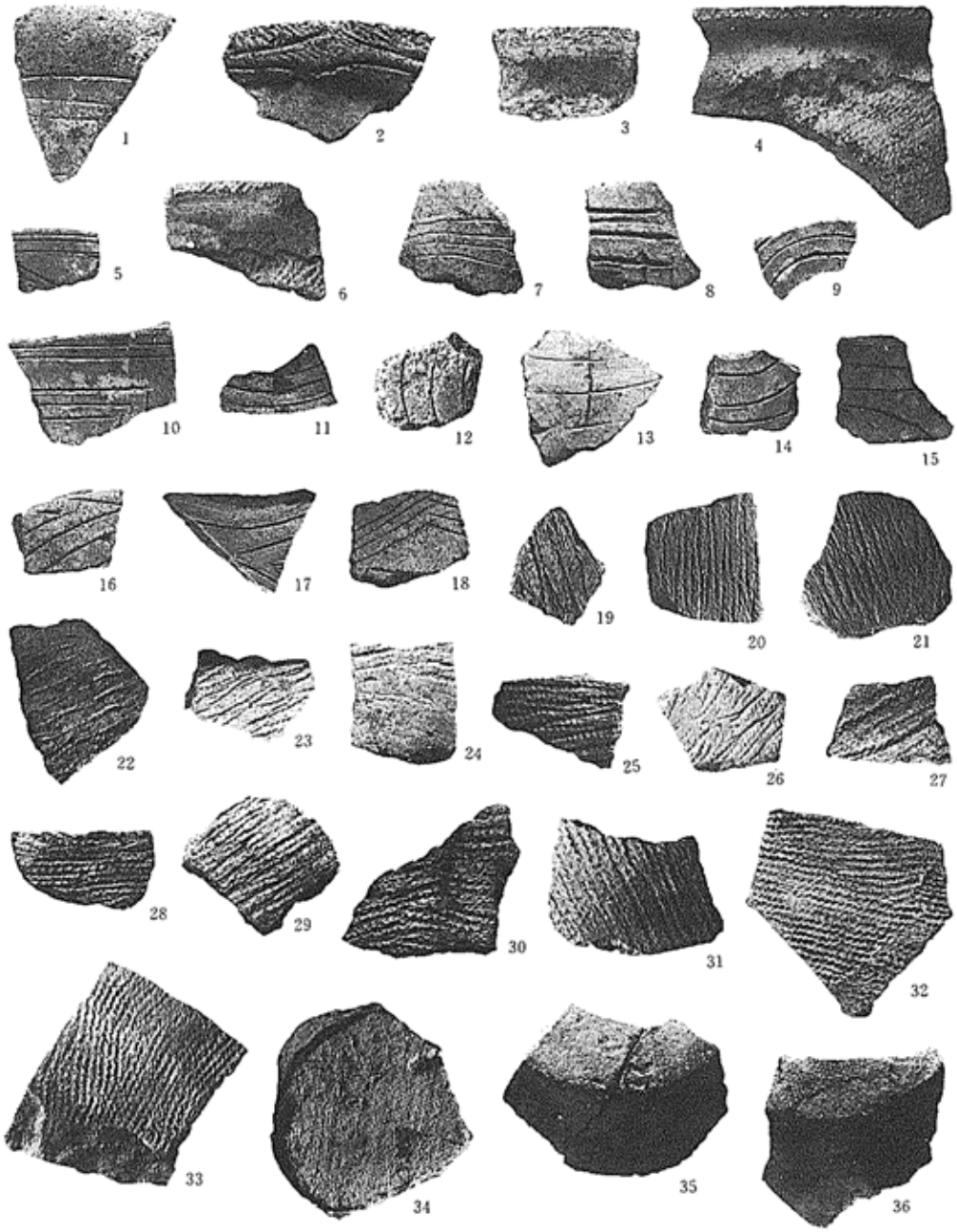


上　竪穴住居跡（カマド）
下　石器



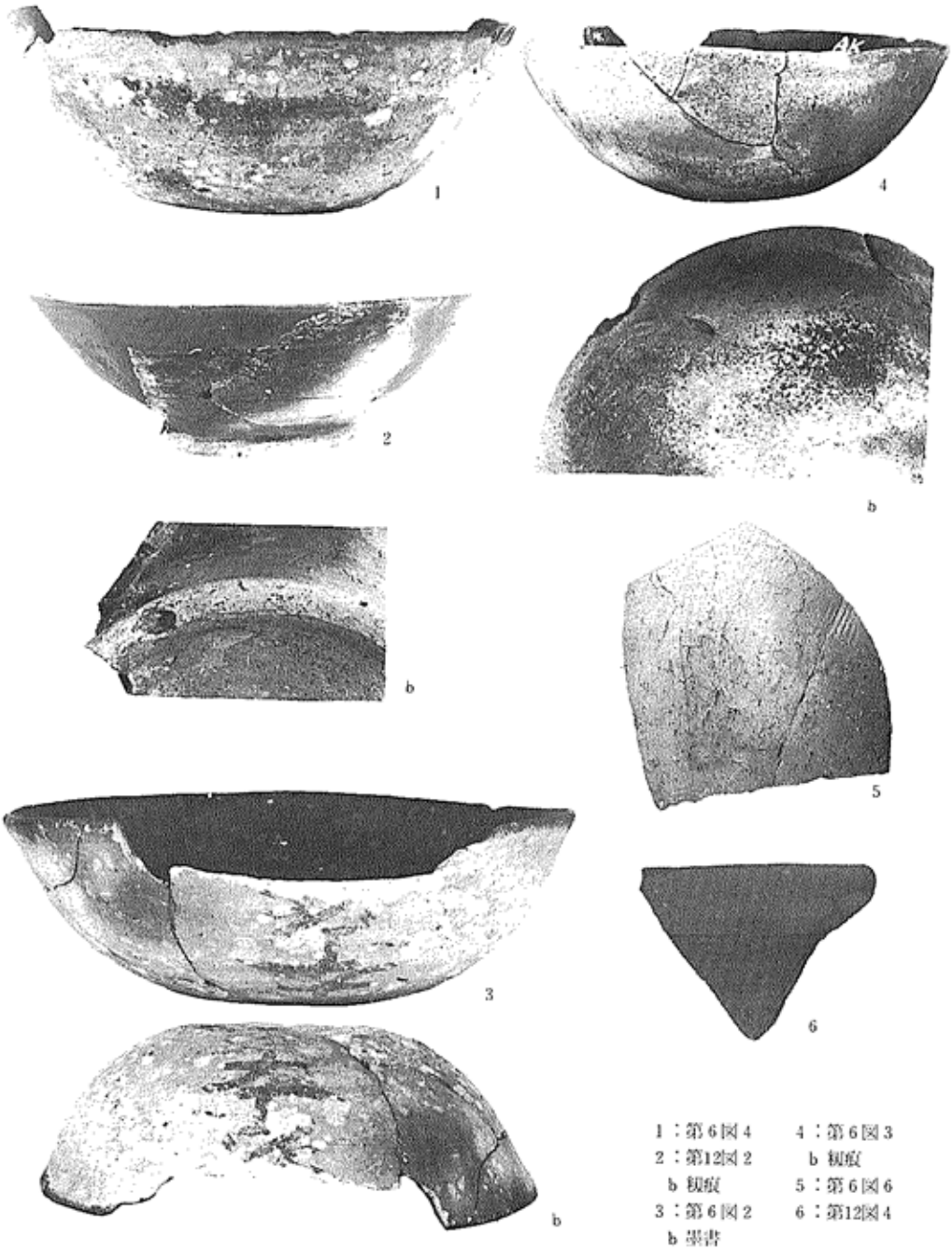
1：第11図1　　3：第11図3
2：第11図2　　4：第11図5

図版2　赤鬼上遺跡



1：第7図1　7：第8図7　13：第9図3　19：第9図22　25：第9図15　31：第9図10
2：第8図1　8：第8図8　14：第9図4　20：第9図23　26：第9図17　32：第9図11
3：第8図5　9：第7図2　15：第9図5　21：第9図25　27：第9図18　33：第9図12
4：第8図2　10：第7図3　16：第9図6　22：第7図5　28：第9図19　34：第10図1
5：第8図3　11：第9図1　17：第9図7　23：第7図6　29：第7図8　35：第10図2
6：第8図6　12：第9図2　18：第9図8　24：第7図7　30：第7図10　36：第10図4

図版3　弥　生　土　器



1：第6図4
2：第12図2
b 横断
3：第6図2
b 墨書
4：第6図3
b 横断
5：第6図6
6：第12図4

図版4　土師器・須恵器

(3) 宮下遺跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 73
　1．位置と立地 …… 73
　2．歴史的環境 …… 73
Ⅱ．調査の方法と経過 …… 77
　1．調査の方法 …… 77
　2．調査の経過 …… 77
　3．資料整理の方法 …… 77
Ⅲ．発見された遺構と遺物 …… 79
　1．基本層序 …… 79
　2．竪穴住居跡 …… 81
第１住居跡 …… 81
　3．焼土遺構 …… 94
　4．遺構以外からの出土遺物 …… 96
Ⅳ．考　　察 …… 99
　1．出土遺物 …… 99
　　(1)土器の分類 …… 99
　　(2)土器の組み合せ …… 103
　　(3)土器の年代的考察 …… 103
　2．遺構について …… 104
　　(1)第１住居跡 …… 104
　　(2)焼土遺構 …… 105
　3．墨書土器について …… 105
Ⅴ．まとめ

調 査 要 項

遺跡所在地：宮城県泉市上谷刈字宮下

遺 跡 記 号：AH（宮城県遺跡地名表登載番号：19015）

調 査 期 間：昭和 48 年 1 月 8 日～1 月 27 日

調 査 面 積：約 2,600 ㎡

発 掘 面 積：約 850 ㎡

調　査　員：文化財保護課　係　　長　志間泰治

技術主幹
兼 係 長　氏家和典

技　　師　白鳥良一

嘱　　託　加藤道男、田中則和、遊佐二郎

挿 図 目 次

第 1 図　遺跡の位置……74
第 2 図　宮下遺跡周辺の地形図……74
第 3 図　泉市の遺跡分布……76
第 4 図　グリッドおよび遺構配置図……78
第 5 図　基本層序……79
第 6 図　第 1 住居跡……80
第 7 図　第 1 住居跡堆積土出土遺物……82
第 8 図　第 1 住居跡堆積土出土遺物……84
第 9 図　第 1 住居跡堆積土出土遺物(鉄製品)…85
第 10 図　第 1 住居跡床面出土遺物……86
第 11 図　第 1 住居跡カマド内出土遺物……88
第 12 図　第 1 住居跡ピット内出土遺物……88
第 13 図　第 1 住居跡土壙(ピット 4)出土遺物‥90
第 14 図　第 1 住居跡土壙(ピット 4)出土遺物‥91
第 15 図　第 1 住居跡土壙(ピット 4)出土遺物‥92
第 16 図　第 1 住居跡土壙(ピット 4)出土遺物‥93
第 17 図　第 1 住居跡土壙(ピット 4)出土遺物‥94
第 18 図　第 1 住居跡土壙(ピット 4)出土遺物‥95
第 19 図　焼土遺構……96
第 20 図　遺構以外からの出土遺物……98
第 21 図　遺構以外からの出土遺物……98

写 真 図 版 目 次

図版 1　宮下遺跡遠景……111
図版 2　第 1 住居跡……112
図版 3　ピット 4 の出土遺物・焼土遺構・発掘調査風景……113
図版 4　土師器坏……114
図版 5　土師器坏……115
図版 6　土師器・須恵器坏……116
図版 7　土師器・須恵器甕、鉄製品……117
図版 8　土師器甕、須恵器甕・壺、鉄製品、石製品……118

表 目 次

第 1 表　泉市遺跡地名表……75
第 2 表　図示遺物分類表……101・102
第 3 表　出土土器組み合せ表……103
第 4 表　破片集計表（その 1～9）……109・110

Ⅰ．遺跡の位置と環境

１．位置と立地

宮下遺跡は泉市上谷刈字宮下にあり、市の中心街より西方約3.7㎞に位置している。

本遺跡の西には奥羽山脈が望まれる。この山脈から東にのびる第３紀中新世の堆積によってできた砂岩、凝灰岩からなる標高 100m前後の丘陵がある。これらの丘陵は本遺跡の北側で富谷丘陵、南側で七北田丘陵と呼ばれ、南北にのびる樹枝状の支丘陵をもつ。さらに両丘陵の間には七北田川が流れ、周辺の支丘陵を開折して段丘、扇状地、沖積地を形成している。

この七北田川は奥羽山脈の一角をしめる泉ヶ岳に源を発し、いくつかの支流をあつめて両丘陵地帯を開折し、西から東へ流れる。さらに宮城野平野（狭義の仙台平野）を東流し、土砂の堆積と氾濫を繰り返して両岸に自然堤防を形成し、仙台湾へ注いでいる。

宮下遺跡は七北田川中流付近の南岸にあり、扇状地性地形の先端部分の残丘地形上に立地している。

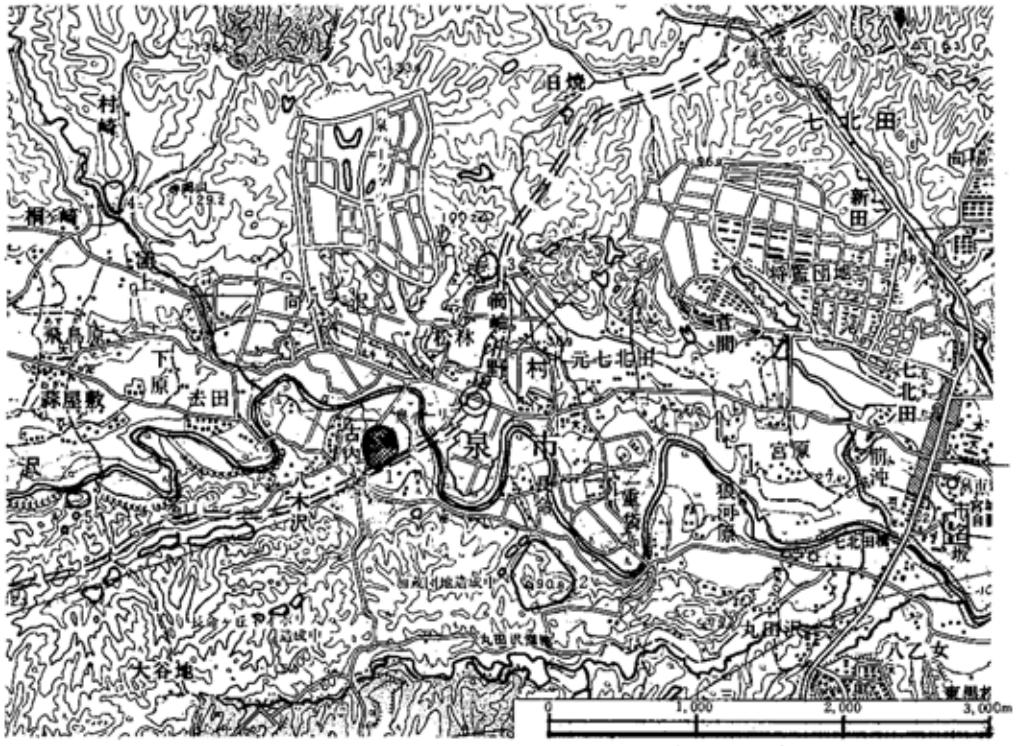
本遺跡の微地形を観察すると七北田丘陵中央部付近に北にのびる支丘陵がある。この丘陵の谷間をぬって北流する七北田川の支流がある。この支流は支丘陵を開折して、支丘陵先端部に扇状地を形成した。同支流はさらに開折・堆積を繰り返し続け、新しい扇状地性地形をつくった。その際、旧扇状地の先端部分にまで開折が及ばず、島状にとりのこされて残丘状地形を形成したものと考えられる。本遺跡はこの残丘状地形の上の標高 33m前後のところに立地している。遺跡の周辺は、低くなって水田面となる。畑地、水田などとして利用されている。

２．歴史的環境

泉市には、旧石器時代以来数多くの遺跡が確認されている。これらの分布をみると七北田川流域の丘陵、台地などに立地している。それらのいくつかを掲げて宮下遺跡周辺の歴史的環境を概観してみたい。

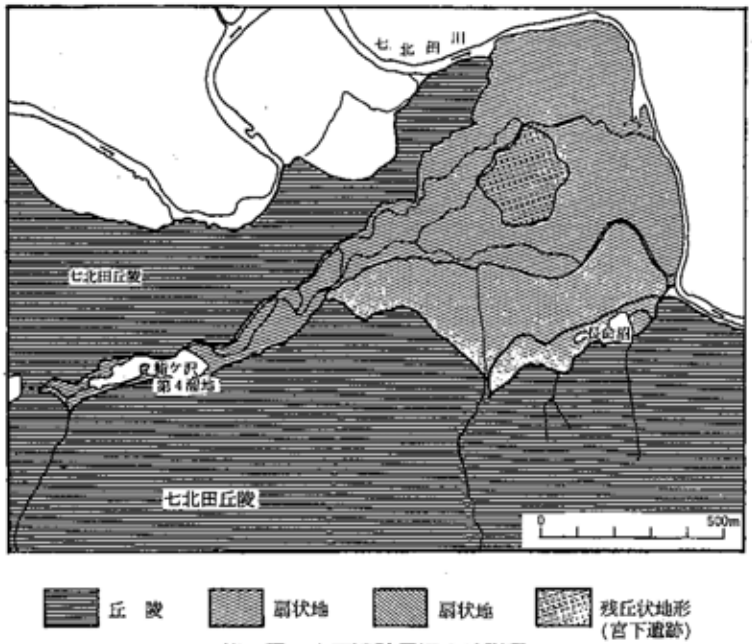
現在市内最古の遺跡は西上野原遺跡である。旧石器時代の石刃、縄文前期の土器、石器類が採集されている。また、紫遺跡は縄文時代の早期、前期、中期の遺跡で発掘調査が行なわれた際、住居跡３軒、土壙一基などが発見され、石斧、石鏃、石匙、凹石などが出土している。中期、後期、晩期の遺跡には洞雲寺遺跡があり、石鏃、石匙、石錘、磨製石斧などが採集されている。その他の遺跡には城裏遺跡、筒岫遺跡、花輪山遺跡などがある。これらの遺跡は丘陵斜面や段丘に立地しており、当時代の生産の基礎が狩猟、採集、漁撈にあったため低地の沖積地には進出していないことがわかる。

弥生時代、古墳時代の遺跡は確認されていない。



1．宮下遺跡　2．長命館跡　3．筒舘遺跡　4．紫遺跡　5．山野内館跡　（昭50東複第220号）

第1図　遺跡の位置



丘陵　扇状地　扇状地　残丘状地形（宮下遺跡）

第2図　宮下遺跡周辺の地形図

奈良、平安時代には清水寺前遺跡、成田山館跡（包含地）があり、土師器、須恵器が採集されている。これらの遺跡は沖積地、台地に立地しており、庶民の生活跡で、生産の基礎は稲作農耕が主である。市内から東方約3㎞には陸奥の国府としての多賀城跡が設置された。このことから、本地域にも律令制度による政治体制の支配下に組み入れられ、国家の直接支配をうけている。

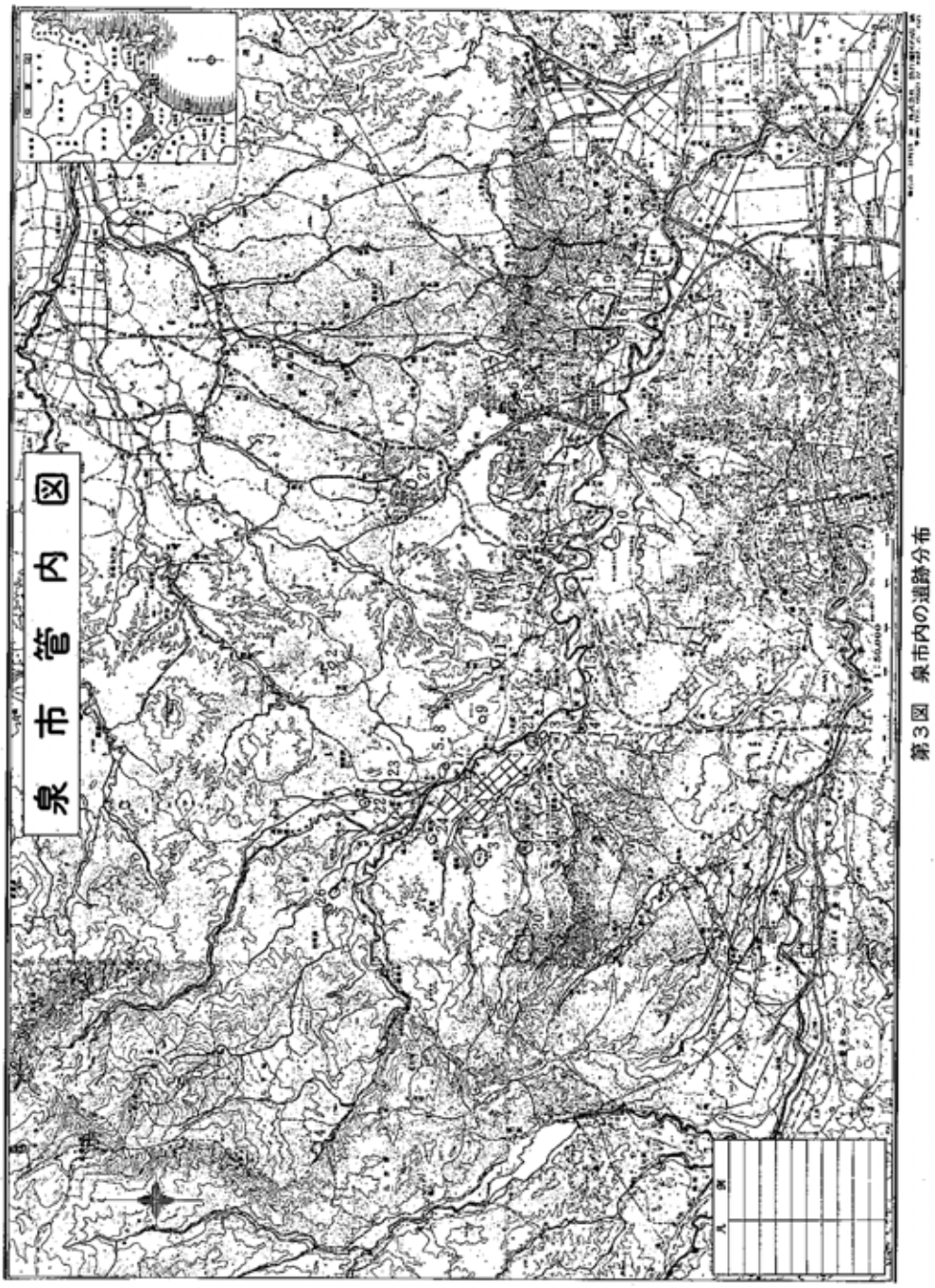
中世、近世の遺跡には、城館跡 14 ヶ所が確認されている。鎌倉時代の長命館跡がある。その他にも山野内館跡、抗城跡などがある。これらの城館跡のほとんどは丘陵上にあり、自然地形を利用してつくられている。当時代の内乱、戦乱に相次ぐ国内の政治的体制の産物のものであり、当地域にも領主支配がおよんでいたことをうかがわせる。しかし、庶民の実態を示すようなものは明らかにされていない。

以上のように宮下遺跡のある七北田川流域は古代から近世まで人々の生活の場として営まれていることがわかる。特に注目されることは中世、近世の城館跡が多く存在することである。これらの城館跡が文献と結びつくところでもあり、本地域における社会体制の中で武士の在り方、変遷などをさぐる上でも重要である。

第1表　泉市遺跡地名表

番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	宮下遺跡	残丘状地形	包含地 集落跡	縄文・平安
2	堂庭廃寺跡	丘陵中腹	寺院跡	中世
3	花輪山遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
4	泉ヶ岳遺跡	〃	〃	〃
5	白石城跡	段丘	城館	中世
6	山の寺廃寺跡	丘陵斜面	寺院跡	
7	成田山館跡	丘陵	包含地 城館	古代・中世
8	掛松院墓所	段丘	墓	桃山
9	蔵経塚経塚	丘陵斜面	経塚	中世
10	長命館跡	丘陵	城館	中世(鎌倉)
11	紫遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（早・前・中）
12	筒峠遺跡	丘陵麓	〃	縄文
13	小岳館跡	台地	城館	近世
14	古館跡（奥沢古館、山内西館）	〃	〃	〃

番号	遺跡名	立地	種別	時代
15	山野内館跡	丘陵	城館	中世
16	清水寺前遺跡	沖積平野	包含地	縄文・奈良平安
17	城裏遺跡	段丘	〃	縄文（中）
18	洞雲寺遺跡	丘陵	〃	縄文（中・後・晩）
19	松森城跡（鶴ヶ城）	〃	城館	中世
20	杭城跡	〃	〃	〃
21	福沢城跡	台地	〃	〃
22	朴沢新城跡	〃	〃	〃
23	朴沢古城跡	丘陵	〃	〃
24	福岡館跡	〃	〃	〃
25	新道遺跡	段丘	包含地	縄文
26	西上野原遺跡	段丘 河岸段丘	〃	旧石器 縄文（前）
27	大ヶ沢遺跡	台地	〃	縄文（晩）



第3図　泉市内の道路分布

Ⅱ．調査の方法と経過

１．調査の方法

東北自動車道は遺跡が立地する残丘状地形の南端、南斜面を東西に横断して通過する。路線敷にかかる遺跡の範囲は約 2,600 ㎡におよんでいる。

調査区は路線の中心杭ＳＴA141＋20（原点 1）とＳＴA141＋40（原点 2）とを結ぶ線を基準とし、原点１と路線の幅杭とを結び直交する線を設け、3mを単位とするグリッドを組んだ。原点１を基準として東側を 28 区、西側を 27 区、南側をH区、北側をG区とし、それを延長してそれぞれグリッド名を付した。

２．調査の経過

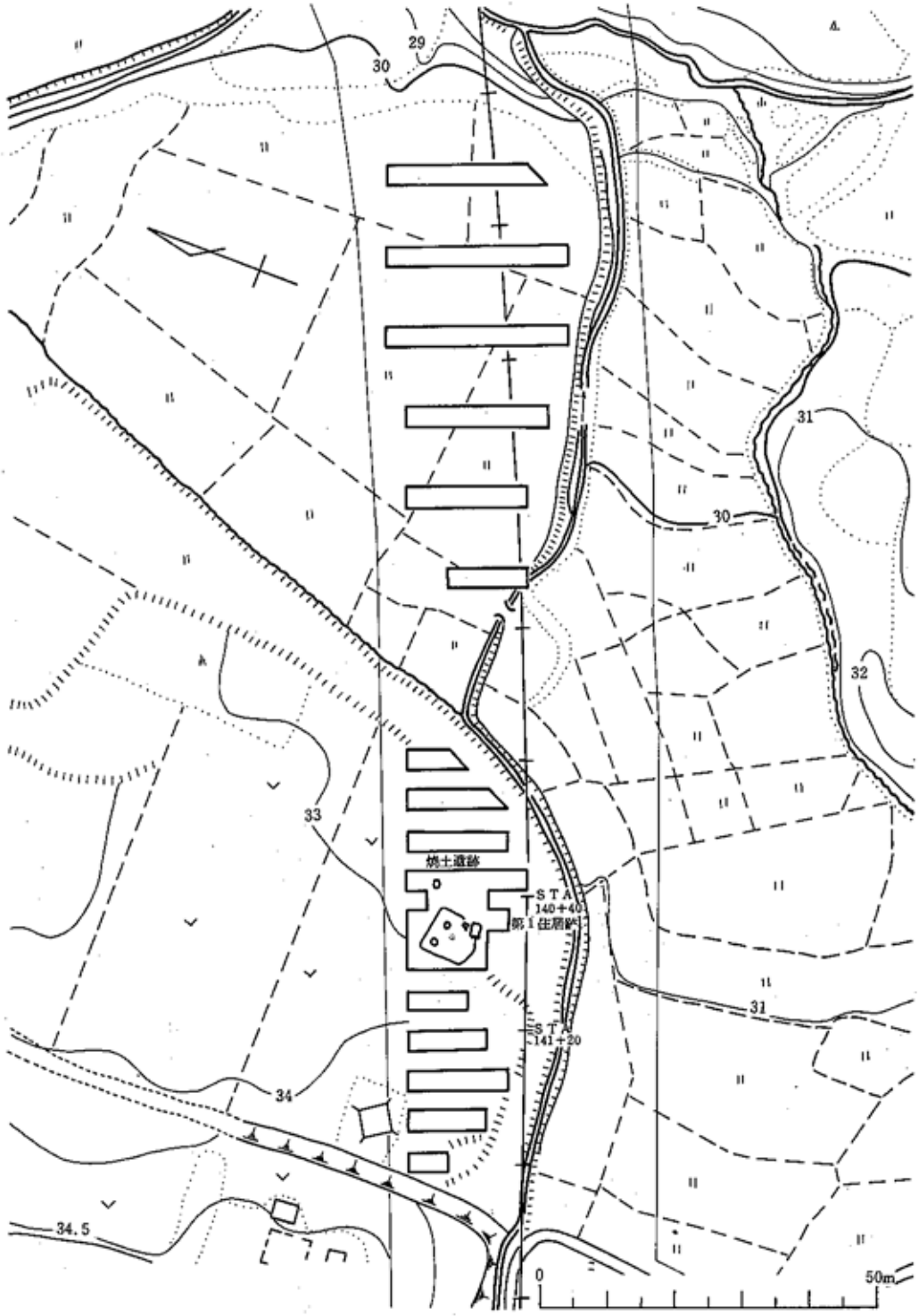
発掘調査を開始したのは昭和 48 年１月 20 日である。低くなっている西側の水田部分より粗掘りを始め、残丘状地形の南端、南斜面の畑地に移行した。いずれも表土から約 20 ㎝で地山面に達した。水田部分では削平が著しく遺構は検出できなかった。次に畑地内の調査に移った。畑地内ではかなり削平されているが竪穴住居跡１軒と焼土遺構１基が路線敷内の中央部に検出された。この他に遺構は検出されなかった。また路線敷内東側水田部分の発掘調査は、一段低く低湿地のため調査対象区から除外した。その後、発見された遺構の精査を行い１月 29 日に発掘調査を終了した。発掘調査面積は合計約 850 ㎡である。なお、各遺構の実測は 20 分の１を基本とし、平面図、断面図を作成し、平面図にはレベルを記入した。

３．資料整理の方法

調査資料の整理は発掘調査後次のように実施した。本遺跡での出土遺物には土器製品（縄文土器・土師器・須恵器）・石製品・鉄製品などがあるが、主たるものは土師器・須恵器である。したがって、ここでは土師器・須恵器についてその整理の手順・方法について述べる。それは文化財保護課で従来他の遺跡で実施してきたものと基本的には同じである。概要を簡単に述べておきたい。

整理手順としては水洗→ネーミング（出土地区・遺構－層位の記入）→遺物の遺構・グリット・層位別区分→接合復元→実測・石膏復元・拓本・破片処理（観察・遺物集計表の作成）→写真撮影の順で行なった。

整理の方法としては上記の手順に従って出土土器の形態、製作技法を検討し、資料化のための分類を実施した。その際、次の点に留意した。



第4図　グリッドおよび遺構配置図

〈実測図について〉

実測図は原則として完形品あるいは残存部$\frac{1}{4}$以上の土器で図上復元できるものについて作成した。底部切り離し痕等の明瞭なものについては実測図に拓影図を付した。土器の状態を示すために成形、底部切り離し痕、内外器面調整等の製作技法の図化を行なった。他の土器は破片集計表を作成した。実測図に使用した製作技法の表現は西野田遺跡、岩切鴻ノ巣遺跡、糠塚遺跡などで使用した概念を基準として用語を用いた。

〈破片処理について〉

実測できない土器破片については、各遺構、各層位ごとに部位別（口縁部、体部、底部）に類別し、実測で得られた器形、製作技法を参考にして各破片の内外面の製作技法の観察を行い統計化した。

本書における図版は次の縮尺で作成した。

土製品：縄文土器（1/3）、土師器、須恵器（坏、壷－1/3、甕－1/4）

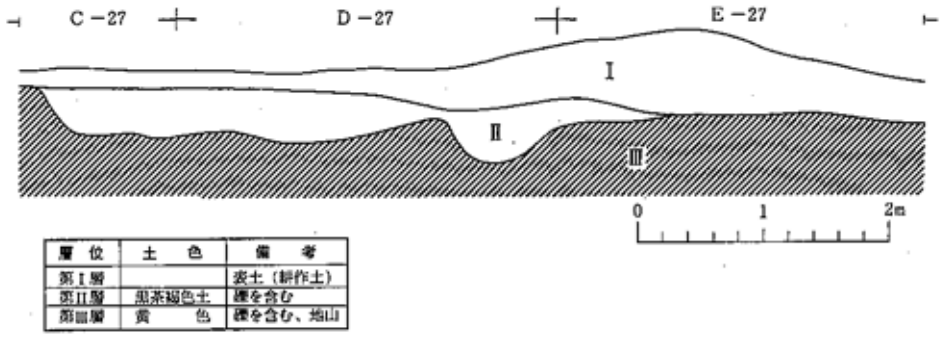
石製品：剥片、石鏃（1/2）

鉄製品：鏃、刀子など（1/2）

Ⅲ．発見された遺構と遺物

１．基本層序

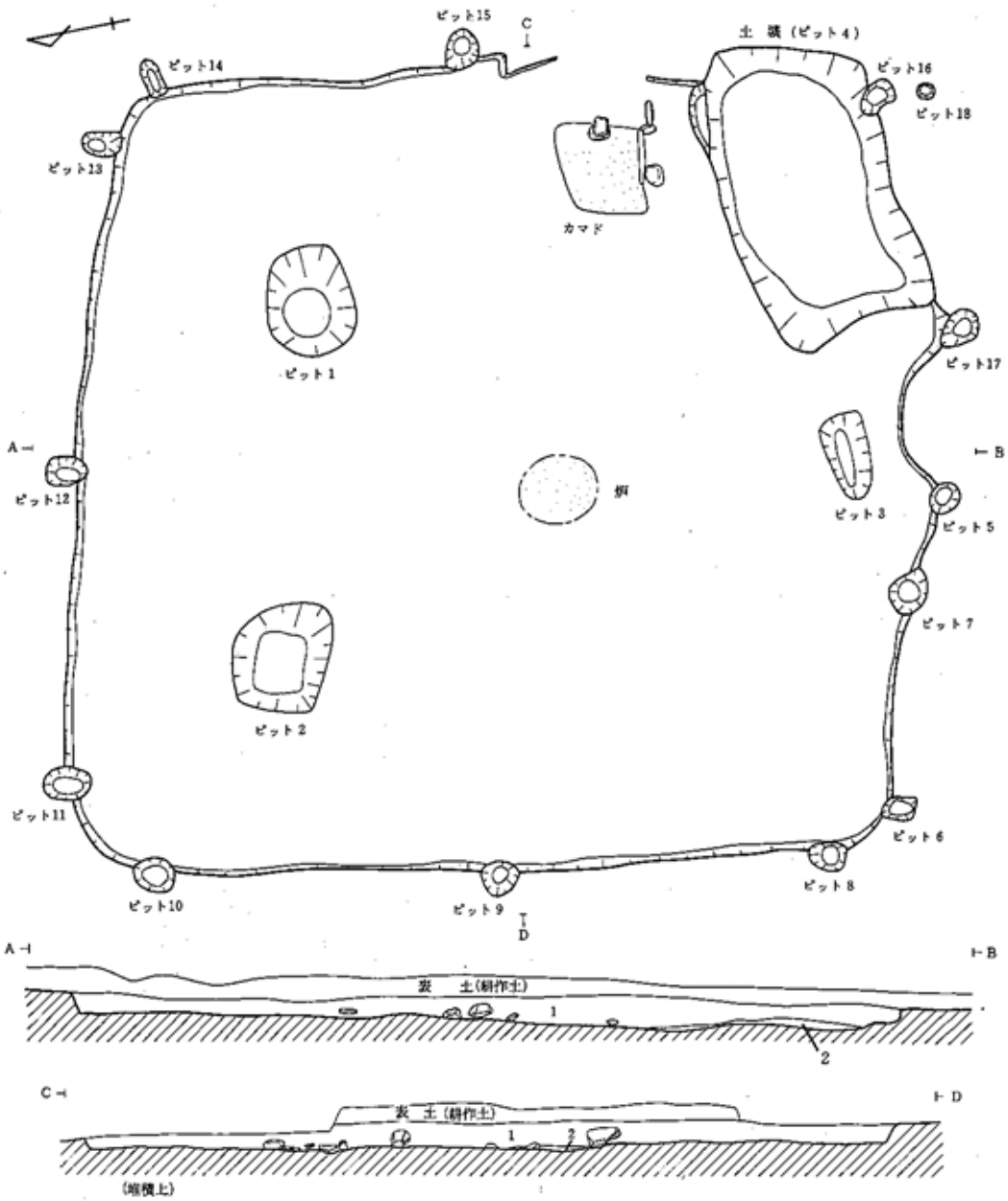
本遺跡における層序は基本的には２層に分かれる。第１層表土(耕作土)で厚さ 12～35 ㎝で



層位	土色	備考
第Ⅰ層		表土（耕作土）
第Ⅱ層	黒茶褐色土	礫を含む
第Ⅲ層	黄色	礫を含む、地山

第５図　基本層序　（畑地Ｃ－27～Ｅ－27）

ある。第２層は黒茶褐色土で礫が多く軟らかい。厚さ 30～50 ㎝である。畑地の西側に部分的にのみ認められ、他の地区では表土下すぐ地山に達する。地山は黄色砂質土を含む礫層である。遺物の出土は第１、２層からみられ、第２層からは少ない。



第1層	褐 色	微砂質土
第2層	暗褐色	微砂質土

0 1 2m

第6図 第 1 住 居 跡

2．竪穴住居跡

第1住居跡

〈遺構の確認〉畑地のほぼ中央部、D－32 区周辺で発見した。確認面は表土下約 20 ㎝の地山面で、褐色土の落ち込みとして確認した。

〈重複・増改築〉認められない。

〈平面形・規模〉平面形は隅丸方形で、南辺の中央部にはやや出入りがあり、直線的ではない。規模は長軸 7.0m、短軸 6.7mである。

〈堆積土〉2 層にわかれる。

第1層：褐色微砂質土で炭化物を含む、大きさ 10～40 ㎝の円礫が多数混入している。住居全体に厚く堆積している。

第2層：暗褐色微砂質土で炭化物を多く含み、若干のしまりと粘性がある。南壁から中央部床面上に部分的に分布している。生活層の可能性がある。

〈壁〉壁は削平によっていくぶん失われており、現存する壁の高さは東壁で 9 ㎝、西壁で 19 ㎝、南壁で 20 ㎝、北壁で 16 ㎝である。地山を掘り込んでおり、壁面は床面より外傾しながら立ち上がり、比較的保存がよい。

〈床面〉地山を床面としており、ほぼ平坦である。西半には地山に礫が含まれている。

中央部の南寄り約 2×2mの範囲は非常に硬くしまり、壁ぎわは軟かい。南部では部分的に貼床が認められた。

〈ピット〉ピットは合計 18 個ある。ピット 1 は平面形がほぼ方形で、深さは 41 ㎝である。また、ピット 2 は平面形が楕円形をしており、深さ 45 ㎝である。これらのピットは他のピットより大きく深い。ピット 3 は溝状のものである。ピット 5～ピット 17 は壁ぞいにみられる。ピット 18 は住居跡外南東にある。

〈カマド〉東壁中央からやや南寄り 70×70 ㎝の方形の硬い焼面がある。6 個の凝灰岩と円礫が焼面を囲むように南側に直線的にならぶ。

これは、石組のカマドと考えられる。

〈炉〉床面中央部に 70×60 ㎝の範囲で楕円形に硬く焼けている面がある。炉の可能性がある。

住居跡ピット一覧

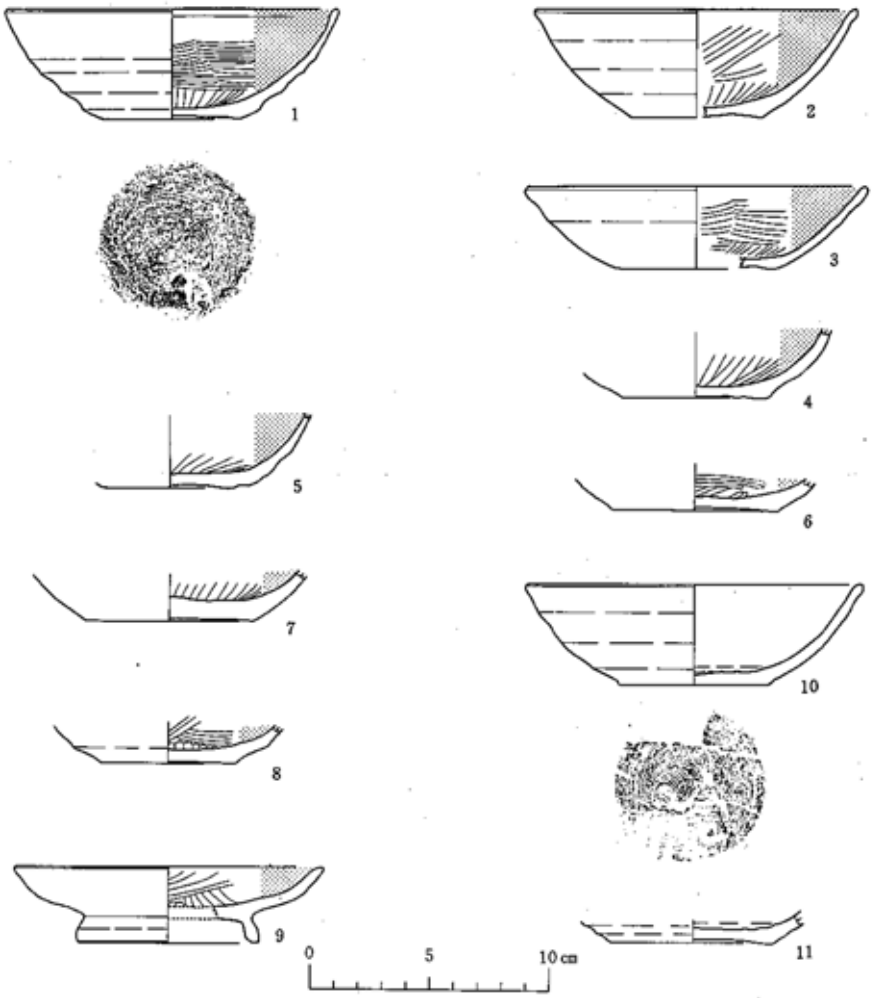
Pit No	ピット1	ピット2	ピット3	土壙（ピット4）	ピット5	ピット6	ピット7	ピット8	ピット9	ピット10	ピット11	ピット12	ピット13	ピット14	ピット15	ピット16	ピット17	ピット18
深さ(cm)	41	45	12	36	46	27	33	26	18	22	29	28	20	19	24	29	20	17
土色	褐色	褐色	黒褐色	褐色 灰褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	暗褐色	
備考	数個の大石混入 土師器破片出土	数個の大石混入 土師器、須恵器破片出土	土師器、須恵器破片出土	土師器、須恵器出土	土師器破片出土	土師器破片出土												

〈土壙〉住居の東南隅で、住居壁の輪郭より若干はみ出ている。規模はは長軸2.5m、短軸1.4m、深さ36㎝の不整長方形をした土壙が検出された。土壙内の堆積土は上部で褐色微砂質土であり住居内堆積土第１層とかわらず、下部で灰褐色土となっている。壁は地山を掘り込んでおり、底面から外傾しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。遺物の出土状況は、堆積土上部では多数の土師器、須恵器片がみられ、下部では完形に近い数点の土師器、須恵器がまとまって出土している。

〈出土遺物〉

遺物は堆積土第１層、床面、カマド、各ピットより出土している。土師器（坏・甕）、須恵器（坏・甕・壺）、石器、鉄製品、鉄滓がある。

ａ．堆積土第１層出土遺物(第7～9図)：土師器、須恵器、鉄製品、石器がある。石器につい



第７図　第１住居跡堆積土出土遺物（土師器・坏１～８、高台付坏９、須恵器・坏10．11）

ては後述する。

土師器

坏（第7図1～8）製作にロクロを使用しているものである。器形は、体部から口縁部まで外傾している。

器面調整は体部上半から口縁部まで外面にロクロ調整、内面にヘラミガキと黒色処理がみられる。また、再酸化により脱色しているものもある。底部は回転糸切りの切り離し技法を用いでいる。ロクロは右回転のものもある。外面に再調整はない。なお、摩滅のため器面調整の不明なものもある。

高台付坏（第7図9）製作にロクロを使用しているものである。坏部は体部から口縁部まで浅く、外傾する。器面調整は外面でロクロ調整、内面でヘラミガキと黒色処理が施されている。底部の切り離し技法は高台接合時の調整のため不明である。

甕（第8図）製作にロクロを使用しないものとロクロを使用しているものがある。ロクロを使用しないものの口縁部から体部にかけての器形はいずれも「く」の字状に屈曲している（第8図1、2）。口縁部がやや外方につまみだされるもの（第8図1）、端部の上下がややのびて狭い縁端状のもの（第8図2）など、細部に若干差が認められるものもある。器面調整は口縁部で内外面とも横ナデのものと、外面に刷毛目、内面が横ナデのみられるものがある。体部の器面調整は内外面とも刷毛目が多く、他に外面に刷毛目、ヘラケズリ、内面にヘラナデのみられるものがある。底部外面にはヘラケズリと第18図3と同様に筵（むしろ）状圧痕のみられるものがある。ロクロを使用しているものは、頸部で外反し口縁部が外傾するもの（第8図3）と、さらに第20図5・6と同様に口縁端部が直立するものとがある。前者が大きく後者が小さい。器面調整は口縁部から体部上半まで外面にロクロ調整で体部下半の外面にはヘラケズリがみられる。内面はロクロ調整、刷毛目が多くわずかにヘラミガキ、黒色処理されたものがある。底部は回転糸切り切り離し技法のものとヘラケズリ（第8図）4が施されるものとがある。

須恵器

坏（第7図10、11）器形は体部から口縁部まで外傾している。底部には右回転糸切りの切り離し技法を用いている。再調整はない。

大甕（第8図5）体部の破片である。器面調整は外面で平行叩き目、内面はナデが施されている。

甕（第8図6、7）体部の破片である。器面調整は、第8図6で外面にヘラケズリ、内面にナデが施されている。第8図7で外面に平行叩き目のちヘラケズリ、内面に平行叩き目が施されてるものなどがある。

壷（第8図）口縁部、体部、底部片があるが少片のため器形は不明である。第8図8は長

頸壷の口縁部と思われ、第８図９も長頸壷の底部と思われるもので体部下端回転ヘラケズリが施され、底部には高台が付せられている。なお、底部切り離し技法は高台接合時の調整のため不明である。器面調整はいずれも内外面ともロクロ調整である。体部下半と思われる破片では外面に回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリがみられるものがある。

鉄製品

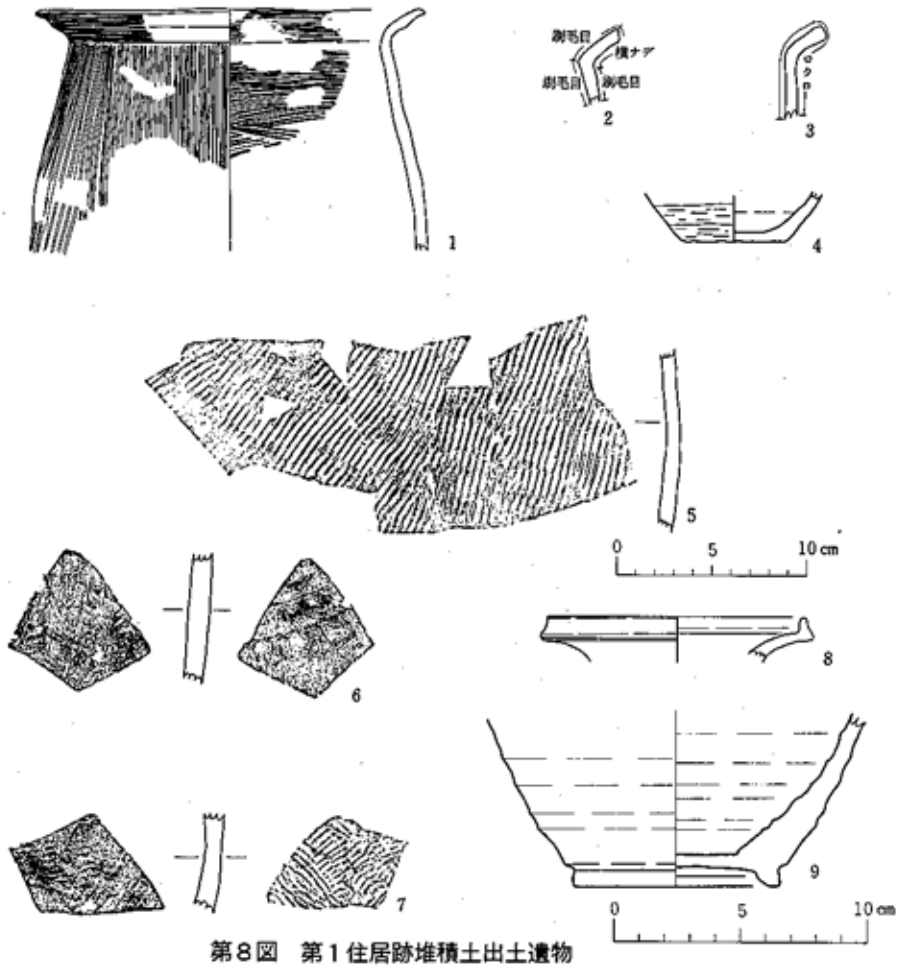
刀子（第９図１、２）

１は刀子の茎から刀身にかけての破片で現存長 4.0 ㎝である。錆化が著しく細部については不明であるが刃関ちのものである。刀身の背は平坦で、平造のものと思われる。

２は刀子の茎と思われるものである。現存長 6.3 ㎝で、横断面は長方形である。

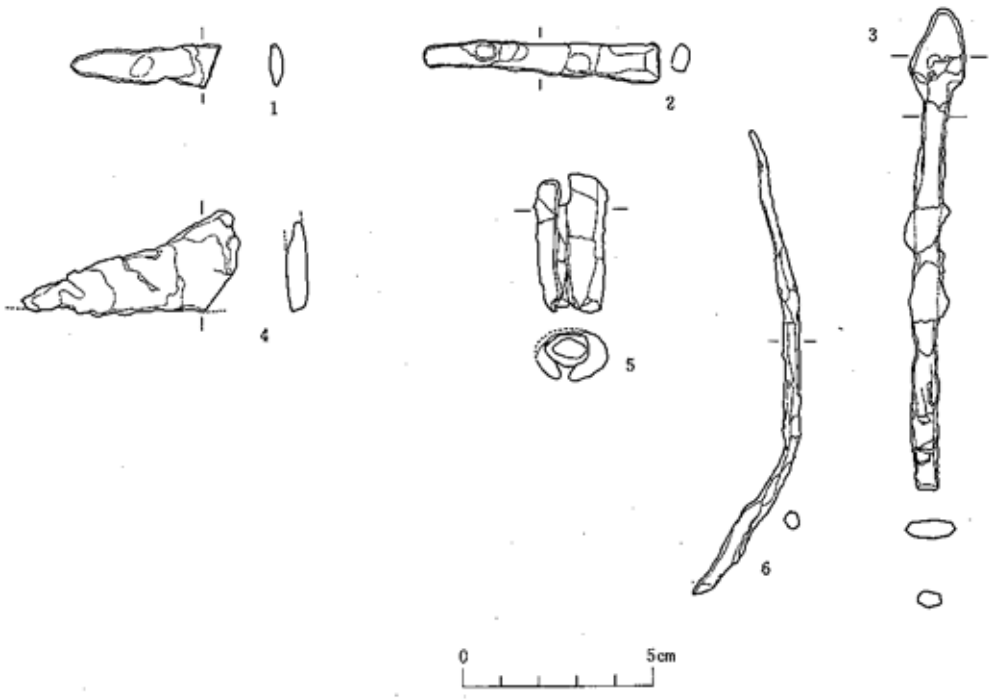
鏃（第９図３）

３は有茎の鏃で茎端が欠損しているものである。現存長 12.9 ㎝である。



第８図　第１住居跡堆積土出土遺物

（土師器・甕１～４、須恵器・大甕・甕５～７、壷８．９）



第９図　第１住居跡堆積土出土遺物（鉄製品）

その他不明のもの

4 は現存長 6 ㎝、厚さ 0.6 ㎝のもので板状のものである。

5 は現存長 3.7 ㎝で直径 0.7 ㎝の環状の鉄芯を厚さ約 0.4㎝ の鉄板でつつんでいるものである。

6 は棒状のもので現存長 13.6 ㎝で「く」の字形に屈曲しており、断面形は長方形である。紡錘車の軸棒かと思われる。

ｂ．床面出土遺物（第 10 図）：土師器、須恵器、鉄製品がある。

土師器

坏（第 10 図 1～4）いずれも破片である。製作にロクロを使用しているものである。体部から口縁部まで外傾する。器面調整は外面がロクロ調整、内面がヘラミガキと黒色処理されている。しかし、再酸化により脱色しているものもある。底部には回転糸切りの切り離し技法が用いられている。外面に再調整はない。

高台付坏　底部破片のみである。図化はできなかった。

甕　製作にはロクロを使用しないものとロクロを使用しているものがある。両者とも図化できなかった。口縁部から体部までの破片がある。製作にはロクロを使用しないものである。器形は頚部で外反し、口縁部は短かく外傾する。器面調整は口縁部で内外面とも横ナデ、体部で内外面とも刷毛目である。体部破片では外面にヘラケズリ、内面に刷毛目、ヘラナデがある。

ロクロを使用しているものは、頸部が「く」の字状に外反し、口縁部は外傾する。器面調整は口縁部、体部破片ともロクロ調整である。

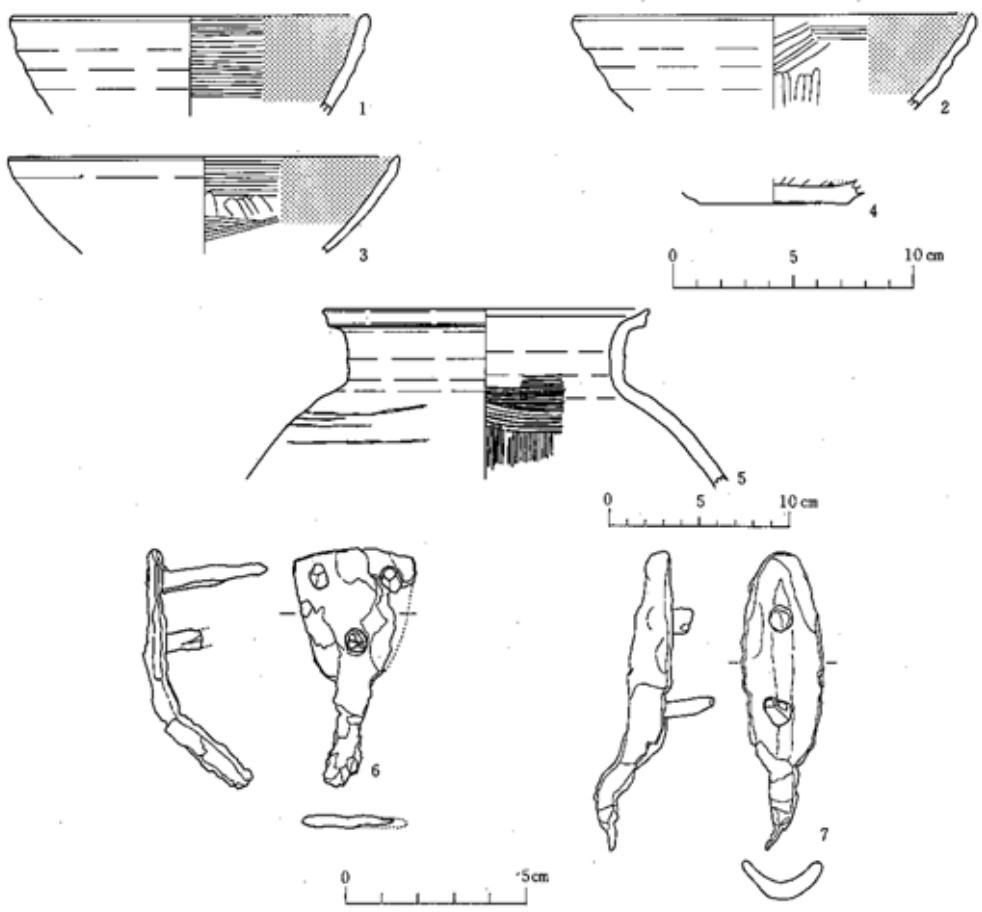
須恵器

坏　いずれも破片である。図化はできなかった。体部から口縁部にかけて外傾する。底部には回転糸切りの切離し技法を用いている。再調整はない。

高台付坏　底部破片である。図化はできなかった。底部の切り離しは摩滅のため不明である。

甕　図示できたものは第 10 図 5 のみである。口縁部から肩部までの破片である。頸部はほぼ直立し、口縁部は外反ぎみで口縁上端はやや外方につまみ出され、狭い縁帯状を呈する。器面調整は体部外面にロクロ調整、内面では刷毛目のちナデ調整が施されている。体部外面には積み上げ痕が認められる。その他に体部破片が出土している。

壺　体部の破片で図化はできなかった。器形は不明である。器面調整は内外面がロクロ調整のものが多くある。外面に回転ヘラケズリのものもある。



第10図　第１住居跡床面出土遺物　（土師器・坏１～４、須恵器・甕５、鉄製品６．７）

鉄製品

6の平面形は、羽子板状をし、側面形が「く」の字形を呈するものである。現存長は7.9㎝、羽子板状の部分の内側に鋲が3本あり、柄の断面は長方形を呈する。

7 の平面形はヘラ状をし、側面形が「く」の字形状に折れ曲っているものである。現存長は8.7㎝でヘラ状の部分は船底状に弯曲し、2本の鋲がある。

なお、その他に鉄滓の小片がある。

ｃ．カマド内出土遺物（第11図）：土師器、須恵器がある。

土師器

坏　いずれも破片で図化できなかった。製作にロクロを使用している。体部から口縁部にかけて外傾する。器面調整は外面でロクロ調整、内面でヘラミガキと黒色処理が施されている。また、再酸化により脱色しているものもある。底部の切り離し技法は回転糸切りである。外面に再調整はない。

甕　口縁部、体部の小破片がある。製作にロクロを使用しないものとしているものとがある。ロクロを使用しないものの器形は小破片のため不明であるが、体部破片の器面調整は内外面とも刷毛目である。ロクロを使用しているものの頸部の器形は「く」の字状に外反し屈曲している。口縁端部が直立する。器面調整は口縁部破片では内外面ともロクロ調整である。体部では外面にロクロ調整、ヘラケズリ、内面は刷毛目である。

須恵器

坏　いずれも破片である。体部から口縁部にかけ外傾するものである。

大甕　器形を知りうるものは第11図1の大甕で他は小破片である。大甕第11図1は肩部上半の破片である。頸部がやや外傾し、口縁部は外反する。口縁端上下はつまみ出され、縁帯中央には稜があり、断面は三角形である。器面調整は口縁部、頸部の内外面ともロクロ調整である。肩部外面は平行叩き目、内面はナデ調整が施されている。

甕　体部の破片だけである。（第11図2）器面調整は、外面に叩き目、内面にナデ調整のみられるものである。

ｄ．ピット内出土遺物（第12図）：土師器・須恵器・鉄製品が出土している。

土師器

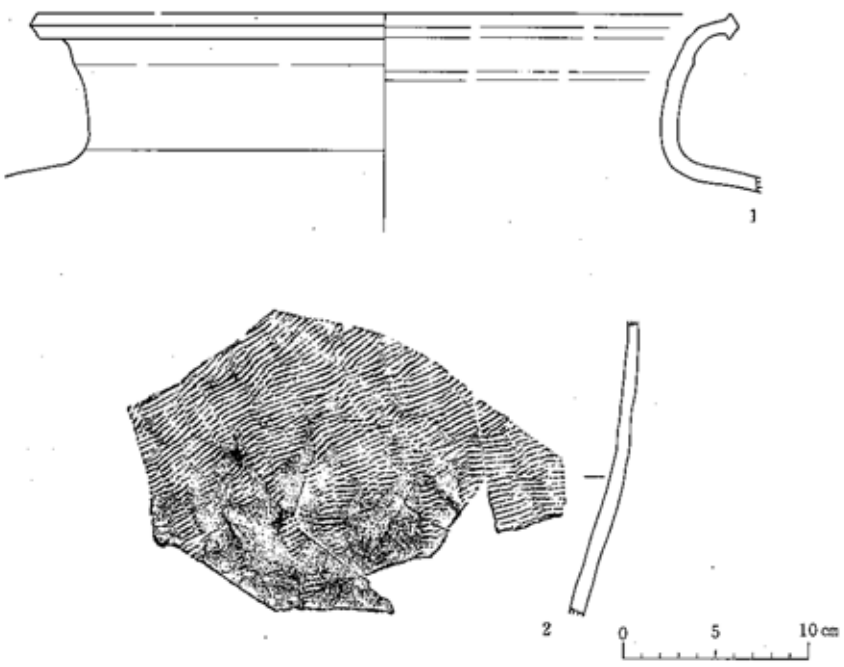
坏　ピット1・2・3・5・6より出土している。いずれも小破片である。製作にロクロを使用しているものである。体部から口縁部にかけて外傾する。器面調整は、外面がロクロ調整、内面がヘラミガキ、黒色処理されたものや摩滅のため不明なものもある。第12図2はピット3から出土しており、底部の切り離し技法は回転糸切り（右回転）である。外面に再調整はない。

高台付坏（第12図1）ピット1から出土している。底部の破片である。製作にロクロを使用

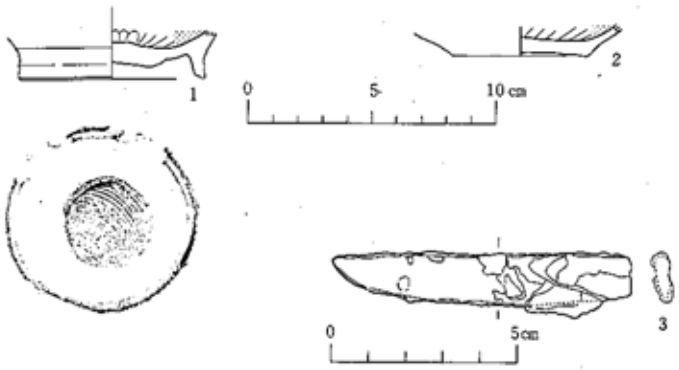
しているものである。器面調整は外面ロクロ調整、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。底部の切り離し技法が回転糸切りであり、高台は付高台である。

甕　ピット 2、3 から出土している。いずれも小破片である。製作にロクロを使用しないものとロクロを使用しているものとがある。器形は不明であるが口縁部は全体的に短いものである。ロクロを使用しないものは、器面調整が口縁部内外面とも横ナデ、体部では内外面とも刷毛目である。ロクロを使用しているものは、器面調整が口縁部、体部で内外面ともロクロ調整である。

須恵器



第11図　第１住居跡カマド内出土遺物（須恵器・大甕１、甕破片２）



第12図　第１住居跡ピット内出土遺物（土師器・高台付坏１、坏２、鉄製品３）

坏　ピット 3 から出土している口縁部の小破片である。

甕　ピット 2 から出土している体部の破片である。器面調整は外面ヘラケズリ、内面ナデである。

鉄製品

刀子（第 12 図 3）

ピット 1 から出土している刀身部の破片である。現存長 8.1 ㎝である。背は平坦で平造りのものである。

ｅ．土壙（ピット 4）内出土遺物：土師器、須恵器、鉄製品がある。

土師器（第 13～15、18 図）

坏　図化できるものは約 60 点ある。製作にロクロを使用しているものである。器形は体部から口縁部まで外傾するものである。体部がやや弯曲するものや直線的なものなど若干違いのあるものもある。器面調整は口縁部から体部まで外面でロクロ調整、内面でヘラミガキと黒色処理がある。ヘラミガキの方向は体部上半以上は横方向、以下は放射状である。

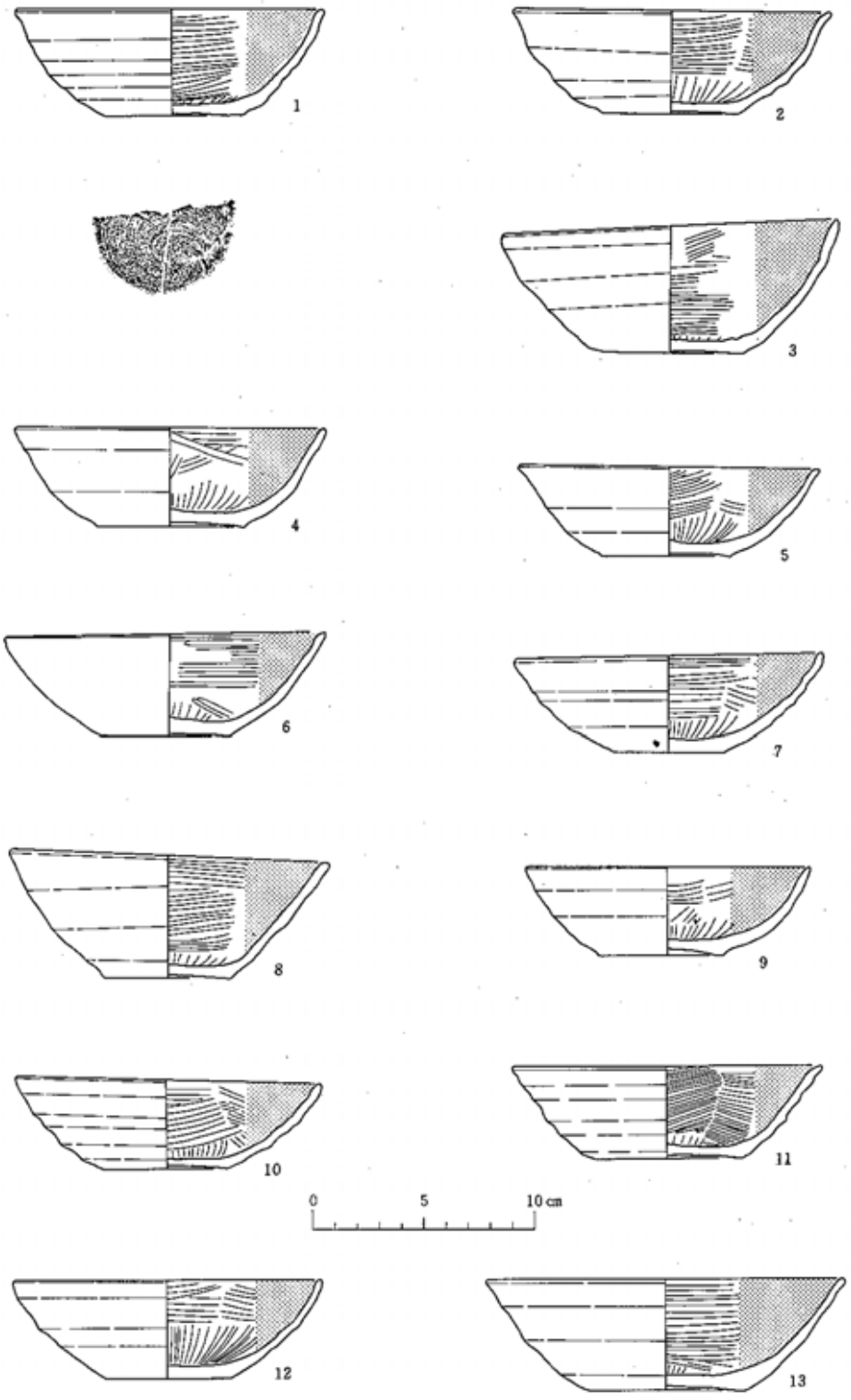
体部外面に墨書されたものが 7 点ある。「林」6 点、「[illegible]」1 点ある。底部の切り離し技法は回転糸切りである。ロクロの回転は右回転である。外面に再調整はない。

高台付坏（第 15 図 13）底部の破片である。器面調整は外面ロクロ調整、内面ヘラミガキと黒色処理されている。底部の切り離し技法は風化等により不明であり、高台は付高台である。

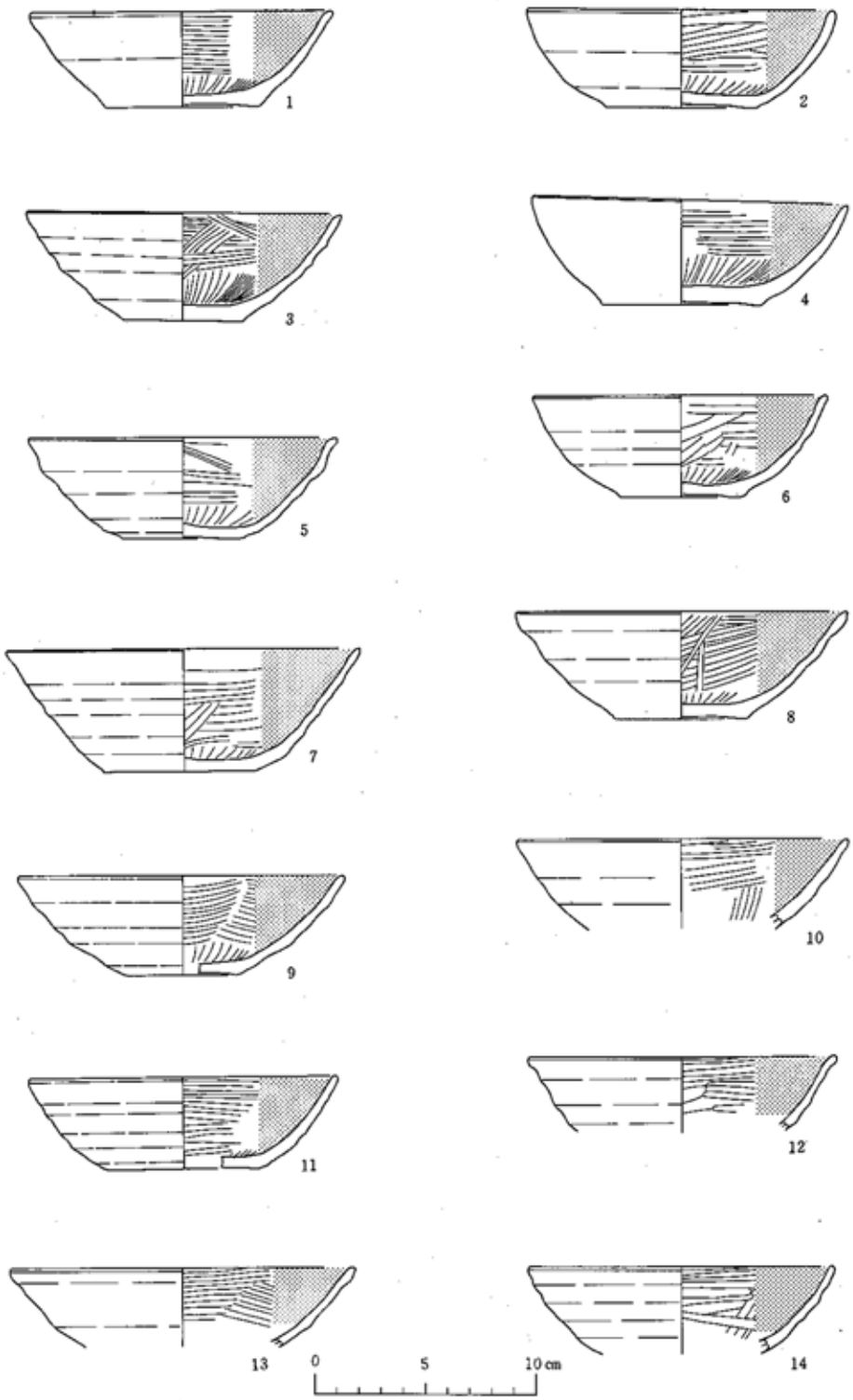
甕（第 18 図 1～3）製作にロクロを使用しないものと使用しているものとがある。前者のものは頚部から口縁部にかけての器形は「く」の字状に屈曲し、口縁部が短いものである。大形、小形のものがある。器面調整は、口縁部には内外面に横ナデが施されている。体部には内外面に刷毛目の施されるものが多く、他に外面にヘラケズリ、内面にナデがみられるものもある。底部は 3 片しかない。すべて筵（なしろ）状圧痕（第 18 図 3）のものである。後者は頚部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲するものとゆるやかに外反するものとがある。いずれも口縁端部は直立している。器面調整は、口縁部から体部まで内外面にロクロ調整のみられるものが多く体部の外面にヘラケズリ、内面にナデがみられるものもある。また、外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理のものもある。

須恵器

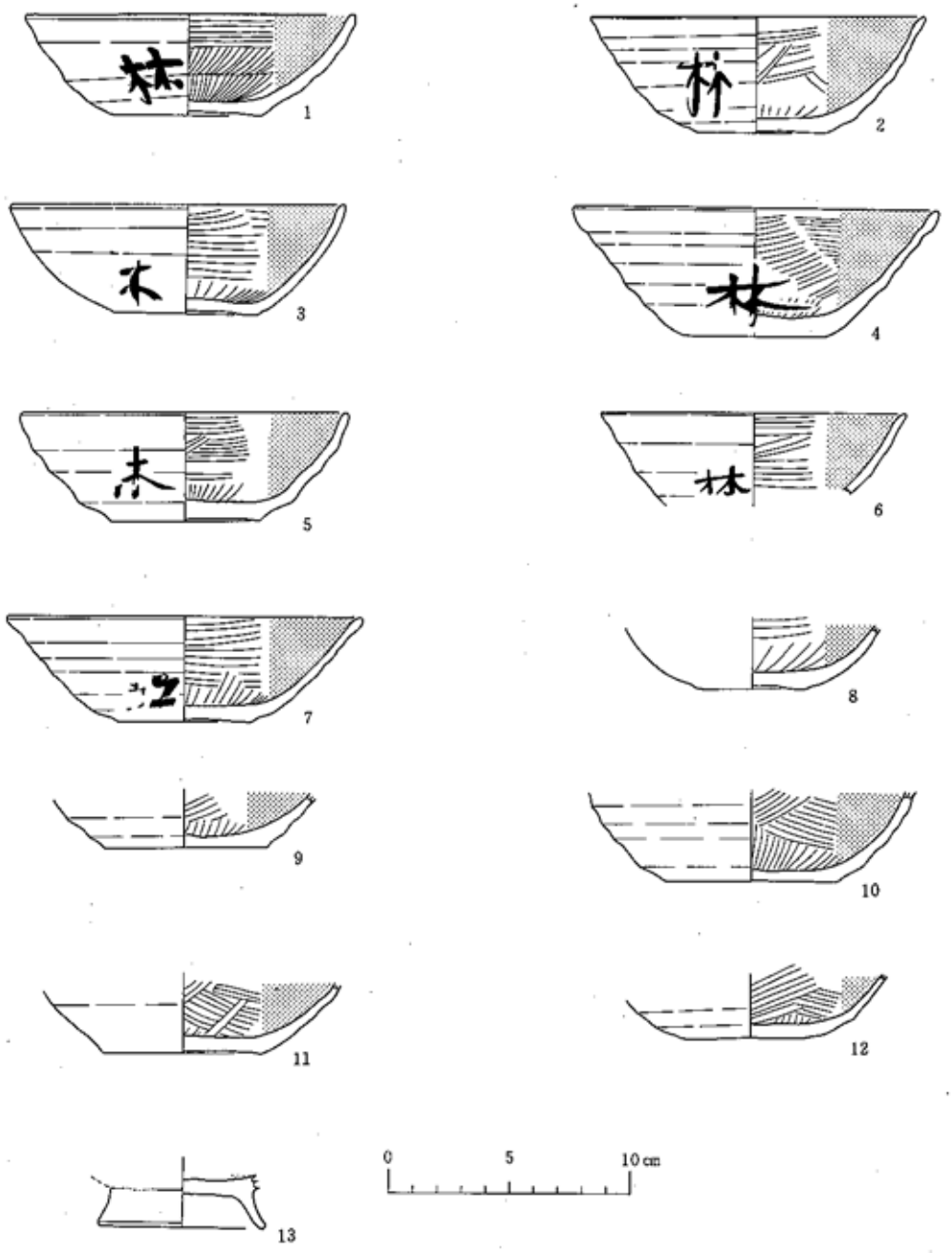
坏（第 16、17 図）完形品は 1 点で、他はすべて破片である。器形は体部から口縁部まで外傾するものである。体部がやや弯曲するものや直線的なものなど、若干違いのあるものもあるが全体的にまとまりを示す。なお、体部下端に手持ちヘラケズリ調整のあるもの（第 16 図 2）がある。底部は回転糸切りの切り離し技法を用いている。ロクロは右回転である。外面に再調整はない。



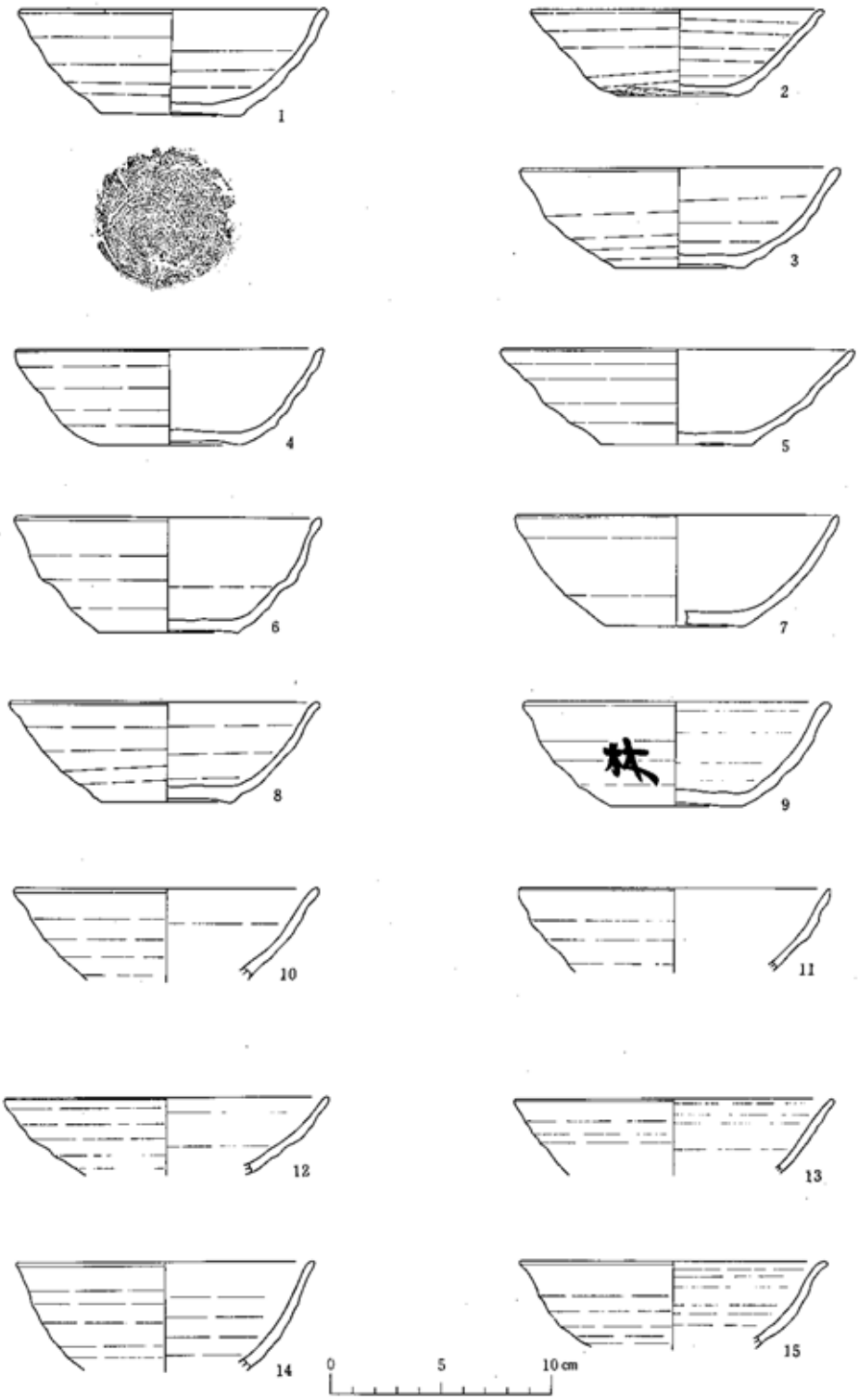
第13図　第１住居跡土壙（ピット４）内出土遺物（土師器・坏１～13）



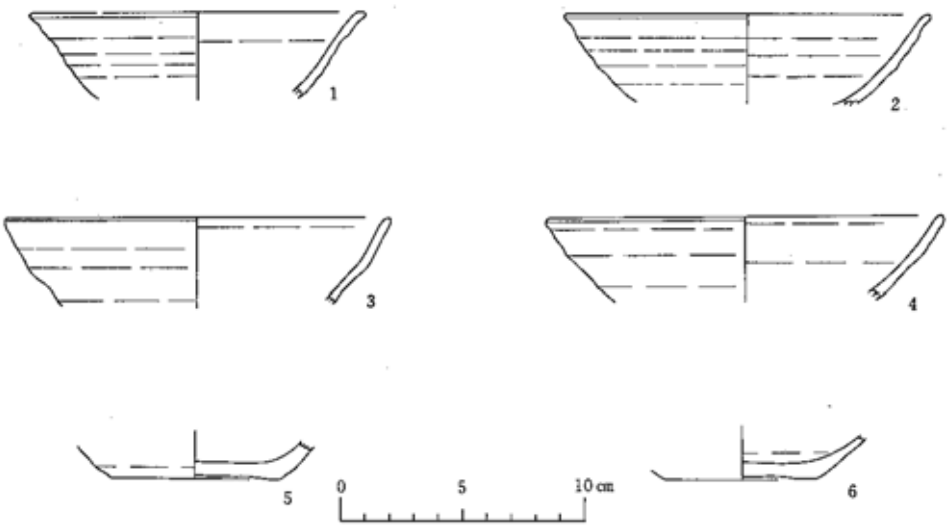
第14図　第１住居跡土壙（ピット４）内出土遺物（土師器・坏１～16）



第15図　第１住居跡土壙（ピット４）内出土遺物（土師器・坏１～12、高台付坏13）



第16図　第１住居跡土壙（ピット４）内出土遺物（須恵器・坏１～15）



第17図　第１住居跡土壙（ピット４）内出土遺物（須恵器・坏１～６）

体部外面に「林」の墨書されたもの（第16図9）1点がある。

甕　いずれも破片である。口縁部から頸部の器形は、頸部がほぼ直立し、口縁部は外反する。口縁上端はやや外方につまみ出されて、縁帯状を呈するものである。器面調整は口縁部から頸部にかけて内外面ロクロ調整である。体部の外面に平行叩き目（第18図6・7）手持ちヘラケズリ、内面にはヘラナデが施されている。第18図5は外面に手持ちヘラケズリ、内面にロクロ調整があり、底部は手持ちのヘラケズリで調整されている。

壷（第18図4）口縁部、頸部の破片である。器形は頸部で直立しながら外傾する。口縁部は外反し、縁帯状に上下につまみ出されているものと、口縁部が外反し、口縁端部で丸味をおびるものがある。器面調整は口縁部から頸部まで内外面ともロクロ調整である。

鉄製品

8は棒状で細く、現存長5.1㎝である。また、断面形は0.9×0.7㎝の長方形で釘と思われる。

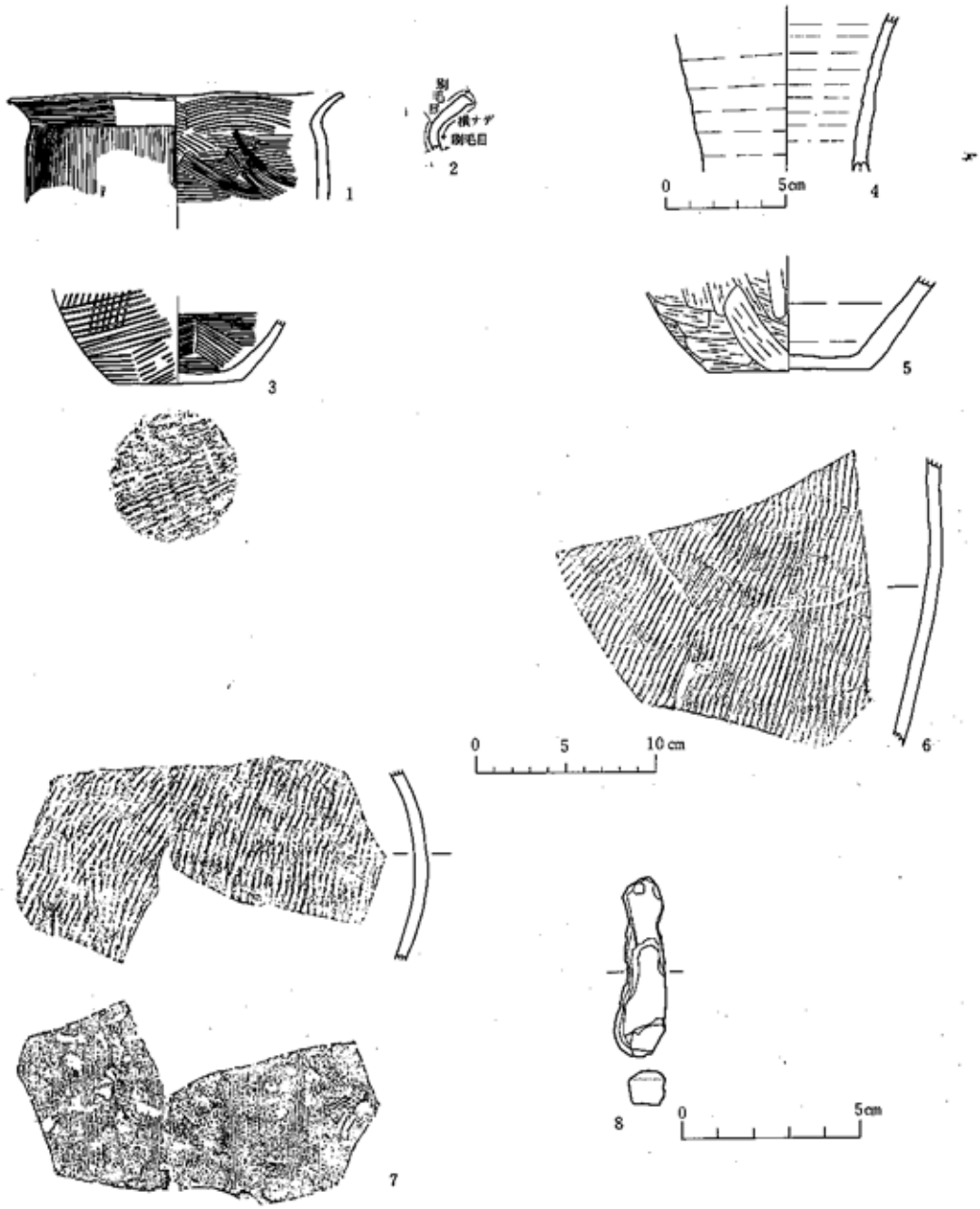
３．焼土遺構

住居跡の東側約3mのところで、Ｃ－35区の地山面で焼土を含む暗褐色土の落ち込みを発見した。平面形はほぼ長方形で規模は長軸0.8㎝×短軸0.6㎝、深さ27㎝のものである。

堆積土は2層に分かれる。

第1層：暗褐色微砂質土で木炭、焼土粒を含みやや粘性があり軟かい。

第2層：黒褐色微砂質土で木炭、焼土を含んでいる。層中に木炭、焼土がブロック状に多量に混入する部分がある。



第18図　第１住居跡土壙（ピット４）内出土遺物

（土師器・甕１～３、須恵器・壺４、甕５～７、鉄製品８）

壁は地山であり、底面からゆるやかに外傾する。また、壁は火熱を受け赤く焼けて硬くなっている。底面は平坦で焼けていない。出土遺物はない。

４．遺構以外からの出土遺物

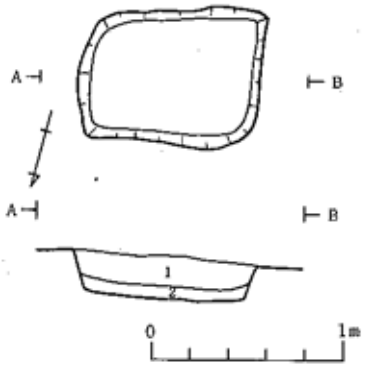
縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品などの出土遺物がある。

縄文土器（第 20 図 1）

いずれも破片である。外面に原体ＬＲの斜行縄文が施され、内面にはかるいミガキがみられる。

石器（第 21 図）

剥片 2 点、石鏃 3 点出土している。なお、住居跡堆積土 1 層より出土した剥片 1 点がある。ここで取り上げることにする。



第19図　焼　土　遺　構

図	名　称	長さ(㎜)	幅　(㎜)	厚さ(㎜)	重さ(ｇ)	石　材	完・不完	地　　区
第21図1	石　　鏃	29.7	19.75	5.55	2.8	粘板岩	不　完	E－35区　1　層
第21図2	石　　鏃	22.7	13.9	4.3	0.85	チャート	不　完	E－35区　1　層
第21図3	石　　鏃	29.25	12.5	3.9	1.0	チャート	不　完	D－29区　2　層
第21図4	剥　　片	27.55	22.6	6.6	2.8	チャート	不　完	F－58区　1　層
第21図5	不定形石器	24.1	28.75	14.55	8.1	チャート	不　完	1住-Dコーナー1層

1・2・3 はいずれも破損品である。1 は無茎、2・3 は有茎の石鏃である。

4 は縦長の剥片で背面には自然面が残っている。

5 はあるいは石核とも考えられる。

土師器（第 20 図）

坏　いずれも破片である。図上復元できるものは 2 点ある。第 20 図 2 は製作にロクロを使用しているものがある。器形は体部から口縁部にやや丸味をもちながら外傾する。器面調整は、外面がロクロ調整、内面がヘラミガキ・黒色処理されている。底部の切り離し技法は回転糸切りである。他の破片については小破片のため器形は明らかでない。器面調整は外面はロクロ調整、内面でヘラミガキ・黒色処理されたものと、黒色処理されたものが脱色しているものも含まれている。底部の切り離し技法は回転糸切りのもの第 20 図 3 と不明なものとがある。

甕　いずれも破片である。図示できたものは 2 点ある。第 20 図 4 は製作にはロクロを使用しないものである。器形は頚部が「く」字状に屈曲し、口縁部は外傾し短かい。器面調整は口縁部で内外面とも横ナデ、体部は内外面とも刷毛目が施されている。第 20 図 5・6 は製作にロクロを使用しているものである。器形は頚部は「く」字状に屈曲し、口縁部は前者よりは短かく端部は上方にややつまみ出されている。器面調整は口縁部、体部とも内外面ともロクロ調整である。また、他の破片では小破片のため器形は不明である。ロクロを使用していないものの器面調整

は体部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデのみられるものもある。底部の破片には底面にヘラケズリ、筵（なしろ）状圧痕のみられるものもある。ロクロを使用しているものの器面調整は体部外面にヘラケズリのされているものがある。

須恵器

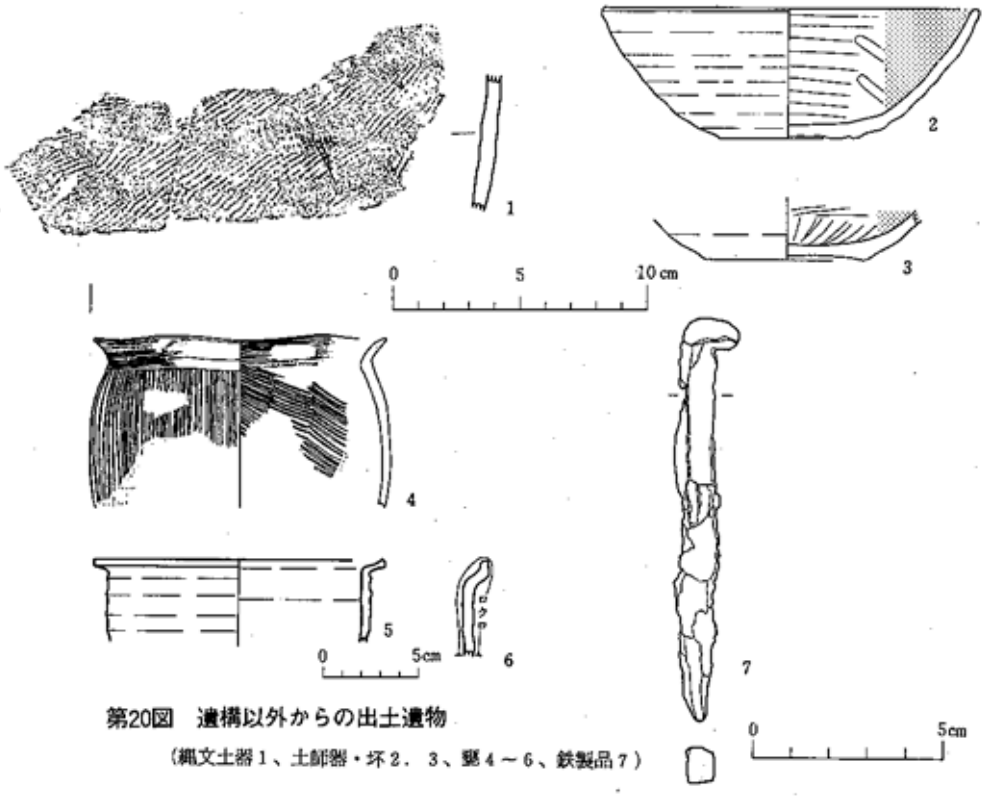
坏　土師器よりも数は少ない。いずれも破片で図化できるものはない。器形は小破片のため不明である。底部の切り離し技法は回転糸切りである。再調整はない。

甕　すべて破片であり器形を知りうるものはない。体部片が多く、器面調整は、外面がヘラケズリ、ロクロ調整、平行タタキ目、内面にはロクロ調整、ヘラナデ、あて目がある。

壺　いずれも破片で器形は不明である。器面調整は内外面ともロクロ調整である。他の体部破片には外面にヘラケズリのあるものもある。

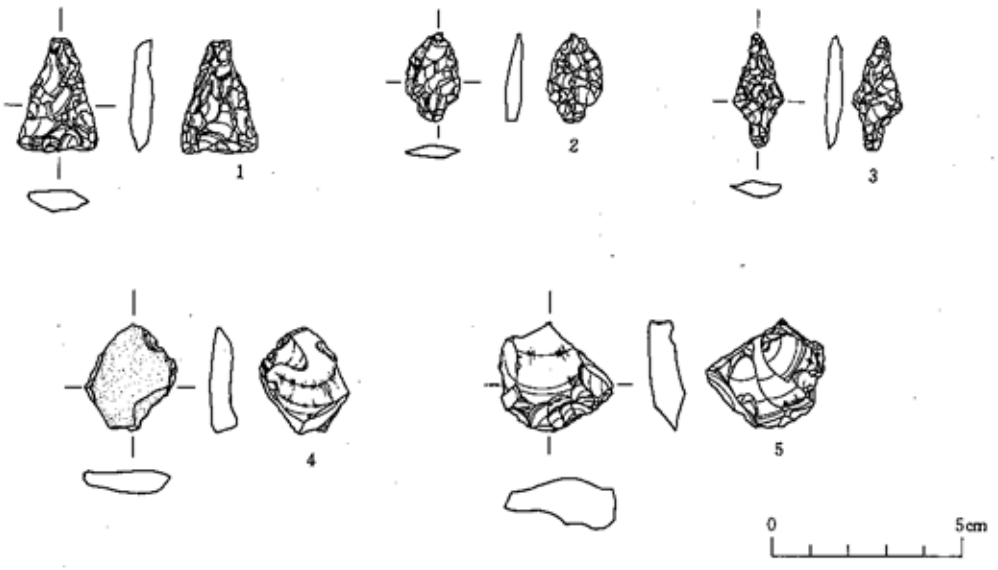
鉄製品（第 20 図）

釘　7 は角釘で現存長 10.7 ㎝でほぼ完形のものである。断面は方形を呈する。頂部は一方に折れ曲がっている。



第20図　遺構以外からの出土遺物

（縄文土器１、土師器・坏２．３、甕４～６、鉄製品７）



第21図　遺構以外からの出土遺物（石器）

Ⅳ. 考　　察

1. 出土遺物

縄文土器、石器、土師器、須恵器、鉄製品がある。このうち、縄文土器、石器はⅢの４ですでに述べてきたので、ここでは省略する。

(1)．土器の分類

ここでは遺構および遺構以外から出土した土器を分類する。分類に使用した土器は図示できたものである。

土師器

土師器の大半は第１住居跡から出土している。

坏　分類に使用できる個体は 30 点である。そのいずれも器形、器面調整等の諸特徴は一致している。製作にロクロを使用しているもので、器形は体部から口縁部まで全体に外傾するものである。底部には回転糸切り痕をのこす。ロクロは右回転である。器面調整は外面は体部から口縁部まで明瞭なロクロ調整痕が認められる。内面はヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は上半で横、下半は放射状のものが多い。また、外面に「林」など墨書のみられるものがある。

なお、摩滅、風化等のため不明なものは分類から除外した。

高台付坏　器形が明らかなものは１点だけである。製作にロクロを使用しているものである。坏部は体部から口縁部まで浅く外傾するもので、器面調整は体部から口縁部まで外面がロクロ調整、内面がヘラミガキ・黒色処理されている。底部の切り離し技法は高台接合時の調整のため不明である。高台は付高台である。

なお、小破片のため器形は不明であるが、底部に回転糸切り痕をのこすものもある。

甕　完形品はない。製作にあたってロクロを使用していないもの（A類）と使用しているもの（B類）にわけられる。

〈甕A類〉

頚部が「く」字形にくびれ、口縁部が外傾し、短い口縁部がつく長胴形の甕である。器面調整は口縁部の内外面は横ナデのものが多いが、内面に刷毛目のみられるものもある。体部は内外面とも刷毛目である。大形のもの(ＡⅠ類)と小形のもの(ＡⅡ類)とがある。なお、体部破片によると外面の器面調整はヘラケズリのもの、内面にヘラナデの施されているものがあるが、量的には少ない。また、底部破片によると底面に筵(むしろ)状圧痕やヘラケズリのものがみられるが、前者の方が量的に多く特徴的である。なお、本類体部片には刷毛目やヘラケズリ等の再調整のため、ロクロ調整痕が消されているものを含んでいる可能性がある。

〈甕B類〉

ロクロを使用しているものである。口縁部形態により2つにわかれる。

ＢⅠ類　頚部が外反し短かい口縁部がつくものである。端部が丸味をもつものと端部上端がやや立ち上がるものなどがある。器形は大型のもので長胴形である。器面調整は口縁部、体部とも内外面にロクロ調整のものが多い。

ＢⅡ類　口縁部は外反し、端部が直立するものである。器形は小型である。器面調整は口縁部、体部とも内外面でロクロ調整である。なお、小破片のため器形は不明であるが、体部の外面にヘラケズリ、内面に刷毛目、わずかにヘラミガキ・黒色処理されたものがある。これらは内外面いずれかにロクロ調整されている。

底部片には回転糸切り痕がみられる。小破片のため器面調整は不明である。

須恵器

量的に少ない。

坏　器形は体部から口縁部にかけ外傾するものである。底部切り離し技法は回転糸切りでロクロは右回転である。再調整があるものとないものとの2種類に区分する。

A類－再調整のあるものである。体部下端に手持ちのヘラケズリによる再調整がわずかに認められる。

B類－再調整のないものである。体部外面に「林」が墨書されているものがある。

台付坏

小破片一点のみである。器形は不明である。高台は付高台である。

甕・壷

出土量が少なく、また、小破片で器形の明らかなものは少ないため分類作業は行なわない。

甕には大・小があり、壺には長頚壺が含まれている。

以上のように分類したが、それらのうち類別可能であつたものは土師器甕、須恵器坏である。両者の図示した土器を前記の分類にあてはめると第2表のようになる。

第２表　図示遺物分類表

図版番号	出　土　地　点	種　別	器形	分類	図版番号	出　土　地　点	種　別	器形	分類
7図1	第1住居跡埋土	土師器	坏		4	第1住居跡土壙(ピット4)	土師器	坏	
2	〃	〃			5	〃	〃	〃	
3	〃	〃			6	〃	〃	〃	
4	〃	〃			7	〃	〃	〃	
5	〃	〃			8	〃	〃	〃	
6	〃	〃			9	〃	〃	〃	
7	〃	〃		B	10	〃	〃	〃	
8	〃	須恵器	坏		11	〃	〃	〃	
9	〃	土師器	〃		12	〃	〃	〃	
10	〃	〃	高台付坏		13	〃	〃	〃	
11	〃	須恵器	坏	A I	14図1	〃	〃	〃	
8図1	〃	土師器	甕	A II	2	〃	〃	〃	
2	〃	〃	〃	B I	3	〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃		4	〃	〃	〃	
4	〃	〃	〃		5	〃	〃	〃	
5	〃	須恵器	〃		6	〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃		7	〃	〃	〃	
7	〃	〃	〃		8	〃	〃	〃	
8	〃	〃	壺		9	〃	〃	〃	
9	〃	〃	〃		10	〃	〃	〃	
10図1	第1住居跡面床	土師器	坏		11	〃	〃	〃	
2	〃	〃	〃		12	〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃		13	〃	〃	〃	
4	〃	〃	〃		14	〃	〃	〃	
5	〃	須恵器	甕		15図1	〃	〃	〃	
11図1	第1住居跡カマド	〃	〃		2	〃	〃	〃	
2	〃	〃	〃		3	〃	〃	〃	
12図1	第1住居跡ピット1	土師器	高台坏		4	〃	〃	〃	
2	第1住居跡ピット3	〃	坏		5	〃	〃	〃	
13図1	第1住居跡土壙(ピット4)	土師器	〃		6	〃	〃	〃	
2	〃	〃	〃		7	〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃		8	〃	〃	〃	

図版番号	出土地点	種別	器形	分類	図版番号	出土地点	種別	器形	分類
15図9	第1住居跡土壙(ピット4)	土師器	坏		17図2	〃	〃	〃	
10	〃	〃	〃		3	〃	〃	〃	
11	〃	〃	〃		4	〃	〃	〃	
12	〃	〃	〃		5	〃	〃	〃	
13	〃	土師器	鉢形坏		6	〃	〃	〃	
16図1	〃	須恵器	坏	B	7	〃	〃	〃	
2	〃	〃	〃	A	8	〃	〃	〃	
3	〃	〃	〃	B	18図1	〃	土師器	甕	A I
4	〃	〃	〃	B	2	〃	〃	〃	A I
5	〃	〃	〃	B	3	〃	〃	〃	
6	〃	〃	〃	B	4	〃	須恵器	壺	
7	〃	〃	〃	B	5	〃	〃	甕	
8	〃	〃	〃	B	6	〃	〃	甕	
9	〃	〃	〃	B	7	第1住居跡土壙(ピット4)	須恵器	甕	
10	〃	〃	〃		20図2	グリッド E-33	土師器	坏	
11	〃	〃	〃		3	H-68	〃	坏	
12	〃	〃	〃		4	H-66	〃	甕	A II
13	〃	〃	〃		5	D-29	〃	〃	B II
17図1	〃	〃	〃		6	E-53	〃	〃	B II

(2)．土器の組み合せ

組み合せ関係を検討できる出土状態のものは第1住居跡にともなう床面、カマド内、遺構に伴うピット）遺物である。これらの遺物について組み合せ関係を考察する。ただし、カマド内出土土器は住居使用時、床面および遺構に伴うピット出土の遺物は住居使用時または廃絶時期を示すとみられるものである。したがって、若干の時間的差違もあると考えられるが、その時期差は極めて近接していると思われるので、一括して述べる。第3表にあるように出土土器はすべて共伴関係にあるといえる。

第3表　出土土器組み合せ表

		土師器						須恵器				
		坏	高台付坏	甕 A I	甕 A II	甕 B I	甕 B II	坏 A	坏 B	高台付坏	甕	壺
第1住居跡	床面・カマド・柱穴	○	○	○	○	○	○		○	○	○	○
	土　坡（ピット4）	○	○	○	○	○	○	○	○		○	○

(3)．土器の年代的考察

さて東北地方における土師器、須恵器の編年的研究は加藤孝、氏家和典、岡田茂弘、桑原滋郎、阿部義平、小笠原好彦等各氏によってなされている。土師器の編年は坏を中心におこなわれてきている。本遺跡の主体をしめる土師器坏はすべてロクロを使用していることにより、いわゆるロクロ土師器坏（桑原：1970）に含まれる。また氏家氏による編年（氏家：1957）によれば第7型式（表杉ノ入式）に比定される。さらに小笠原氏が平安時代の土師器の細分を試みたが、それによると本遺跡出土の坏は同氏の第2類（小笠原：1976）にあたると考えられる。ただし、本遺跡では坏以外の器形のものも出土している。それらについてこれまであまり検討されていなかったものである。本遺跡においても出土量が少なく、不明な点もあるが、これらもくわえて若干の考察を試みたい。

本遺跡における組み合せに坏、台付坏、甕がある。甕には大小の別があるが、小破片のため法量等において明確に区別することができなかったものもある。このような組み合せ関係を前段階の国分寺下層式期の組み合せ関係と比較して、著しい違いが認められる。たとえば、国分寺下層式期の土器を出土した栗原郡志波姫町糠塚遺跡では坏6器種、甕7器種にわけられるのに対して本遺跡では坏1器種、甕4器種に類別される。この間の整理、統合の現象はロクロ技術の導入が強い要因となったものと考えられる。なお、本遺跡出土土器のうち大型と思われる甕にはロクロ使用のものはみられない。ロクロ使用のものは坏、台付坏、小型の甕といった小型のものに限定される。このようなロクロ使用の有無については前記糠塚遺跡や栗原郡金成町佐

野遺跡にも同様なことが認められる。甕の口縁部が短いものが多い。また底部破片では筵(ないろ)状圧痕のみられるものが、ヘラケズリ、回転糸切りの切り離し技法をもつものより多くみられ、特徴的である。このことは他の類例をまって検討を加えたい。

以上のことから、すべての甕にロクロ技術が導入されたわけではなく、ロクロを使用している坏に伴い、ロクロを使用しない甕が依然として存在していた状態にあるといえる。現在、表杉ノ入式の坏の中でヘラ切りあるいは糸切りの切り離し技法を用いた後に底部及び、体部下端にヘラケズリされるものがあるが、ないものに先行することが明らかになっており、本遺跡の状態は糸切りの切り離し技法の最盛期の状態を示していると考えられる。ここで同時期の刈田郡蔵王町東山遺跡の例をみると土師器坏は回転糸切りに再調整のあるものとないものが含まれている。したがって本遺跡の土師器は東山遺跡より技術的には新しい状態を示すものといえる。これらのことからみると再三指摘されているように表杉ノ入式は細分される可能性があり、今後の検討により、本遺跡出土の土師器はさらに明確な年代的な位置づけがあたえられるであろう。

つぎに須恵器の組み合せ関係についてみると、坏では糸切りの切り離し技法をもつもので再調整のあるものとないものが共伴しているのが、前者の出土は1点のみである。それもごく一部に限られ、みられるものである。このことをこれまでの須恵器坏の技法上の研究に照合すると再調整のあるものはないものに先行することが明らかとなっているが、本遺跡の須恵器坏は技法上、ほぼ再調整がなくなる時期に位置づけられるであろう。また台付坏、甕、壺については量的には少なく詳細には検討できないが、坏との共伴関係が明らかなことから、これらの土器も同時期に比定されると考えられる。

このように本遺跡から出土した土師器、須恵器がすべて共伴関係にあることが明らかとなり、土師器坏はその編年的位置から表杉ノ入式に考えられる。したがってこれらの土器群は大まかに考えて平安時代に属するものである。

(4)鉄製品

前項で述べたように種々の鉄製品がある。その中でヘラ状のものに鋲がつくもの(第10図7)がある。これに類似した出土品の例としては神奈川県茅ヶ崎市篠谷横穴群第13号横穴出土の鉄製品がある。これは平安時代の鞍金具の一部と考えられている。よって本遺跡のものも同様なものと考えれば、住居跡の床面より出土している土器と共伴関係にあり、上記と同年代に比定される。

2. 遺構について

(1)第1住居跡

床面、カマド、遺構内のピットから出土したものから表杉ノ入式期に属するものであり、年

代は平安時代である。

平面形、床面、壁については他の同年代の住居跡と同様なので差違の認められるものについて記述する。

北半にみとめられるピット 1 とピット 2 の柱痕は検出されなかった。掘り方の平面形は異なり、ピット 1 はほぼ方形であり、ピット 2 は楕円形で規模、深さ、掘り方の堆積土がほぼ同じである。また各壁より対象的な位置にあることから同一のものである。住居跡内部の配置や状況から主柱穴と考えられる。また、壁にそって 13 個のピットがみられる。これらの配置をみると一定の規則性が認められる。北東、北西、南西隅には 2 個 1 対のピットが配されている。南東隅には 1 個であるが存在する。さらに東西北壁の中央部には 1 個づつみられる。また南壁には 3 個のピットがみられ、これらのうち 2 個（ピット 5、ピット 17）は住居内部に向う張り出しの両端に対応しており、ピット 7 は張り出しの西側にある。したがってピット 5 とピット 17 は同様の性格をもち、ピット 7 は各壁中央部にみられるピット同様の性格をもつものと考えられる。以上のことから壁柱穴と考えられる。またピット 5 とピット 17 は張り出しに伴ったものと考えられ、張り出しと伴に出入口の施設である可能性が考えられる。なおピット 3 もこれに関係するものであろう。

東南隅にある土壙（ピット 4）は住居跡内にある他のピットの平面形、規模、深さに比べ違いが多い。完形の土器が堆積土下部より出土し、上部からも多量の土器が出土していることから貯蔵穴と考えられる。これに類似した例は白石市家老内遺跡第 1、8 号住居跡、柴田郡村田町西原遺跡第 2 号住居跡、栗原郡築館町木戸遺跡第 1 号住居跡などにみられる。

(2)焼土遺構

出土遺物はなく、年代不明である。性格は不明であるが、壁が焼けていることから、火を使用した施設であることは明らかである。このような例は亘理郡亘理町宮前遺跡、栗原郡志波姫町御駒堂遺跡、栗原郡高清水町下折木遺跡などにみられるが、現時点ではその性格は明らかでない。

3. 墨書土器について

これまで述べてきた土師器、および須恵器の坏には外面に墨書されたものがみられる。「林」の字体の墨書のあるものが 7 点ある。そのうち土師器に 6 点、須恵器に 1 点ある。また「 」の字体の墨書のあるものが土師器に 1 点ある。

上記の文字が意味するものとしては一般的には名字または地名が考えられる。名字としては「林連廣山（常陸国司）」がある。（文献 12、13）また地名としては甲斐卿第 81 国の中に山梨郡の「林部」・「林戸」がみられる。（文献 15）が、本遺跡周辺にはこれに該当する地名等はみあたらない。県内では多賀城跡より、回転糸切りの切り離し技法で、体部下端に手持ちヘラケズリの須恵器の坏数点にヘラ書きで「林」が書かれたものが出土している。しかし、集落跡から

の出土例はなく、また、これらに関する研究はまだ確立されていないのでこれらの類例の増加をまって検討したい。

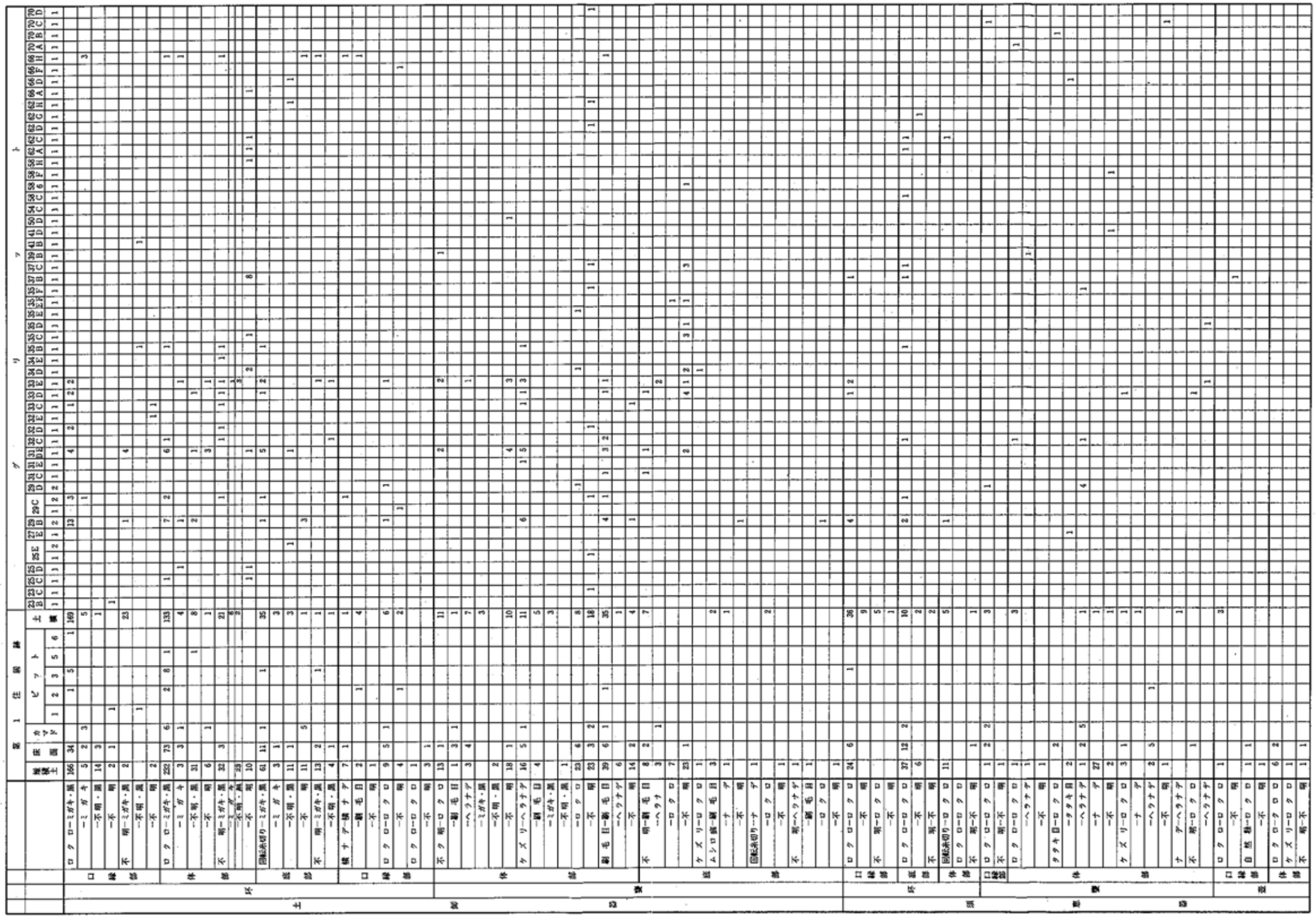
Ⅴ．まとめ

1. 本遺跡は縄文時代、平安時代の複合遺跡である。
2. 今回の調査によって発見された遺構は住居跡１軒で表杉ノ入式期にあたる。ごく大まかであるが平安時代に位置づけられる。また焼土遺構１基は出土遺物もなく、年代、性格などは不明である。
3. 出土遺物はわずかに縄文時代の土器、石器が出土していることから、同時代の遺構の存在が予想される。また土師器、須恵器がまとまって出土しており、特に墨書された土器が多く出土していることが注目される。これらの土器群は表杉ノ入式期のものであり、今後の土器の編年的作業に用いる資料に活用できる。
4. 遺構のあり方、出土遺物の分布などから遺跡の範囲は、今回発掘した道路敷以外にものびていることが考えられる。その面積は遺跡ののる残丘状地形一円約４万㎡におよぶことが予想される。

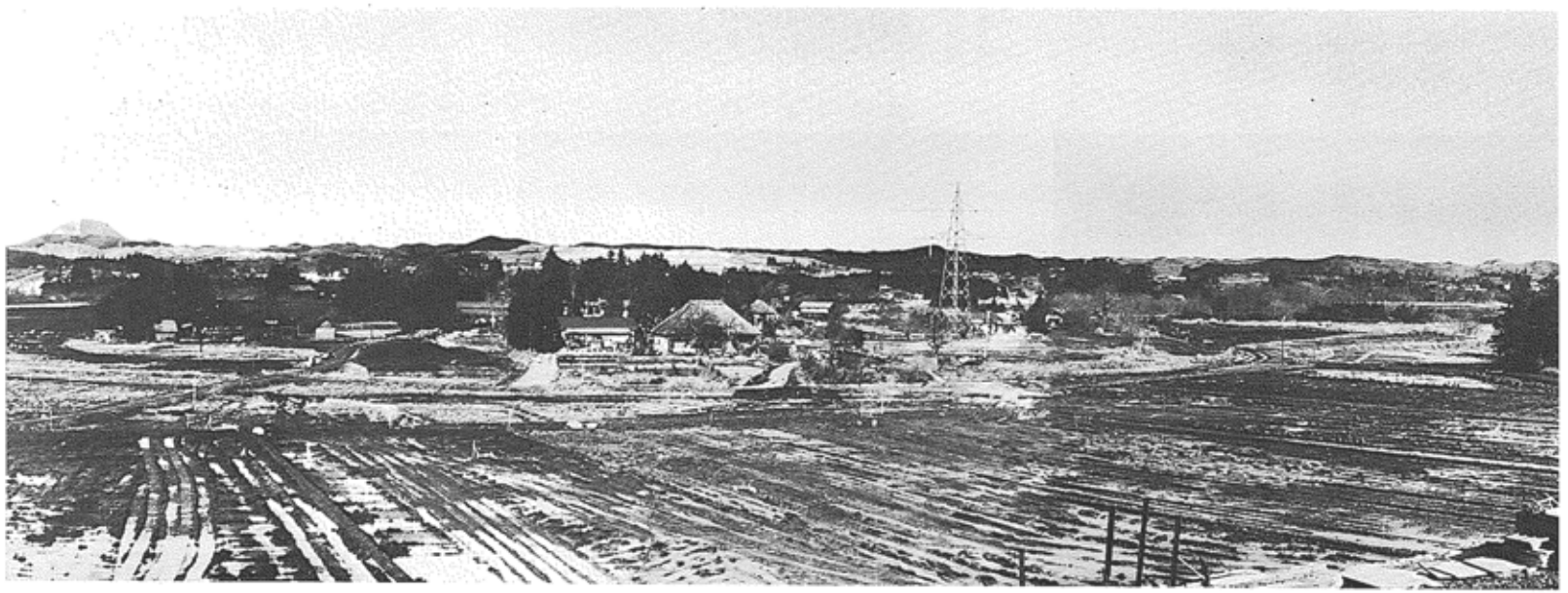
引用・参考文献

(1) 阿部　義平（1968）：「東国の土師器と須恵器－多賀城外の出土土器をめぐって－」帝塚山考古学№.1
(2) 岩淵　康治（1972）：「西原遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市・柴田郡村田町地区）
宮城県文化財調査報告書第25集
(3) 氏家　和典（1957）：「東北土師器の型式分類とその編年」歴史第14輯
(4) 岡田　茂弘（1974）：「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」宮城県多賀城跡調査研究紀要Ⅰ
桑原　滋郎
(5) 小笠原好彦（1976）：「東北における平安時代の土器についての2、3の問題」東北考古学の諸問題
(6) 太田　昭夫（1979）：「中平遺跡」宮城県文化財発掘調査概報（昭和53年度分）
宮城県文化財調査報告書第57集
(7) 加藤　　孝（1954）：「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」宮城学院女子大学研究論文集Ⅴ
(8) 桑原　滋郎（1970）：「ロクロ土師器坏について」歴史第38輯
(9) 小井川和夫（1978）：「糠塚遺跡」宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）
手塚　　均　　宮城県文化財調査報告書第53集
(10) 佐藤　庄一（1972）：「家老内遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（白石市・柴田郡村田町地区）
宮城県文化財調査報告書第25集
(11) 白鳥　良一（1971）：「東山遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査概報（刈田郡蔵王町地区）
高野　芳宏　　宮城県文化財調査報告書第24集
(12) 竹内　理三（1968）：日本古代人名辞典第5巻　吉川弘文館
山田　英雄
平野　邦雄
(13) 竹内　理三（1969）：寧樂遺文　下巻　東京堂出版
(14) 田中　則和（1973）：「宮下遺跡」東北自動車道関係遺跡発掘調査略報（白石市・仙台市～大和町地区）
宮城県文化財調査報告書第31集
(15) 早坂　春一（1978）：「安久東遺跡」宮城県文化財発掘調査略報（昭和52年度分）
宮城県文化財調査報告書第53集
(16) 増辺　　弥（1972）：和名類聚抄郷名考證　増訂版　吉川弘文館
(17) 紫山遺跡発掘調査団（1977）：「紫山遺跡発掘調査概報」
(18) 神奈川県教育委員会（1975）：「茅ヶ崎市篠谷横穴群」神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告8
(19) 宮城県教育委員会（1975）：「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第38集
(20) 宮城県教育委員会（1975）：「佐野遺跡」宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）
「下折木遺跡」宮城県文化財調査報告書第40集
(21) 宮城県教育委員会（1977）：「御駒堂遺跡」宮城県文化財発掘調査略報（昭和51年度分）
「木戸遺跡」宮城県文化財調査報告書第48集

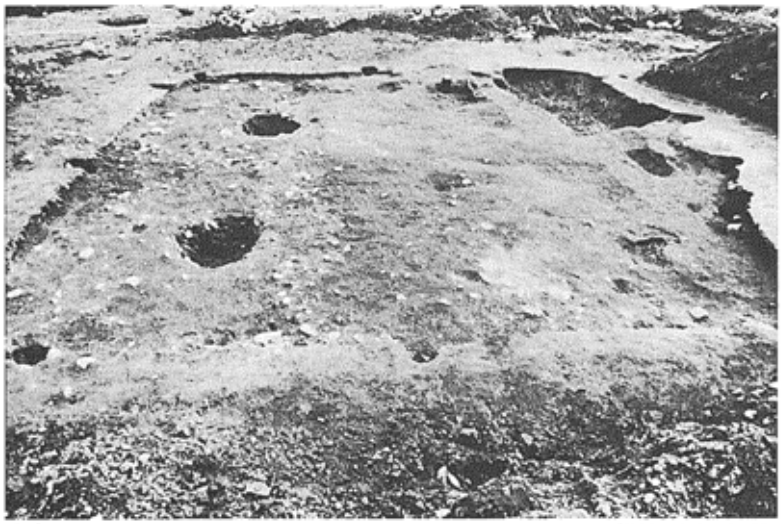
第4表　土器破片集計表



写　真　図　版

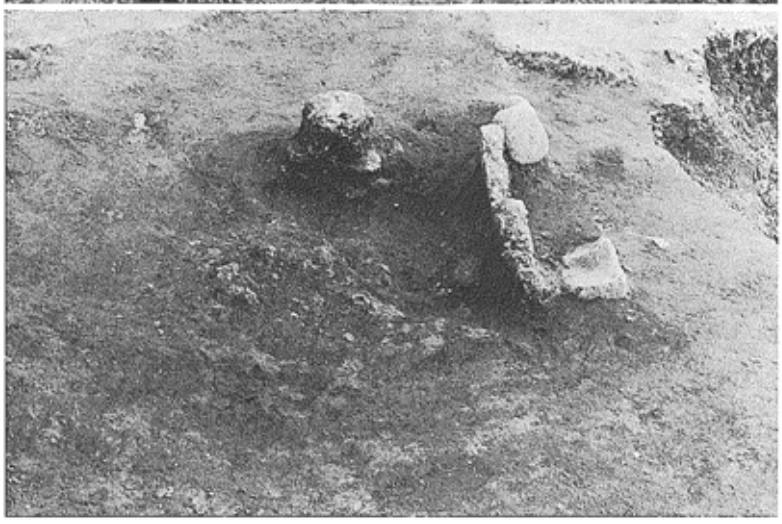


図版１　１．宮下遺跡遠景（南方向より）



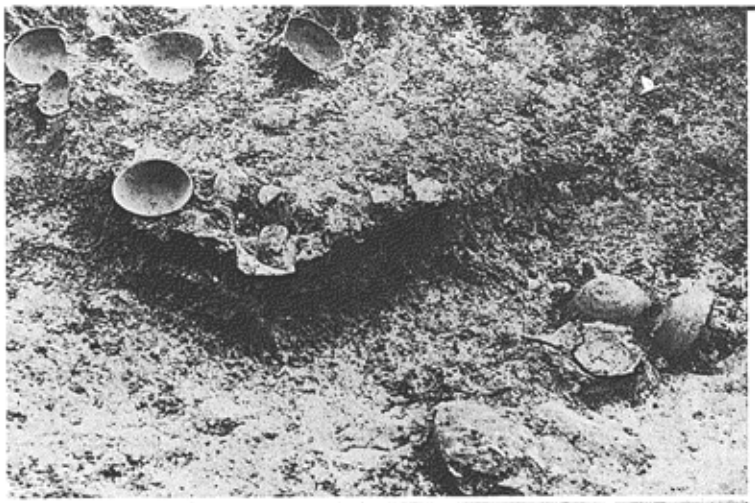
1．第１住居跡
（西方向より）

2．第１住居跡
（北方向より）

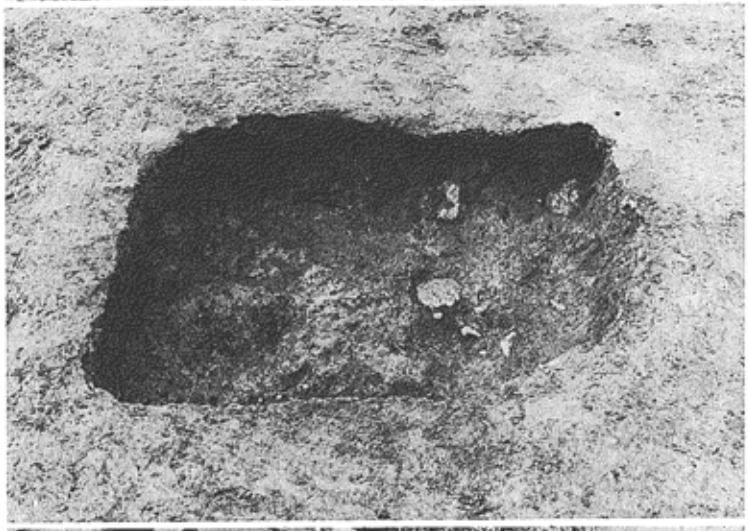


3．カマド

図版２　第１住居跡



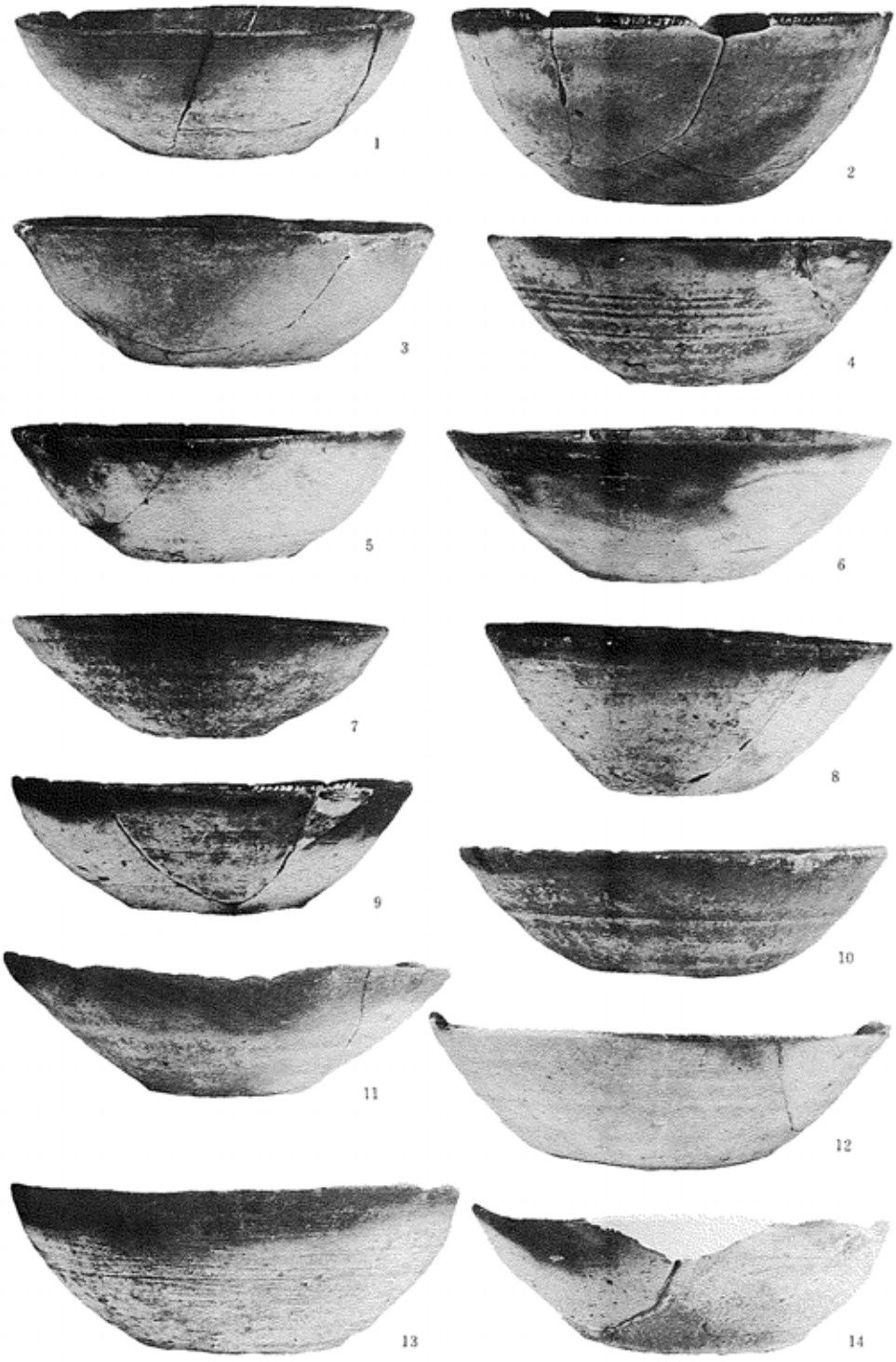
1．土壙（ピット4）の出土遺物状況



2．焼土遺構

3．発掘調査風景

図版3



図版4　土師器坏

1：第13図2　6：第13図6　11：第13図12
2：第13図3　7：第13図7　12：第13図11
3：第13図4　8：第13図8　13：第13図13
4：第13図1　9：第13図9　14：第14図1
5：第13図5　10：第13図10　（縮尺不同）

1

2

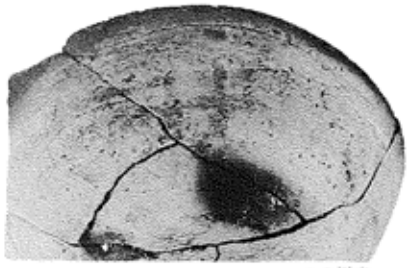
3

4

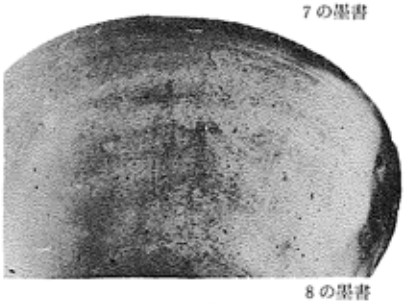
5

6

7


7の墨書

8


8の墨書

9

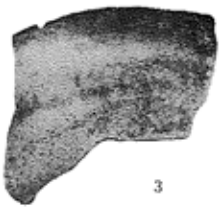
9の墨書

1：第14図2　6：第14図7
2：第14図3　7：第14図1
3：第14図4　8：第15図2
4：第14図5　9：第15図3
5：第14図6　（縮尺不同）

図版5　土師器坏

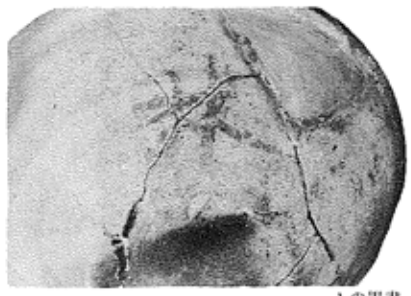
1

2


3

4

5


1の墨書

2の墨書

6

7

8

9

10

11

11

1：第15図4　5：第16図1　9：第16図6
2：第15図5　6：第16図2　10：第16図8
3：第15図6　7：第16図3　11：第16図9
4：第15図7　8：第16図4　（縮尺不同）

図版6　土師器・須恵器坏

1：第8図1　6：第9図4　11：第12図3
2：第11図1　7：第9図5　12：第18図8
3：第10図5　8：第9図6　13：第10図7
4：第8図9　9：第10図6　（縮尺不同）
5：第9図3　10：鉄滓

図版7　土師器・須恵器甕、鉄製品

1：第18図1　6：第20図4　11：第21図3
2：第18図5　7：第20図5　12：第21図4
3：第18図3　8：第20図7　13：第21図5
4：第18図6　9：第21図1　（縮尺不同）
5：第20図2　10：第21図2

図版８　土師器甕、須恵器甕・壺、鉄製品、石製品